長野県飯山市旭町遺跡群

北原遺跡調査報告書

1980. 6

飯山市教育委員会

長野県飯山市旭町遺跡群

北原遺跡調査報告書

1980. 6

飯山市教育委員会

序　　文

飯山市は，長野県の最北部に位置し，豪雪地帯ではありますが，古くから多くの人々によって生活が営まれて，多数の遺跡が残されております。

近年，社会の急激な変化によって開発事業がさかんに行なわれておりますが，一方祖先が残した貴重な文化財が破壊され，失われることは誠に残念なことであります。永い歴史に埋れた先人の文化を知り，これからの文化の創造に役立てることはもちろん，これを大切に保存して後世に伝えることは，私達に課せられた大きな責務であると思います。

昭和53年度に実施いたしました旭町遺跡群北原遺跡の調査は，平安時代の鍛冶炉址等を発見し，その成果の一部は既に写真集として公表されているところであります。

ここに所期の目的を達することができましたことは，調査団長高橋桂先生をはじめとする調査員諸氏の献身的努力の賜と衷心より敬意と感謝を申し上げます。

終りに，本調査報告書が埋蔵文化財に対する理解を一層深める上で役立つとともに，教育・研究の資として多くのみなさまに広く活用されることを祈念いたします。

飯山市教育委員会

教育長　　田　中　清　市　郎

例　　言

1　本書は，県営圃場整備事業に伴う旭町遺跡群北原遺跡発掘調査報告書である。

2　旭町遺跡群北原遺跡は，長野県飯山市大字旭字北原5369番地等に所在する。

3　発掘調査は北信土地改良事務所の依頼を受けて，飯山市教育委員会が事業主体となり，昭和53年4月26日～7月10日にかけて実施した。調査会組織は第Ⅰ章に別掲してある。

4　発掘調査及び出土品の整理にあたっては，次の先生方の御教示と御指導を賜った。

樋口清之（国学院大学教授）
永峯光一（国学院大学講師）
桐原　健（長野県史刊行会）

5　発掘調査及び報告書作成にあたっては，次の諸氏の御参加，御協力をいただいた。

金井正三（須坂市教育委員会）
大原正義（千葉県文化財センター）
太田文雄（千葉県文化財センター）
広瀬昭弘（国分寺市教育委員会）
西沢隆治（我孫子市教育委員会）
（4，5における職名は昭和53年度におけるものである）

6　本書は高橋桂団長以下，青木剛，望月静雄が執筆した。執筆分担は以下のとおりである。

青木　剛　　第Ⅰ章
望月静雄　　第Ⅲ章～Ⅵ章
高橋　桂　　第Ⅱ章，Ⅶ章

7　編集は高橋桂，望月静雄が行なった。

凡　　例

1　本書中における遺構番号等は調査時において発掘順にNoを附したものであるが，整理時に2，3の遺構については変更している。

2　遺構実測図について

イ　縮尺は，住居址$^{1}/_{30}$土壙$^{1}/_{40}$，井戸址$^{1}/_{40}$，掘立柱建築址$^{1}/_{80}$～$^{1}/_{90}$を原則としたが，19・40・41号土壙は$^{1}/_{20}$の縮尺である。

ロ　平面レベルは，海抜標高349.50mで統一したが，都合上出来なかった遺構は記載した。（B地区除く）

ハ　土層において，網点のトーンを施してあるのは粘土を示し，斑状のトーンは焼土及び粘土混じり焼土を示す。

3　遺物実測図について

イ　土器・土製品は¼で，木製品は⅓の縮尺を原則としている。

ロ　土器の断面を黒く塗り潰してあるものは須恵器を示し，何も施してないものは土師器を示す。また，内面に網点のトーンを施したものは黒色であることを示している。木製品における斑状のトーンは焼き焦しを示す。

4　遺物分布図で，実線で結んだものは接合関係にあることを示す。

本文目次

序にかえて
序　文
例　言
凡　例
第Ⅰ章　調査に至るまでの経過……2
第Ⅱ章　環境……5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……7
第Ⅲ章　調査経過……9
第Ⅳ章　層序と文化層……12
第Ⅴ章　発見した遺構と遺物……15
　A地区……15
　第１節　住居址……15
　第２節　土壙（鍛冶炉址・甕棺墓）……18
　第３節　井戸址……41
　第４節　掘立柱建築址……47
　B地区……49
　第１節　遺構……49
　第２節　遺物……51
第Ⅵ章　成果と課題……55
　第１節　遺物の出土状態について……55
　第２節　遺構について……58
　第３節　遺物について……59
第Ⅶ章　まとめ……67

挿図目次

第１図　北原遺跡と周辺遺跡分布図……6
第２図　グリット設定図……10
第３図　土層柱状図……12
第４図　遺構分布図……13
第５図　第１号住居址……15
第６図　第２号住居址……16

第７図　第２号住居址竈……16
第８図　第２号住居址遺物分布図……17
第９図　第２号住居址出土遺物……17
第10図　土壙（１，２号）……18
第11図　第１・２号土壙出土遺物……19
第12図　土壙（３～８号）……20
第13図　第３～８号土壙出土遺物……21
第14図　第９号土壙・遺物分布図……22
第15図　第９号土壙出土遺物……22
第16図　第14号土壙出土遺物……25
第17図　土壙（10～15号）……24
第18図　第19号土壙遺物分布図……26
第19図　土壙（16～18，20，23～25号）……27
第20図　第16号～24号土壙出土遺物……28
第21図　土壙（21，22，26～28，32号）……30
第22図　第25号～27号土壙出土遺物……31
第23図　土壙（29～31，33～37号）……32
第24図　第32号，35号，36号土壙出土遺物……33
第25図　第41号土壙出土遺物……35
第26図　第40号土壙遺物分布図……36
第27図　第41号土壙遺物分布図……36
第28図　土壙（38，39，42号）……37
第29図　第42号土壙遺物分布図……38
第30図　第42号土壙出土羽口……39
第31図　第42号土壙出土遺物……40
第32図　第１・２号井戸址……41
第33図　第２号井戸址遺物分布図……42
第34図　第１号井戸址出土遺物……43
第35図　第２号井戸址出土遺物（１）……44
第36図　第２号井戸址出土遺物（２）……45
第37図　第２号井戸址出土遺物（３）……46
第38図　第１・２号掘立柱建築址……47
第39図　第３・４号掘立柱建築址……48
第40図　Ｂ地区遺構分布図……49
第41図　Ｂ地区土壙……50
第42図　Ｂ地区出土遺物（１）……52

第43図　B地区出土遺物（2）……53
第44図　B地区出土遺物（3）……54
第45図　土壙（16・17号）遺物分布図（1）……55
第46図　土壙（5～8・20号）遺物分布図（2）……56
第47図　土壙（23・36号）遺物分布図（3）……57
第48図　鞴羽口・鉄滓……60
第49図　鞴羽口・鉄滓分布図……61
第50図　鉄製品……63
第51図　遺構間接合図……64
第52図　墨書土器……66

表　目　次

第1表　掘立柱建築址計測置……47
第2表　土師器坏形土器の類別による法量比……65

写真図版目次

巻末図版

図版一　遺跡遠景（西より）　遺跡近景（南より）

図版二　調査風景

図版三　調査風景　調査区全景（A区南側）

図版四　第１号住居址及び第３号掘立柱建築址（南より）　第２号住居址（北より）

図版五　第１号掘立柱建築址（南より）　第４号掘立柱建築址（北より）

図版六　第１・２・５・６・８・14・15号土壙

図版七　第９号土壙遺物出土状態・焼土・遺構

図版八　第16・17・20・21・23・26・29～31号土壙

図版九　第19号土壙遺物出土状態・羽口出土状態（東より）

図版十　第32・34・36号土壙

図版十一　第40号土壙鉄滓出土状態・遺構

図版十二　第41号土壙（合口式甕棺墓）

図版十三　第42号土壙

図版十四　第１号井戸址

図版十五　第２号井戸址

図版十六　B地区

図版十七　B地区各遺構

図版十八　出土遺物（土器その１）

図版十九　出土遺物（土器その２）

図版二十　出土遺物（木製品）

図版二十一　B地区出土遺物（木製品）

図版二十二　出土遺物（羽口・鉄製品）

図版二十三　出土遺物（鉄製品・石製品B地区含む）

巻首図版　遺跡位置図

第Ⅰ章　調査に至るまでの経過

飯山市旭町地区の県営圃場整備事業は，昭和48年度から実施され，昭和55年度には全て完了することが北信土地改良事務所の計画であり，その面積は138ヘクタールという非常に広範な事業であった。

昭和52年度より実施された北部には，たまたま旭町遺跡群が存在しているために，52年９月に県文化課より，53年度の県営圃場整備計画予定地に旭町遺跡群が含まれており，発掘調査を実施しなければならないとの連絡があった。その後，11月５日，県文化課の関指導主事が来庁し，教育委員会，北信土地改良事務所，旭町圃場整備実行委員の三者で，53年度実施予定地の現場を視察し，視察後，旭町連絡所において，関係者と会議を開いた。席上関指導主事から，県の意向として記録保存を行なうため発掘調査をしなければならないが，その調査については，飯山市教育委員会に委託したい旨の話しがなされた。

11月９日，県教育委員会教育長より，「県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱い」として記録保存事業を行ない，北信土地改良事務所から発掘調査を委託された場合には受託するよう通知があった。

12月26日，市教育委員会では文化財専門委員会を開き，旭町遺跡群北原遺跡について協議した結果，調査委託を受けることとし，発掘調査事業は，飯山市旭町遺跡群北原遺跡発掘調査会を結成して調査会が事業主体となって行なうことに決定した。

なお，この会議において，文化財専門主事が必要であることが話され，53年度より１名配置されるよう教育長に上申した。

53年２月27日，飯山市文化財専門委員会を開催し，委員全員が調査会結成準備委員となり，飯山市旭町遺跡群北原遺跡調査会準備会を開き，会長に飯山市教育長が就任した。その他，調査会規約，調査団員のメンバー等の編成を協議した。

調査団長に飯山北高等学校教諭高橋桂氏，調査主任に松沢芳宏氏を決定。また，調査団員の氏名，その他調査会規約の原案を作成。

４月１日，教育委員会教育次長荒井博美退職（53. 3.31付）により，新たに補野昌夫教育次長（調査会副会長）を迎えた。

なお，社会教育係に望月静雄を嘱託（文化財調査員）として迎えた。

４月４日，旭町遺跡群をパトロールするが大雪のため残雪1.5ｍもあり，当分調査は不可能と思われた。

４月15日，北信土地改良事務所から埋蔵文化財（旭町遺跡群北原遺跡）の調査依頼があった。

午後，調査会役員，団員合同会議を開く。事務局より「飯山市旭町遺跡群北原遺跡調査会規約等の説明を行なった。

協議に入り，調査会長に飯山市教育長　小林忠一

副会長に教育次長　補野昌夫

調査顧問に飯山市長　春日佳一

飯山市公民館柳原分館長　井上慶誠

の諸氏を委嘱した。

また，調査団の結団式は4月24日福祉センターで行なうことを決め，発掘調査は4月26日から開始し，6月25日を完了目標にすることを取り決めた。

会議終了後，団長，主任，調査員等で現場を下見する。

4月18日，北信土地改良事務所と調査委託を取り交わした。午後，旭町事業所で旭町圃場整備実行委員会があり，望月調査員と青木が北原遺跡の発掘調査について，遺跡の重要性，調査日程等の説明に行く。

4月23日，午前，社会体育係の協力を得てテント設営，器材運搬を行なった。

午後1時30分から結団式を開催。調査員補助員等全員が顔を揃え，26日から開始される発掘調査の細部打合わせを行なった。

終了後，小林調査会長の音頭で乾杯をし，発掘調査の安全と成功を祈りつつ和気あいあいのうちに散会した。

4月26日，晴，午前9時に発掘関係者が現場に集合し，鍬入式を行なった。

祖先の冥福と，発掘作業の安全を祈りつつ1人1人が読経の続く中お焼香を行なった。

ここ北信濃飯山市の北西部，長峰丘陵，関田山脈には残雪が多く，風が冷く身に沁る。まだ春は訪れていない……。

飯山市旭町遺跡群北原遺跡調査会（組織）

会　長	小林　忠一	飯山市教育委員会教育長	
副会長	浦野　昌夫	（前）飯山市教育委員会教育次長	（昭和53年12月1日転出）
〃	柳　公亨	（後）　同	（昭和53年12月1日就任）
顧　問	春日　佳一	（前）飯山市長	（昭和53年9月11日退出）
〃	小野沢静夫	（後）　同	（昭和53年9月12日就任）
〃	井上　慶誠	飯山市公民館柳原分館長	
理　事	佐藤　政男	飯山市文化財専門委員	
	斉藤　二六	〃	
	弓削　春穏	〃	
	上原　幸夫	〃	
	高橋　桂	〃	
	滝沢藤三郎	〃	
監　事	松沢　定男	飯山市監査委員	
	宮沢　忠志	（前）飯山市収入役	（昭和53年9月19日退出）
	風間　実	（後）　同	（昭和53年12月2日就任）
事務局	青木　剛	飯山市教育委員会社会教育係長	

	望月　静雄	飯山市教育委員会嘱託

調査団

調査団長	高橋　　桂	飯山北高等学校教諭
調査主任	松沢　芳宏	日伸精機(株)長野工場
調 査 員	望月　静雄	
〃	今井　正文	立正大学生
〃	野沢　則幸	〃
〃	松沢　伸一	飯山市
〃	金井　晴美	須坂市

指　導	丸山敞一郎	長野県教育委員会文化課指導主事
	関　孝一	〃

第Ⅱ章　環　　境

第1節　地理的環境

遺跡は，飯山市大字旭字北原に存する。

千曲川が，信濃に残す最後の平が，飯山盆地である。盆地は千曲川によって二分され，河東地区は木島平とよばれている。河西地区は，飯山市街地北方の有尾部落から戸狩地区に向って走る長峰丘陵によって二分され，東側を常盤平，西側を外様平と称している。長峰丘陵は，標高400m内外の低丘陵であって，弥生式遺跡が濃密に分布することで古くから知られている。

外様平の西縁は，北信五岳の一つ斑尾山より北北東に向って走る関田山脈によって画される。関田山脈は1,000m内外の低山脈であって，信越国境となっている。外様平は，このように長峰丘陵と関田山脈によって画された低平地で，東西は1.5～2キロ，南北約8キロにわたっている。飯山市誕生以前は，この外様平は南から柳原，外様，太田の三村を包括していた。

外様平西側は，関田山脈から流下する小河川によってつくられた小扇状地がいくつか存在する。代表的なものをあげると皿川扇状地，笹川扇状地，滝沢川扇状地，長橋川扇状地等である。この他にも非常に小さな扇状地形が各所に認められる。そして，これらの小扇状地の扇端面に集落が存在し，遺跡も多く存する。標高は，360mを中心としている。

小扇状地・低湿地帯，小台地の地形が入りまじって外様平が形成されている。外様平は，奥信濃の穀倉地帯である。それは，平の中を小扇状地に押されて迂余曲折して流れる広井川のもたらした肥沃な堆積土と関田山脈より流下する幾多の小河川によって成立している。外様平の肥沃な土壌を形成した広井川の源は，旭地区にある。

北原遺跡は，外様平の南部に位置している。旧村名でいえば柳原村である。この旧柳原村の北部にあって，水田地帯よりは若干高い台地状の地形の上に位置している。この台地状地形は地下水が意外に高く，1.5mも掘ると地下水が湧出する。遺跡の東側には，県道曽根一藤ノ木線が走っている。県道に沿って集落が点在する。遺跡の南には，広々とした水田が展開する。この水田地帯は，北を遺跡所在地の台地状地形，東を県道の走っている微高地，西を関田山脈，南は広井川の自然堤防に囲まれ排水が悪く湿田である。水田面積は40ヘクタールほどもあろうか。

次に柳原村誌で弓削春穂氏が述べられている遺跡所在地の気候の特色を掲げておきたい。一部省略してあることをお断りしておく。

① 冬季は，北西季節風が強く，降水日数，曇天日数が多く，陰うつな天候が続く。積雪量多く根雪期間が4ヶ月にも及び冬ごもり期が長い。

② 冬季は，寒気がきびしく，他地方にくらべて湿度も高く，そこびえのする寒さを感ずる。

③ 春の訪れがおそく秋たつことが早く，寒候期が長く暖候期が短かい。

④ 雪消え後の4月から5月にかけて著しく乾燥する。

⑤ 気候の年較差，日較差が大きく，やや内陸性である。

第1図　北原遺跡の位置と周辺遺跡の分布図（1：25000）

1．北原　2．別府原　3．笹川　4．布施田神社　5．法寺　6．針尾池　7．鶴巻　8．丸ヶ峯　9．城ヶ端　10．須田峯　11．お茶屋　12．長峰　13．長峯窟　14．林子畑　15．黄金石上　16．有尾古墳群　17．有尾　18．ガニ沢上　19．大型寺池　20．神明町裏古墳　21．北飯山　22．北町　23．鍛冶田（54年度調査地）

⑥ 山間地のため風は弱いが，それでも冬から春にかけて強い風が吹く。

⑦ 暖候期には風の日変化がおこり，午前は弱い南風，午後は北風が卓越する。

以上であるが，この気候の特色の中にも見られるように，この地方は日本でも有数の豪雪地帯である。人々は長い冬ごもりの生活を余儀なくされてきた。しかし，この大量に降る雪は，水稲耕作に生活の基盤おいてきた人々にとって大切なことでもあった。夏季における重要な水資源であったからに他ならない。多雪年は豊作だという言葉がその間の事情をよく物語っているといえよう。

第2節　歴史的環境

ここでは柳原地区を中心として近辺の遺跡について触れよう。

信濃史料によれば，柳原地区の遺跡は以下の5ヶ所のみである。①笹川新道付近，②南条鶴巻，③四ツ屋鬼ヶ峯，④小佐原城端，⑤藤ノ木中浦。

正直にいって，今迄の飯山地方の考古学研究では，柳原地区はほとんど省みられなかったといってよいであろう。それは，該地方の考古学調査が，弥生式文化の究明に重点をおき，弥生式遺跡の多く存する長峰丘陵にのみ目を注いできたことに起因するといえよう。

柳原地区が，私達の注目するところとなったのは，昭和43年以降であるといってよいであろう。従って，今回の圃場整備事業が，施行されなかったならば，北原遺跡が日の目を見るにいたらなかったであろう。ただ，この功罪は別であるが。

さて，柳原地区に人間の活動が開始されたのは，先土器時代であった。鶴巻遺跡から先土器文化の所産と考えられる彫器が1点検出されている。針湖池周辺でも石刃が発見されている。また城端遺跡でも先土器文化の所産と考えられる石器が出土している。

縄文時代に入ると草創期の遺跡として城端遺跡があげられる。城端遺跡は西小佐原台地の西南端に位置している。昭和44年6月永峯光一氏によって調査され，多量の表裏縄文土器が得られた。目下広瀬昭弘君によって整理が進められている。針湖池周辺でも表裏縄文土器がみつかっている。

縄文前期の遺跡としては，有尾遺跡(註1)があげられよう。飯山町誌編纂事業の一環として，神田五六氏が発掘調査を行なった。円形プランの住居址1軒，前期土器，石器が検出された。この出土土器は有尾式土器と命名されている。針湖池周辺，鶴巻，須多峯にも前期の土器が認められる。

縄文中期の遺跡としてまづ須多峯をあげることができる。ここから出土した土器は，中期初頭に位置する良好な資料である。北陸地方，関東地方との関連を考える上に重要な資料であると確信している。この資料は目下，西沢隆治君によって整理が進められている。須多峯近くにも中期後半の遺跡がある。これは須多峯の範囲に含めた方がよいかも知れないが，全くの処女地であって遺物の出土量が多い。鬼ヶ峯，別府原，外様島にも小規模ではあるが，中期後半の土器が出土する。

縄文後晩期になると柳原地区では，全くといってよいほど遺跡の分布は認められない。ただ，今回の発掘調査地点で若干，縄文晩期の土器が出土している。粗製土器のみであって，晩期のどの時期に該当するか不明である。縄文後晩期にほとんど活動が認められなかった柳原地区も，弥生式時代に至ると再び人間活動の舞台となった。湿地帯を多くもち，関田山脈から流下する小河川が多く，容易に水が得られることが，初期水稲耕作に適したためであろうか。弥生式中期後半の文化が，奥信濃では最も古い弥生式文化である。現在までのところ，中期中半まで遡らせる資料はみつかっていない。中期後半の弥生式遺跡は，ほとんどが外様平の低湿地帯を臨む関田山脈東麓，長峰丘陵西側に分布している。柳原地区における中期後半の遺跡としては，本調査地点の北方200mほど距てた別府原に認められる。この遺跡は圃場整備中に発見された。中期後半の壺形土器，甕形土器の破片が出土し，更に住居址の存在も認められたが，工事者によって無残にも破壊されてしまい，どのような規模をもっていたかは全く不明である。本遺跡西南方800mほど距てた関田山脈東麓の鍛冶田遺跡でも中期後半の土器が出土している。この鍛冶田遺跡は，昭和54年度の旭地区圃場整備事業に伴ない緊急発掘調査を行なった。これについては，本報告書完成後に報告書が刊行されるであろう。その他に針湖池周辺にも中期末の良好な遺跡が存在する。未調査であるが規模は相当なものである。丘頂に所在することを考えると特殊な遺構をもっているのかも知れない。

弥生式後期に入ると先づ西小佐原台地の城端遺跡が注目される（註2）。昭和44年春，発掘調査を行なった。隅丸方形の住居址1軒，後期初頭に位置する土器のセット，ドングリ，クルミの炭化物を検出した。弥生式後期初頭の食生活の一端を示す資料である。この発掘地点は，縄文草創期の出土地点と近接している。西小佐原台地の南方100mほど距てて，須多峯台地がある。昭和40年8月長野県下で初めての弥生式後期周溝墓が検出された場所である（註3）。方形周溝墓は台地の東南の縁辺部に位置している。この直下の沢状地帯にも弥生式後期の土器が認められる。針湖周辺にも後期遺跡がある。

古墳時代の遺跡として須多峯遺跡がある。方形周溝墓に近接して柳町式の住居址三軒と土器が出土した。住居址は隅丸方形のプランである。柳町式土器は一時弥生式後期末に編年的位置があたえられていたが，現在は関東地方の五領期後半の土器に併行するものとして取扱われている（註4）。鬼高期に属するものとしては，桐原健氏が調査した有尾遺跡がある（註5）。

古墳は，有尾部落北方の長峰丘陵丘頂に有尾古墳がある。長野県北端の前方後円墳（帆立貝式）として知られている。近接して円墳の小丸古墳がある。更に神明町裏にも古墳と推定できるものが数基存在している。

真間期に該当する遺跡は今の所，この近辺では発見されていない。国分期に入ると遺跡が再び多くみられるようになる。別府原遺跡，鍛冶田遺跡，黄金石上遺跡，城端遺跡，鬼ケ峯遺跡，お茶屋遺跡，鶴巻遺跡，長者窪遺跡，林子畑遺跡，針湖池周辺が代表的なものである。

一般的にいって，奥信濃飯山地方は，弥生式中期後半にもたらされた農耕文化は後期に入ると拡散して，各地にその痕跡が認められるが，古墳時代以降活動があまり認められなくなる。そして，国分期（平安時代）に入る再び各地にその痕跡が残されるにいたる。換言すれば，平安時代

に入って該地方が急速に開拓されていったといえよう。それは，荘園制の進行と無関係でなかったであろう。

中世末期（戦国時代）から江戸，明治へとかけて奥信濃地方と上越地方とは交流が活発であった。自然環境の項で触れているように外様平の西縁を画する関田山脈は，1,000m内外の低山脈であって奥信濃と上越地方を結ぶ重要な交通ルートであった。上越地方の物資がこの関田山脈を越えて奥信濃へと運ばれた。そして，それらの物資が長野，中野方面へともたらされたのである。その物資の集散地が飯山であった。それらを裏付けるかのように関田山脈には幾本もの峠道が存在する。しかし，近代交通革命は，それらの歴史を過去へとおし流し，峠道の存在も人々の記憶から消え去ろうとしている。発掘調査地点の南側に県道より分かれて，関田山脈へと向う小道がある。地元の古老によれば往時越後への交通路であったという。

参考文献

外様村史　飯山市公民館外様分館　昭和32年11月

柳原村誌　飯山市公民館柳原分館　昭和45年４月

信濃史料　第１巻上・下　信濃史料刊行会　昭和31年10月

註１　神田五六「長野県下水内郡飯山町有尾遺跡発掘概報」信濃５の８

註２　高橋桂「北信濃城堀遺跡調査略報」信濃21の７

註３　高橋桂「北信濃多ヶ峯弥生式墓壙調査略報」考古学雑誌51の３

註４　高橋桂，太田文雄「北信濃須多ヶ峯第二次発掘調査報告」信濃29の４

註５　長野県飯山南高校考古学クラブ「長野県飯山市有尾遺跡調査概報」信濃13の12

第Ⅲ章　調査経過

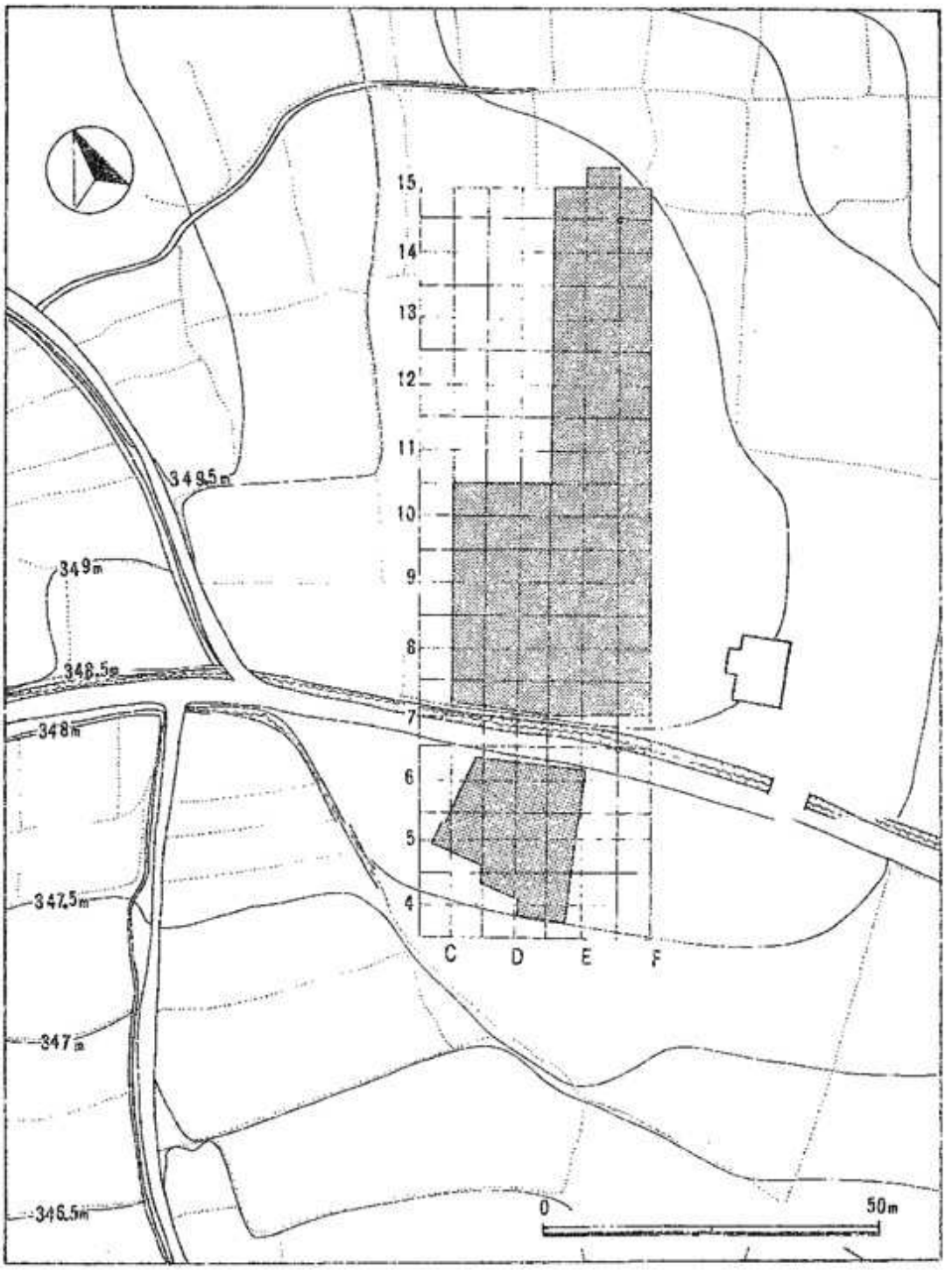
調査は，800m²を対象面積とする緊急発掘調査であったが，範囲など不明確な部分が多いため，遺跡の拡がりを中心的課題として取り掛ることにした。

調査方法はグリット法とし，調査地区内に建設される道路の中心線に打たれている基準点をそのまま発掘区のポイントとした。道路の中心線をＹ軸，直角に振ってＸ軸を設定し，10×10mの区画を作った。すなわち，南から北へ７～15区，西から東へＣ～Ｆ区とし，さらに10×10mのグリットを５ｍ×５ｍの４区画に分けイ，ロ，ハ，ニとした。この順序は，西北隅から反時計回りに名付けた。例えば西北隅をＣ－15－ロ区と呼称したのである。なお，グリット番号を途中から付けたのは遺跡がさらに拡がることを考慮したからである。

発掘は，例年になく雪消えが遅いため，４月26日を待って開始した。Ｅ，Ｆ－11，12区より調査を進めたが，明確な遺構は確認されず，さらに北へ調査を進めた。

４月28日になって，Ｅ－14－ニ区より１，２号土壙が確認され，さらに周囲を拡張した結果柱穴群，土壙群を検出した。これらは後に第１，２号掘立柱建築址，９～15号土壙となる。

５月初旬よりＥ－10－イ区より南，西へそれぞれ調査を進めていったが，Ｆ－９区に至っておびただしい量にのぼる鉄滓が出土し，加えて羽口が出土したため鍛冶に関係する遺構の存在を推測するに至った。



第２図　グリット設定図（A地区）

5月19日頃までに，E－8－イ，ニ，E－9，10区を全て人力によってⅡ層下面まで掘り下げたが，C，D区及び7，8－ロ，ハ区は重機によって表土のみ除去した。そして精査の結果，1，2号住居址，甕棺墓，土壙，柱穴群を検出した。（甕棺墓は5月19日に検出）。さらに5月24日，E－9－ニ区の19号土壙からほぼ完全な羽口が出土し，翌日それに接してもう1本出土した。このことにより鍛冶遺構であると断定した。

5月末日までに調査予定区内の全てを確認面まで掘り下げた。その結果，約40ヶ所以上に及ぶ遺構と思われる落ち込みを確認した。範囲確認のためC，D－4，5，6区を調査したが，明確な遺構は検出されず，南側への限界を把握できた。

6月初めより精力的に各遺構を掘り下げた。特にD，E－8，9，10区に位置する土壙を中心に羽口，鉄滓が多量に出土したのが注目され，加えて2基の井戸址を検出した。1，2号井戸址ともに多量の木製品が出土し，伴出した土器により鍛冶遺構と同時期であることが判明した。

また，6月11日調査地区東方の谷状地を踏査したところ，3～4ヶ所の落ち込みが発見された。これは，既に開始された圃場整備によって水田の床土を剥土したために露呈したものである。急拠この地区をB地区とし，工事関係者の協力を得て調査を開始した。その結果，4基の土壙が確認され，土壙内より多くの木製品が出土した。

6月20日頃になりようやくB地区及びE，F－9，10，11，12，13，14，15区の調査が終了し，D，E－8区出土遺構が最後の追い上げとなった。

6月22日より，台風の影響による集中豪雨が続き，約1週間調査不可能となった。調査地区内は，プールのように水が溜り，バケツ，ポンプを利用して汲み出した。

7月3日より実測作業，写真撮影等に全力を挙げ，7月8日に現地作業を終了した。

約60日に及ぶ発掘調査は，当初の予定面積を大幅に上回る2000m² 以上に及び，平安時代に比定される鍛冶遺構，井戸址等次章に記すように多くの成果を挙げた。

なお，5月下旬より本遺跡の重要さが指摘され，遺跡保存が具体的に検討された。このことについては，県文化課，北信土地改良事務所，地元圃場整備実行委員会，調査団，市教育委員会の5者会談が5月30日に行なわれた。遺跡の範囲は，調査区をほぼ西限とし圃場整備区域外の東方へ拡がると推定されたため，調査地区を通過する道路部分は土盛り保存，他は畑地に換地して保存するという事で合意された。

作業協力者名簿（順不同・敬称略）

小島千代太郎，大塚勇（作業員責任者），大塚泰一，大塚ふさ子，中島弘文，北川利之，北川三代蔵，斉藤光直，中島信，阿部智子，阿部光子，阿部美登里，小林つね，渡辺すえ，飯山南高考古学クラブ，高柳保人，小沢芳秋，高橋均

以上の方々のほか，笹川，上新田，南条地区の皆さんから多大な御協力をいただいた。

第Ⅳ章　層序と文化層

旭町遺跡群北原遺跡の標準層序は第３図のとおりである。

第Ⅰ層　表土層である。耕作によってパサパサしている。

第Ⅱ層　黒色土である。粘着性がありしまりは良い。

第Ⅲ層　黄褐色砂質粘土質層である。いわゆるローム層に似るが，砂質粘土を含み粘着性がある。

第Ⅳ層　黄褐色砂礫粘土質層である。Ⅲ層に似るが，小礫を含む。

第Ⅴ層　褐色粘土質層である。Ⅲ，Ⅳ層に比べ褐色味が強い。粘着性があり，しまりも良い。

第Ⅵ層　黄白色粘土層である。全体的に白っぽい色調を呈す。

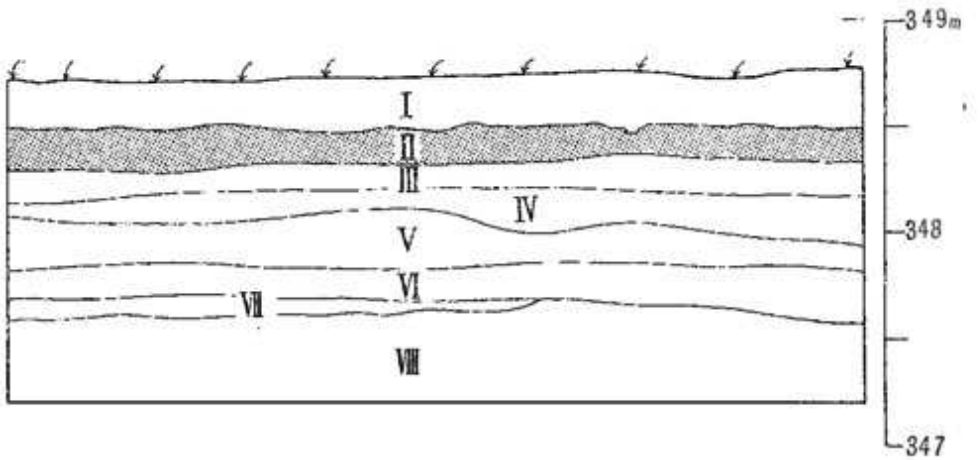
第Ⅶ層　褐色粘土層。部分的に存在するようで，層厚も最大10cmと薄い。

第Ⅷ層　青白色粘土層である。

Ⅰ・Ⅱ層は，Ｃ区では薄く，逆にＦ区では厚い堆積状況を示す。また，作物のアスパラがⅡ層下面まで根が張っており，Ｃ，Ｄ，Ｅ，Ｆ－８，９，10区ではⅡ層が明確でなかった。

さて，平安時代の遺構の確認は第Ⅲ層上面で認められている。しかし，遺物出土状況，遺構セクション等から生活面はⅡ層の中ほどと思われる。表土より約15～25cmの下面である。

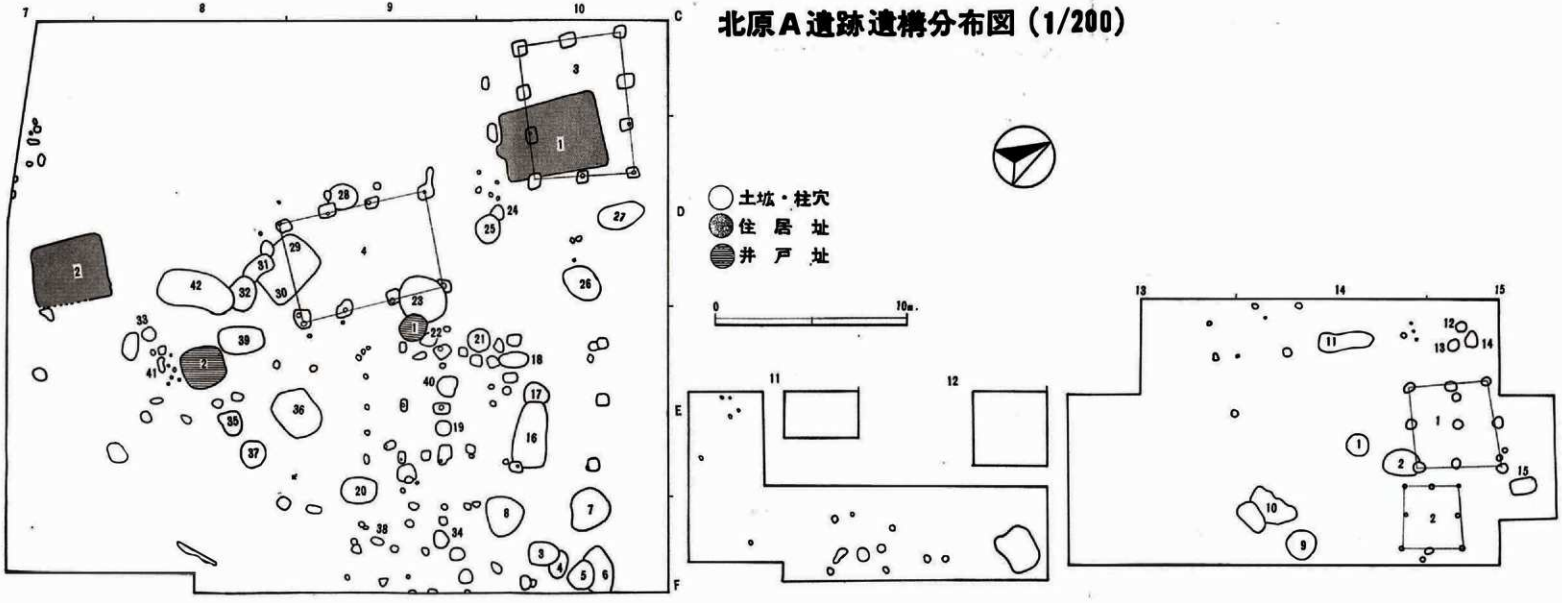
地層の観察に基づけば，本遺跡の立地する微高地は扇状地性微高地と考えられる。地形そのものは丘陵状を示すが，地下水が高く，また地盤も軟弱である。調査地区周囲は比較的新しい浸食によって谷地状を示している。これらの谷状地は厚い黒色土層および小礫の堆積が認められる。



第３図　土層柱状図（Ｅ－11－ハ区西壁）

旭町遺跡群

北原A遺跡遺構分布図（1/200）



第4図 遺構分布図

第Ⅴ章　発見された遺構と遺物

A地区

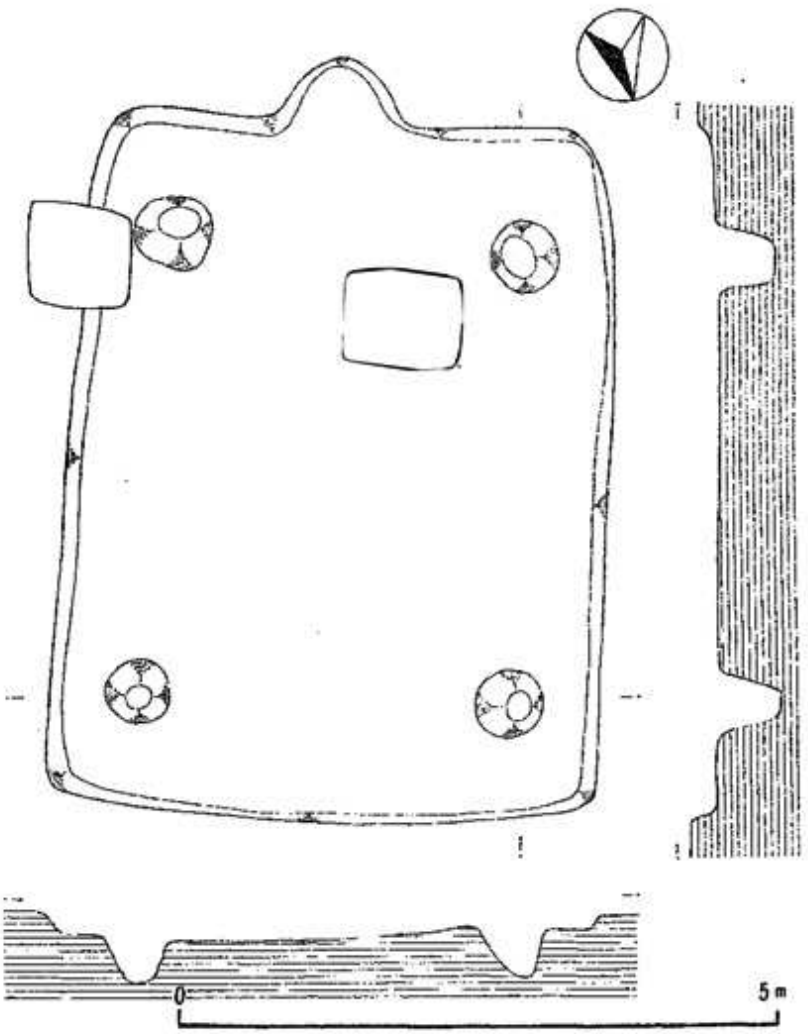
本調査によって出土した遺構は，住居址二軒，土壙42基（甕棺墓１含む），井戸址２基，掘立柱建築址４棟である。遺構より出土した遺物はすべて平安時代に比定されるものである。

これらの遺構と出土した遺物について以下に略述する。

第１節　住　居　址

第１号住居址（第５図）

遺構　発掘区の最も西側，C，D－10区に位置する。１号掘立柱建築址によって一部切られている。平面形は，東西530cm，南北410cmの隅丸長方形を呈する。壁面は明白で，壁高は10～20cmである。床面は貼床など特別な工夫は施していないが堅緻で，ほぼ平坦である。竈は南壁中央に位置したと思われるが，煙道部と考えられる痕跡が認められるのみで，具体的な構築物はない。恐らく１号掘立柱建築址構築の際に破壊されたものと考えられる。柱穴は４本あり，深さは30～50cmである。

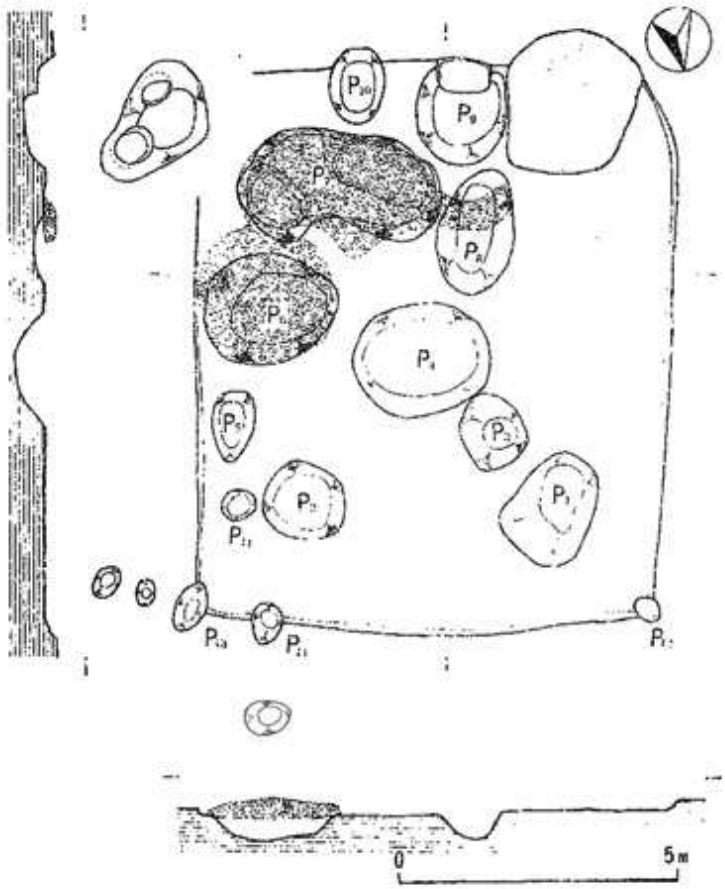


第５図　第１号住居址

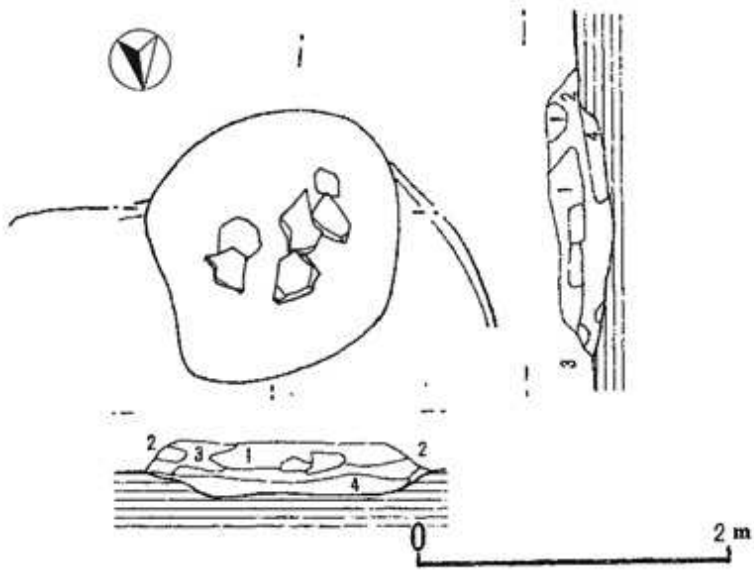
遺物　本住居址覆土からは土師器坏，甕形土器破片等総数約20点出土したが，細片のため実測可能な遺物はない。

第２号住居址（第６図）

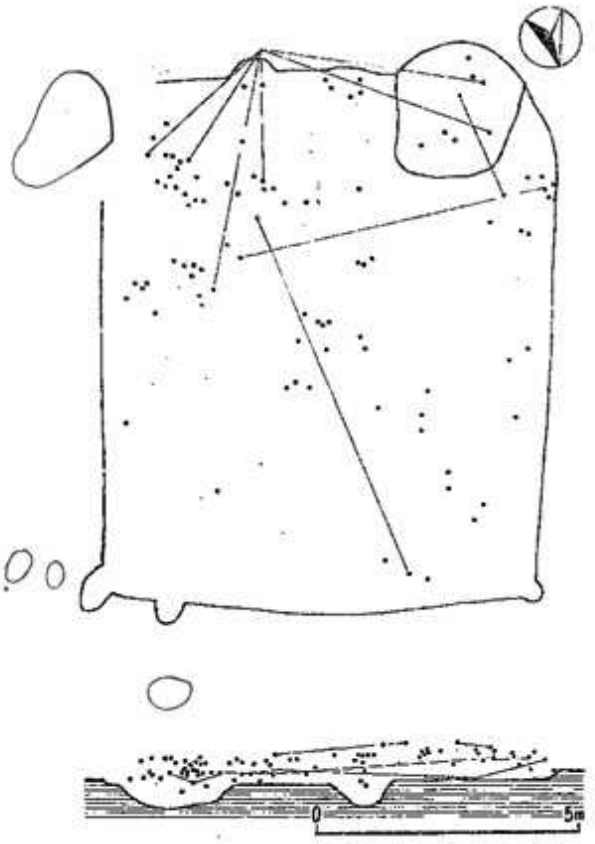
遺構　D－７－ニ区に位置する。



第6図 第 2 号 住 居 址



第7図 第 2 号 住 居 址 竈



第8図　第2号住居址遺物分布図

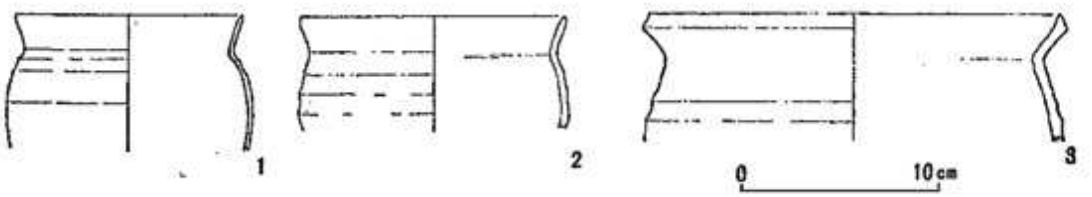
表土を約20cm掘り下げたところ焼土がかなりの層厚をもって拡がっており，精査の結果住居址と判明した。

平面は，東西340cm，南北420cmの隅丸長方形を呈する。壁高は5～10cmと浅く，特に南東部分は不明確である。竈は西南コーナーに位置するが，遺存状態は悪い。規模は長さ120cm，幅95cmを測り，砂質粘土，小礫を併用して構築されている。平面プランは煙道部を壁外に突出した馬蹄形プランを示すものと思われるが，焚口の橋部，袖部等が崩潰しており明確でない。住居址内におけるピットは14あるが，これらのうちP_6，P_7，P_8は焼土に覆われており，特にP_7は壙底まで粘土，焼土が充満していた。

遺物（第9■）

出土遺物は土師器甕形土器破片が多く，竈周辺から焼土分布区にかけて多く分布する（第8図）。接合し実測可能となったのは以下の3点である。1，2は小形の土師器甕形土器で，口縁部は緩く外反し，胴部に最大径を有する。口縁部から胴部にかけて内外面とも横ナデ調整を施し，色調は黒褐色を呈する。1は口径11.5cm，2は口径13.4cmを測る。3は「く」の字状に外反する口縁を有し，口径21cmを測る。胎土に小石，砂粒を含み，焼成は良好である。

この他，鉄滓が数点検出されている。



第9図　第2号住居址出土遺物

第2節　土　　壙

第1号土壙（第10図）

遺構　E—14-ニ区に位置する。形態は径約80cmの円形プランを呈し，深さ（遺構確認面からの深さ。以下，単に"深さ"という）は15cmと浅い。覆土は1層で，炭化物を含む暗褐色土層が堆積していた。

土壙周辺および覆土中より総数35点の遺物が出土したが，細片が多く実測できたのは土師器坏，砥石の各1点のみである。

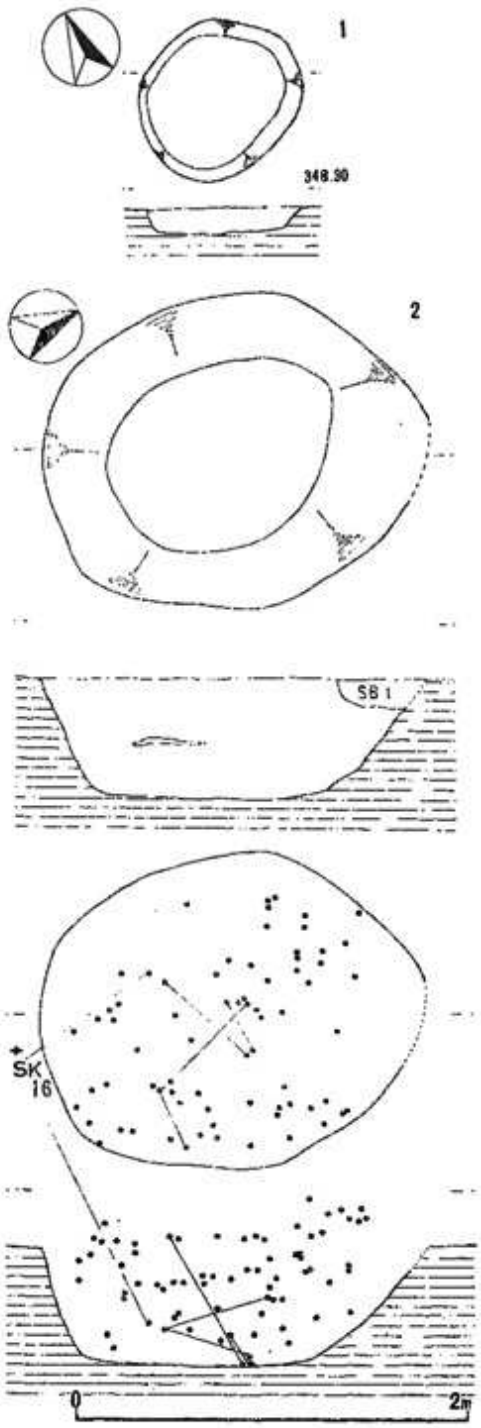
遺物（第11図1，2）　1は糸切底を有する土師質須恵器の坏形土器である。口径14cm，器高4cm。灰白色を呈するが，須恵器に比べて焼成が悪く軟質でである。2は砥石である。壙底から出土した。長方形を呈し，断面四角形である。一面には条線状の痕跡が認められ，使用痕と思われる。重量は260gを測る。

第2号土壙（第10図）

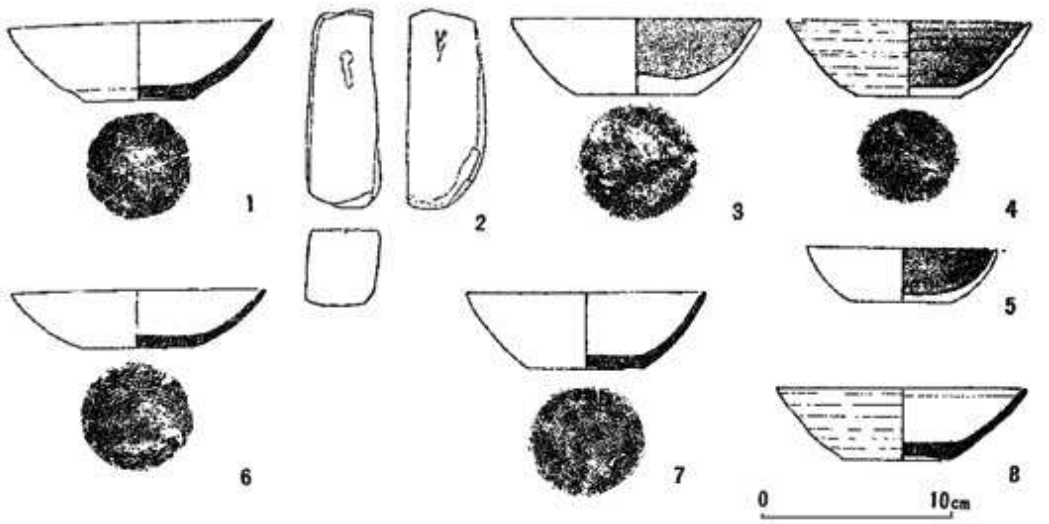
遺構　E—14-ニ区及びE—15—ハ区にかけて位置し，北側一部は第1号掘立柱建築址によって切られる。形態は175×160cmの楕円形で，深さは61cmと深い。壙底はほぼ平坦であるが軟弱である。壁は摺鉢状を呈する。覆土は暗褐色土層で一様に入り込んでいたが，一部にスサ状の炭化物が薄い層となる部分も認められた。

遺物は，覆土上部から壙底にかけて万遍なく出土し，完形品，接合した個体も多い。覆土，遺物出土状態から一時期に埋められた可能性が強い。

遺物（第11図3～8）　出土した遺物は坏形土器破片が圧倒的な割合いを占める。図示したものはすべて坏形土器である。3，4，5は土師器である。3は口径13cm，器高4cmあり，底部はヘラ削りを施す。底部の器肉が厚く色調は明褐色を呈す。4は16号土壙覆土出土土器と接合したものである。口径12.8cm，器高4cmと，3と法量は相似している。内外面とも黒色を呈し，底部は糸



第10図　土壙1号～2号



第11図　第１・２号土壙出土遺物

切り痕跡をとどめる。５は口径9.8cm，器高2.8cmと小形である。器肉は薄く，底部はヘラ削りであるが胎土が不良のため拓本の採取は不可能であった。５は須恵器で，口径 13.4cm，器高３cmと，浅い器形である。全体に器肉は薄く，青灰色を呈する。６，７は灰白色を呈し，須恵器に比べ軟質である。６は口径12.5cm，器高４cm。７は口径 13cm，器高3.8cm，両者とも底部は糸切り痕跡をとどめる。

第３号土壙

遺構（第12図）　F－10－ロ区に位置する。規模は165×135cm，深さ48cmで，平面隅丸長方形を呈す。覆土は５層に分かれる。１層は暗茶褐色土層で，小礫等の狭雑物を含む。２層は暗褐色土層。１層より細くスコリア粒を含む。３層粘土ブロック層。４層は黒色土層で粘土粒を多く含む。５層は黒色土層で，４層に比べ粘土粒は少ない。

遺物は１，２層より土師器甕・坏形土器片が多く出土したが，細片のため実測可能なものは１点のみである。その他，鉄滓が数点出土している。

遺物（第13図１）　口径12.7cmを測る須恵器蓋形土器である。

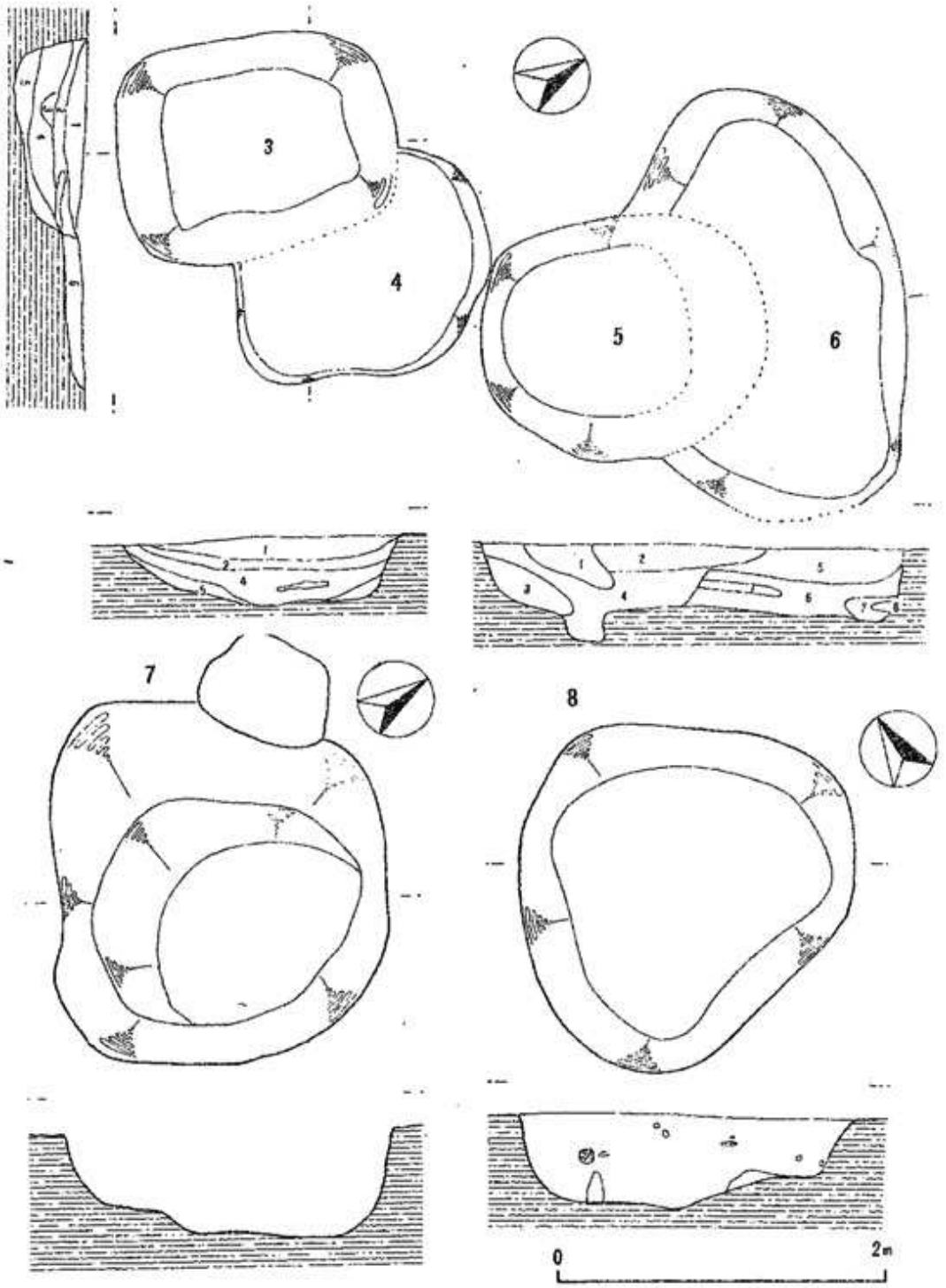
第４号土壙

遺構　（第12図）　F－10－ロ区に位置し，３号土壙に切られる。規模は160×135cmを測り，平面楕円形に近い形をとる。深さは 10cm と浅いが，北側はやや深くなる。覆土は黒色土層で，粘土ブロックを多く含む。

遺物は３号土壙と同様に細片のみで，実測可能な遺物はない。

第５号土壙

遺構（第12図）　F－10－イ区に位置し，３，４号土壙の北に接し，６号土壙を切る。規模は175×150cmで楕円形プランを呈する。深さは40cmで，壙底はほぼ平坦であるが，ピット状の落ち込みが１ケ所認められる。覆土は４層に分かれる。１層は暗茶褐色土層で，ローム粒を多く含む。２層，暗褐色土層。１層よりローム粒が少ない。３層，茶褐色土層。細かなローム粒を含み，パサパサしている。４層，黒色土層，ローム粒を若干含む。



第12図　土　壙　実　測　図（3～8号）

遺物は土師器甕形土器細片が多く，他に羽口，鉄滓が若干出土している。

第6号土壙

遺構（第12図） F—10—イ区に位置し，南側を5号土壙に切られる。規模は260×180cm（推定）で，平面楕円形を呈するものと思われる。深さは40cmで，5号土壙底と同一面である。壙底はほぼ平坦で，壁は急斜に立ち上がる。覆土は5層に分かれる。5層は粘性の強い黒色土層。6層，暗褐色土層。細かなローム粒を含み，パサパサしている。7層，黒色土層。8層，ローム粒の極めて多い褐色土層。

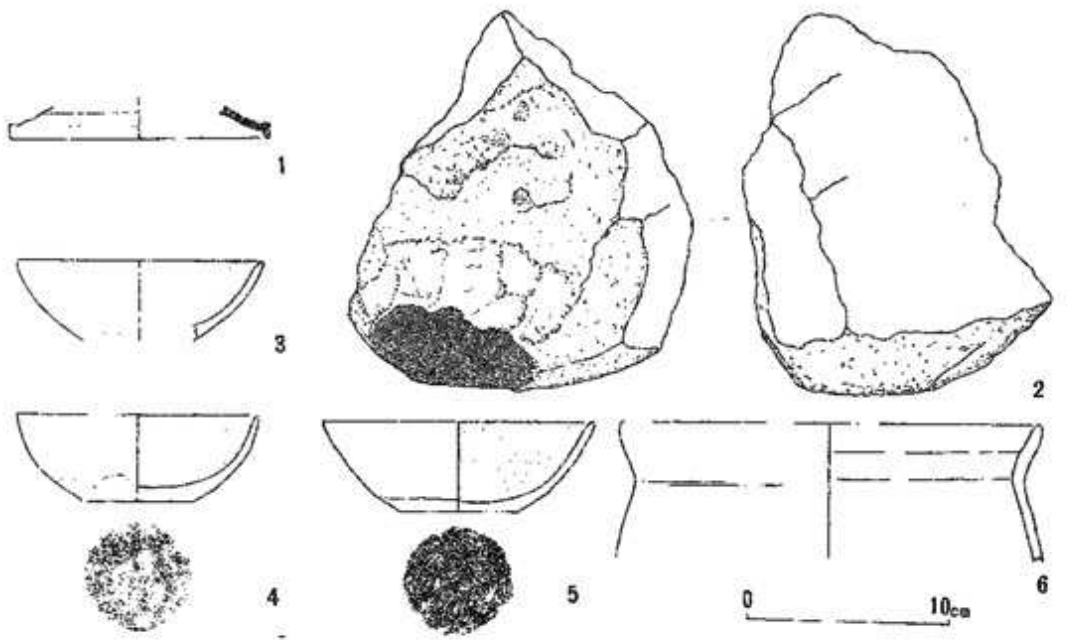
5層から6層にかけて，人頭大の石が数個出土したが，1点を除いて加工，使用痕は認められなかった。遺物分布は，ほぼ全層にわたって出土したが，全て細片である（第46図）

遺物（第13図2） 火熱を受けたためかなり破損しているが，かなとこ石と思われる。表面上には無数の凹みがあり，鉄滓が付着している部分（斜線）も認められる。

第7号土壙

遺構（第12図） E—10—ニ，F—10—イ区にかけて位置し，一部を柱穴によって切られる。規模は220×220cmの不整楕円形を呈し，深さは67cmを測る。横断面は階段状を呈しており，壙底には凹凸が認められる。覆土は暗褐色土層の1層であるが，確認面において，粘土状の黄褐色土層が一部に拡がっていた。

遺物（第13図3，4，5，） 出土した遺物は土師器坏形土器破片が多く，他に羽口，鉄滓が出土した。図示したものはいずれも土師器坏形土器である。3は口径12.3cmを測る。底部は欠損していて不明であるが，底部周辺にヘラ削りを施しており，底部もヘラ削り調整と思われる。4は口径12cm，器高4.3cmを測る。底部およびその周辺はヘラ削り調整を施している。3と同様内面黒色で，色調は褐色を呈するなど相似点が多い。5は口径13.4cm，器高4.5cmを測る。内



第13図 第3号(1)，6号(2)，7号（3～5），8号(6)土壙出土遺物

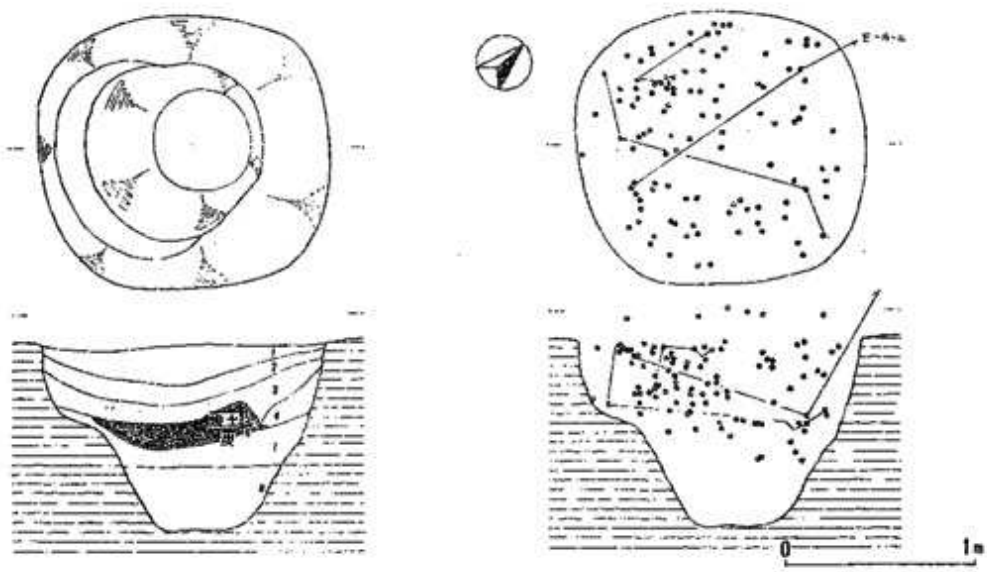
面は黒色処理を施す。底部および周辺は回転ヘラ削り調整を施している。

第8号土壙

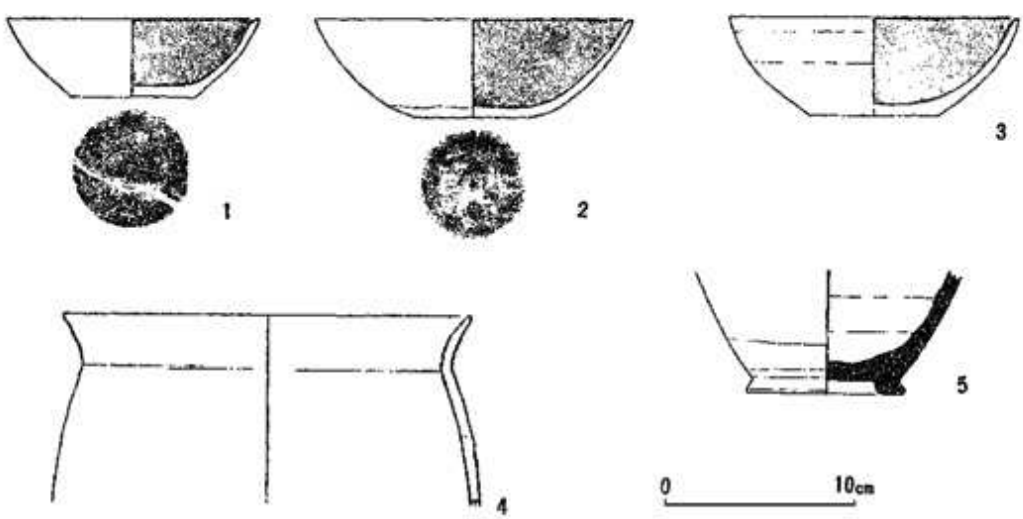
遺構（第12図）　F—10—ロ区，3号土壙の西側に位置する。規模は215×205cm，深さ70cmで，平面隅丸三角形を呈する。底底はやや凹凸があり，軟弱である。壁は西壁が内湾ぎみに立ち上がる。覆土は黒褐色土層の1層であるが，焼土，粘土がブロック状に含まれる。

遺物分布は，東側は上部に多く，西側は上部から下部にかけて万遍なく出土している（第46図）。

遺物（第13図6）　実測可能な資料は土師器甕形土器1点である。口径20.8cmを測る口縁内外面とも横ナデ調整を施す。色調は褐色を呈し，胎土には小石などを含むが焼成は良好で堅緻である。



第14図　第9号土壙平面・遺物分布図



第15図　第9号土壙出土遺物

第9号土壙

遺構（第14図）　F－14－ロ区，2号土壙の南5mに位置する。規模は165×160cmでほぼ円形のプランを呈する。深さは100cmを測る。南側は2段に掘り込まれており，直径40cmの壙底に至る。覆土は8層に分かれる。1層は粘性の強い黒色土層である。2層，暗褐色層で1層に比べパサパサした土層である。3層，黒色土層。1層よりさらに粘性があり，炭化物などが含まれる。4層，褐色土層で，焼土粒を若干含む。5層は焼土である。6層は炭化物を多量に含む黒色土層である。7層は黄褐色土層。8層は青白色粘土層で，粘性が強く，ほぼ平坦に堆積している。

遺物分布（第14図）　遺物は1層から6層にかけて出土し，7，8層ではほとんど検出されなかった。遺物接合はかなりのレベル差があり，1層から6層はほぼ連続的に埋め戻されたと考えられる。

遺物（第15図）　1～3は土師器坏形土器である。1は口径13.2cm，器高4.2cmを測る。内面に黒色処理を施す。底部はヘラ削り調整を行なっているが糸切り痕跡が残っている。色調は明褐色を呈す。2は口径16.6cm，器高5.2cm。1と同様に内面黒色で，底部およびその周辺は回転ヘラ削り調整を施す。色調は赤褐色を呈す。3は口径15.5cm，器高5.2cmを測る。内面黒色で，底部はヘラ削り調整を施す。胎土に小石等含むが焼成悪く軟弱である。4は土師器甕形土器である。胴部に最大径を持ち，口径は22cmを測る。胎土に小石を含み焼成は良好である。5は須恵器で長頸壺と思われる。器肉は厚く，底部に糸切り痕跡をとどめる。底部周辺には回転ヘラ削りが施される。

第10号土壙

遺構（第17図）　E－14－区，9号土壙の西1mに位置する。いわゆるローム マウンドを伴う土壙である。土壙の規模は250×150cmで平面不整三角形を呈す。深さは25cmを測るが，壙底が波状になる部分もあり，伴出遺物も無く人為的遺構であるかやや疑問である。

第11号土壙

遺構（第17図）　E－14－イ，ロ区，2号土壙の西6mに位置する。規模は310×80cmで長楕円形プランを呈する。深さは10cmと浅い。覆土は炭化物を多量に含む暗褐色土層である。土壙内には大小3ケ所のピットが検出されたが，位置，深さが一定していない。

本遺構からは土師器細片が数点出土したのみであり，実測可能な遺物はない。

第12号土壙

遺構（第17図）　E－15－ロ区に位置する。規模は60×50cmで楕円形プランを呈する。深さは25cmと浅く，出土遺物はない。

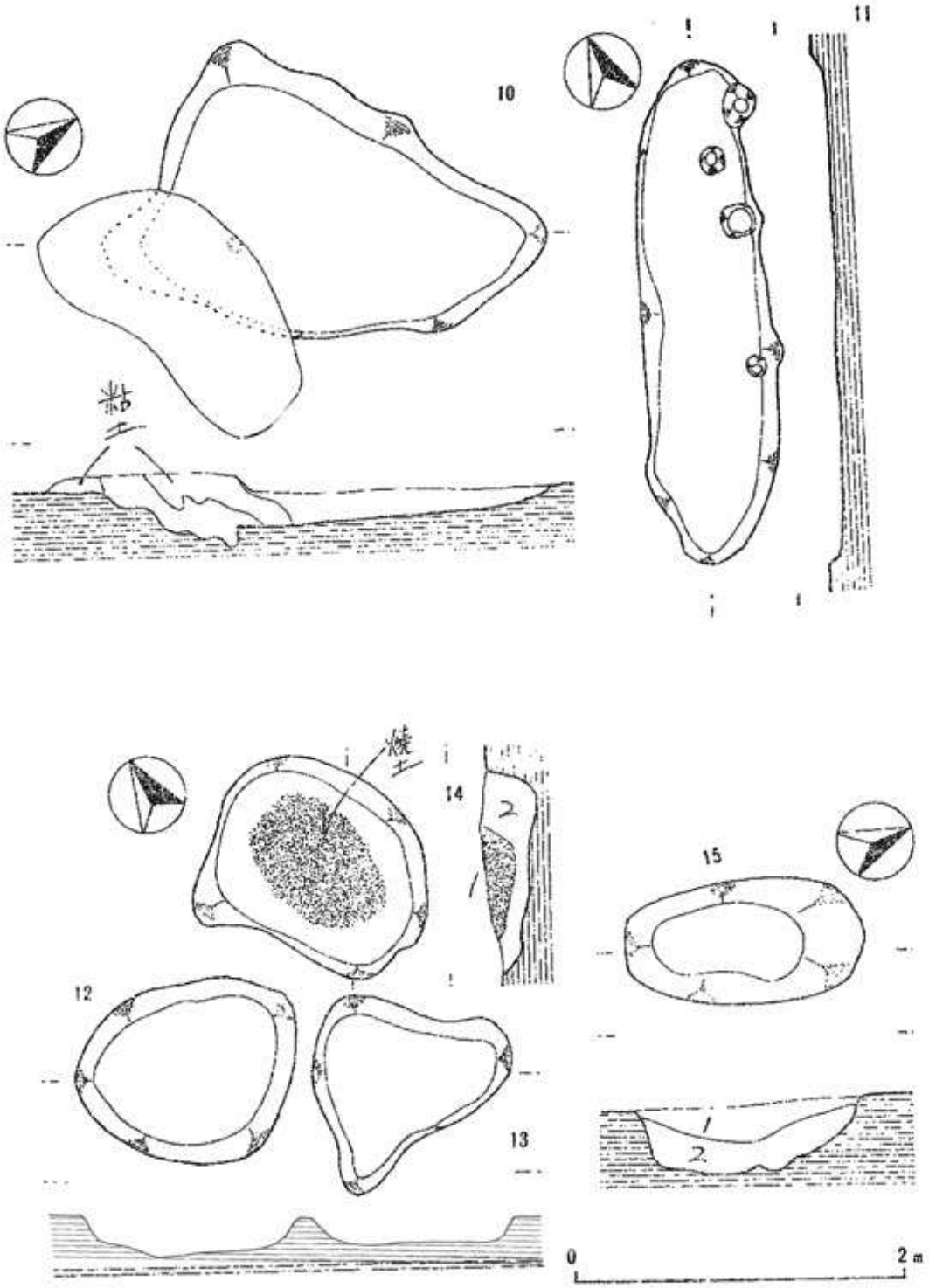
第13号土壙

遺構（第17図）　E－15－ロ区，12号土壙に接して出土。規模は120×100cmで不整三角形を呈し，断面皿状を呈する。

出土遺物はない。

第14号土壙

構（第17図）　E－15－ロ区，12，13号土壙に接して位置する。規模は140×120cm，深さ30

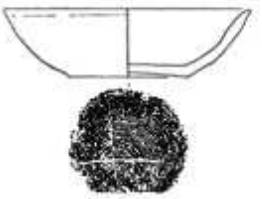


第17図　土　　壙（10～15号）

cmを測り，平面楕円形を呈する。覆土は2層に分かれる。1層は焼土，2層は暗褐色土層である。

遺物は壙底より1点出土している。

遺物（第16図） 土師器坏形土器である。口径12.3cm，器高3.5cmを測る。底部は糸切り痕をとどめ，「＋」乃至「×」印のヘラ記号が認められる。色調は乳白色を呈し，胎土に砂粒を含む。焼成は悪い。



第16図 第14号土壙出土遺物

第15号土壙

遺構（第17図） E—15—ニ区に位置する。規模は140×75cm，深さ47cmで，長方形プランを呈する。壙底は堅緻であるが，凹凸が認められる。覆土は2層に分かれ，1層は暗褐色土層で，2層は粘性のある黒色土層である。

本土壙からの出土遺物はない。

第16号土壙

遺構（第19図） E—10—ハ区，7，8号土壙の西に位置し，17号土壙を切り，東隅は柱穴に切られる。規模は340×190cm，深さ50cmを測り，平面は楕円形に近い。壙底は平坦で堅緻であり，壁は直線的に立ち上がる。覆土は5層に分離できるが，全体的に粘土ブロック，焼土粒を縞状あるいは斑状に含むことにおいて大差なく，埋め戻しと考えることができる。

遺物の出土状態は，層位的差異は認められず，全層中より多量に出土している（第45図参照）。なお，本土壙出土遺物と2号土壙出土遺物は接合している（第51図）。

遺物（第20図1，3，4） いずれも坏形土器である。1は須恵器で口径12.8cm，器高3.8cmを測る。底部は糸切り痕をとどめる。2は灰白色を呈し口径12.2cm，器高2.8cmを測る。底部は軟質のため明確でないが，糸切り技法によるものと思われる。4は須恵器。口径12.9cm，器高3.5cmで形態は1に似る。

第17号土壙

遺構（第19図） E—10—ロ区に位置し，東側を16号土壙に切られる。規模は120×120cm（推定），深さ55cmで平面円形プランを呈する。覆土は3層に分かれる。1層は暗褐色土層で，粘土ブロックを含む。2層は黄白色土層で，粘土，灰の混土層である。3層は黄褐色土層。粘土ブロックを多く含む。

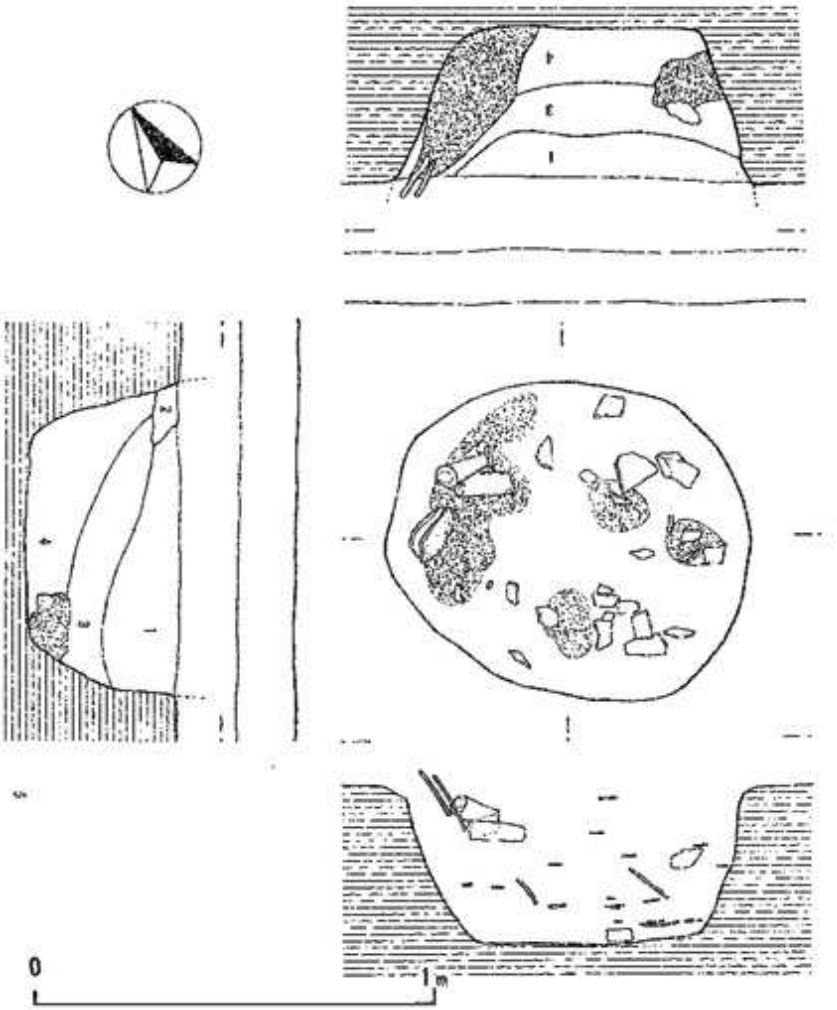
遺物（第20図2） 土師器甕形土器である。口径16cmを測り，口縁部に最大径をもつ。器内外面とも横ナデ仕上されるが，表面には輪積み痕が認められる。

第18号土壙

遺構（第19図） E—10—ロ区，17号土壙の西1mに位置する。規模は140×100cm，深さ20cmで，平面楕円形を呈する。壙底は平坦で，東壁隅にピットがある。覆土は4層に分けられる。1層は暗褐色土層。2層は焼土である。3層は黄褐色土層，4層は粘土，焼土混りの黄褐色土層である。

遺物は2層より若干出土したが細片のため実測可能な遺物はない。

第19号土壙

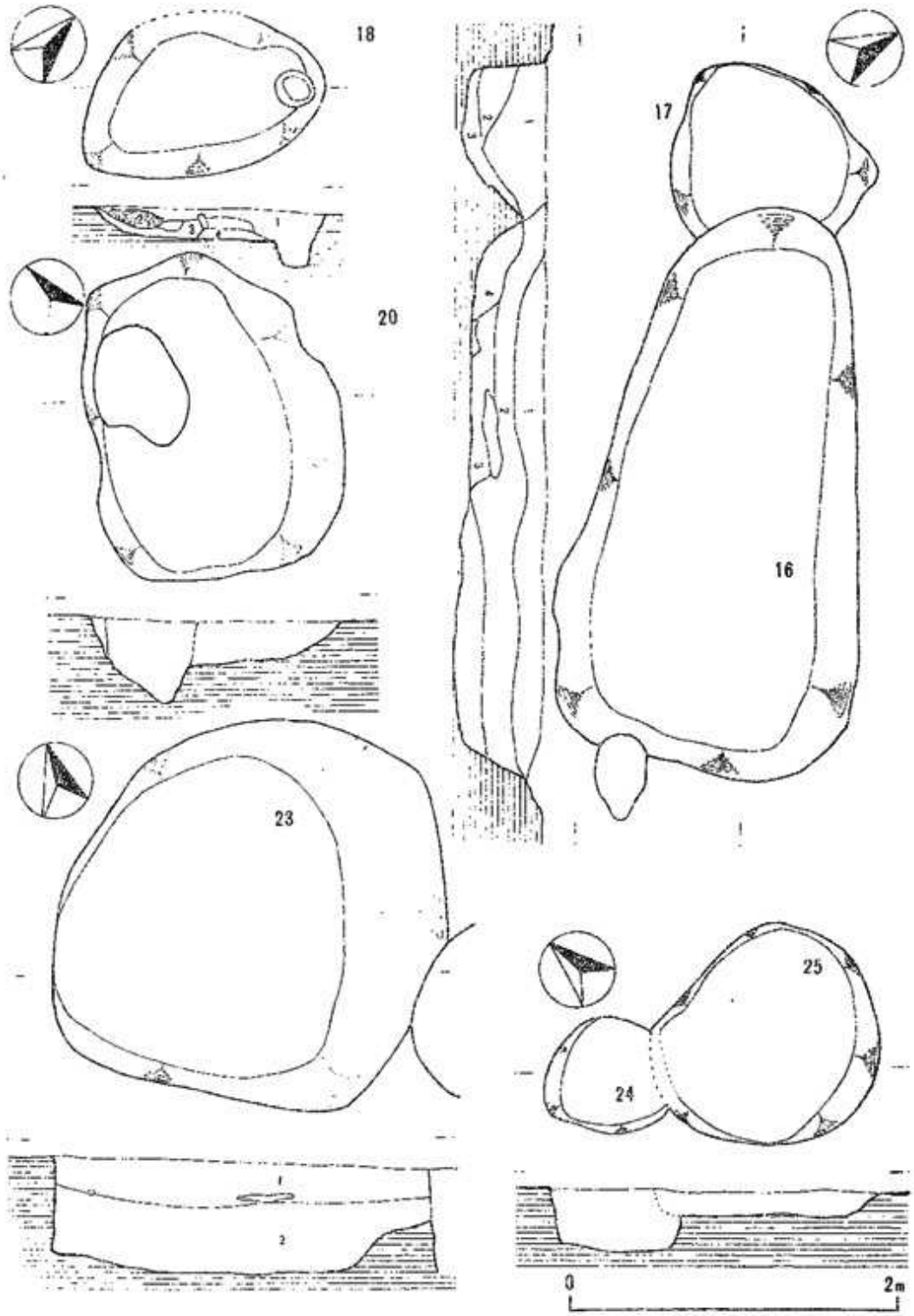


第18図　第19号土壙遺物出土状態

遺構（第18図）　E－19－ニ区，東西の柱穴の中央に位置する。規模は90×80cm，深さ40cmで，ほぼ円形プランを呈する。壙底，壁とも堅緻であるが，特別な付着物は認められない。覆土は5層に分離され，1層・黒色土層，2層・焼土が混入する黒褐色土層，3層・焼土，粘土が混入する黒褐色土層，4層・粘土が混入する褐色土層，5層・粘土層である。各層とも人為的埋土と考えられ，その時期も短期間で行なわれたものと思われる。

遺物は土師器坏・甕形土器破片，須恵器甕形土器破片，羽口，鉄滓が出土した。羽口は3本がまとまって，粘土層直上より出土。そのうち1本は半損していたが，壙底より出土した羽口と接合した。また，須恵器甕破片も，42号土，出土例と接合している（第51図参照）

遺物（第20図5，6，7，8）　実測可能な遺物は羽口（土製）のみである。1は長さ13cm，最大径7cmあり，孔径は先端で1.8cmを測る。2は長さ14.4cm，孔径は先端で2cmを測る。3，4は接合して一本となる。長さ14.4cm，最大径12cm，孔径は先端で2.4cm，末端で4cmを測る。折損後も別々に使用されたと思われ，末端にも鉄滓の付着が著しい。羽口表面は極めて粗雑でほとんど調整は施されず，1の例のように粘土紐の接合部が明確に認められる。



第19図　土　　壙（16～18，20，23～25号）

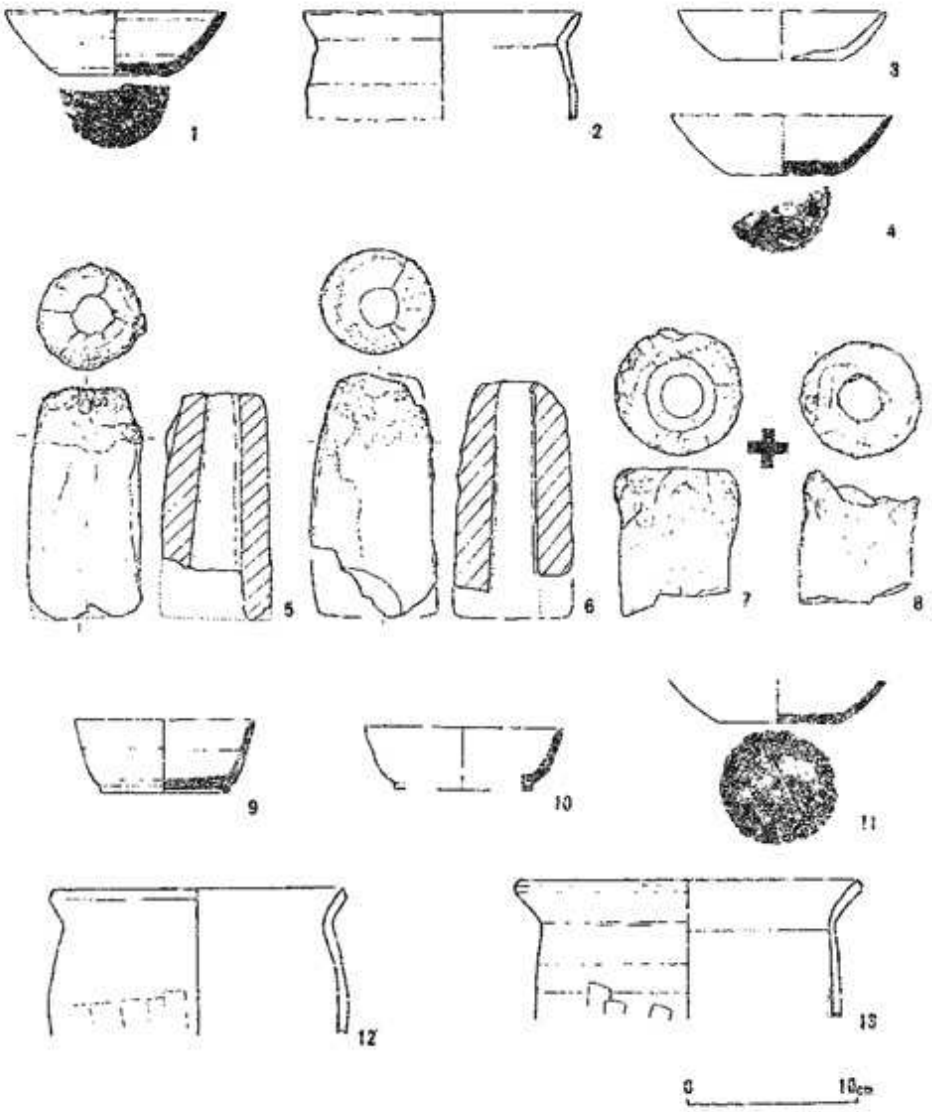
第20号土壙

遺構（第19図）　E－9－ハ区に位置する。西側一部を柱穴によって切られる。規模は200×150cm，深さ30cmで，平面楕円形を呈する。壙底は平坦で堅緻である。覆土は暗褐色上層の1層である。

遺物は壙底より羽口破片，鉄滓が出土している（第46図参照）。

第21号土壙

遺構（第21図）　E－10－ロ，E－9－イ区にまたがり，19号土壙の西1mに位置する。規模は130×120cm，深さ75cmを測り，平面円形を呈す。壙内は北側がテラス状に2段となる。壙底には一面に焼土が拡がる。覆土は5層に分かれる。1層は黒褐色土層で焼土粒を含む。2層は粘土粒を含む黒色土層。3層，黒色土層。遺物が多く出土した。4層，粘土層。5層，焼土である。



第20図　第16号(1,3,4)，17号(2)，19号(5～8)，21号(9,12)，23号(10,11)，24号(13)土壙出土遺物

遺物（第20図9，12）　9は須恵器高台付坏形土器である。口径10.5cm，器高4.3cmを測る。高台は貼り付けによる。焼成は良好堅緻であり，色調は青灰色を呈す。12は土師器甕形土器である。口径17cmを測り，口縁部内外面は横ナデによって調整される。外面胴部は縦にヘラケズリが施されるが，胎土に小石，砂粒を含み焼成が悪いため明瞭でない。

第22号土壙

遺構（第21図）　E－9－ロ区，1号井戸址の東側に接して位置する。規模は80×65cm，深さ40cmで，平面楕円形を呈す。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壙底は平坦である。覆土は3層に分かれる。1層，黄褐色土，粘土ブロックを多量に含む。2層，焼土，3層は黒褐色土層である。

遺物は細片のみで実測可能な遺物はない。

第23号土壙

遺構（第19図）　D－9－ニ区に位置し，1号井戸址に東側を切られる。規模は240×240cm，深さ60cmで，平面は不整円形を呈す。壙底はほぼ平坦であるが，東側はやや階段状となる。覆土は2層に分けられる。1層は黒色土層。2層，褐色土層で，粘土ブロック，焼土を含む。なお，I層上面には一部分に粘土層が拡がる部分も認められる。

遺物（第20図10，11）　10は口径11.5cm，器高3.2cmを測る須恵器高台付坏形土器である。内外面とも横ナデ調整される。焼成良好で堅緻である。色調は青白色を呈する。11は口縁部を欠損する須恵器坏形土器である。底部に糸切り痕をとどめる。焼成良好で堅緻である。この他，羽口破片，鉄滓等出土している。

第24号土壙

遺構（第19図）　D－10－ロ，ハ区に位置し，25号土壙に一部切られる。規模は70×70cm，深さ36cmでほぼ円形プランを呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は1層で暗褐色土層である。

遺物（第20図13）　遺物は土師器甕形土器破片が多く出土したが，実測可能な土器は1点のみである。口径20cmを測り，口縁部に最大径をもつ。口縁部内外面は横ナデ調整され，胴部下半にはヘラ削りが施される。色調は乳褐色を呈し，胎土に砂粒などを含み焼成は不良である。

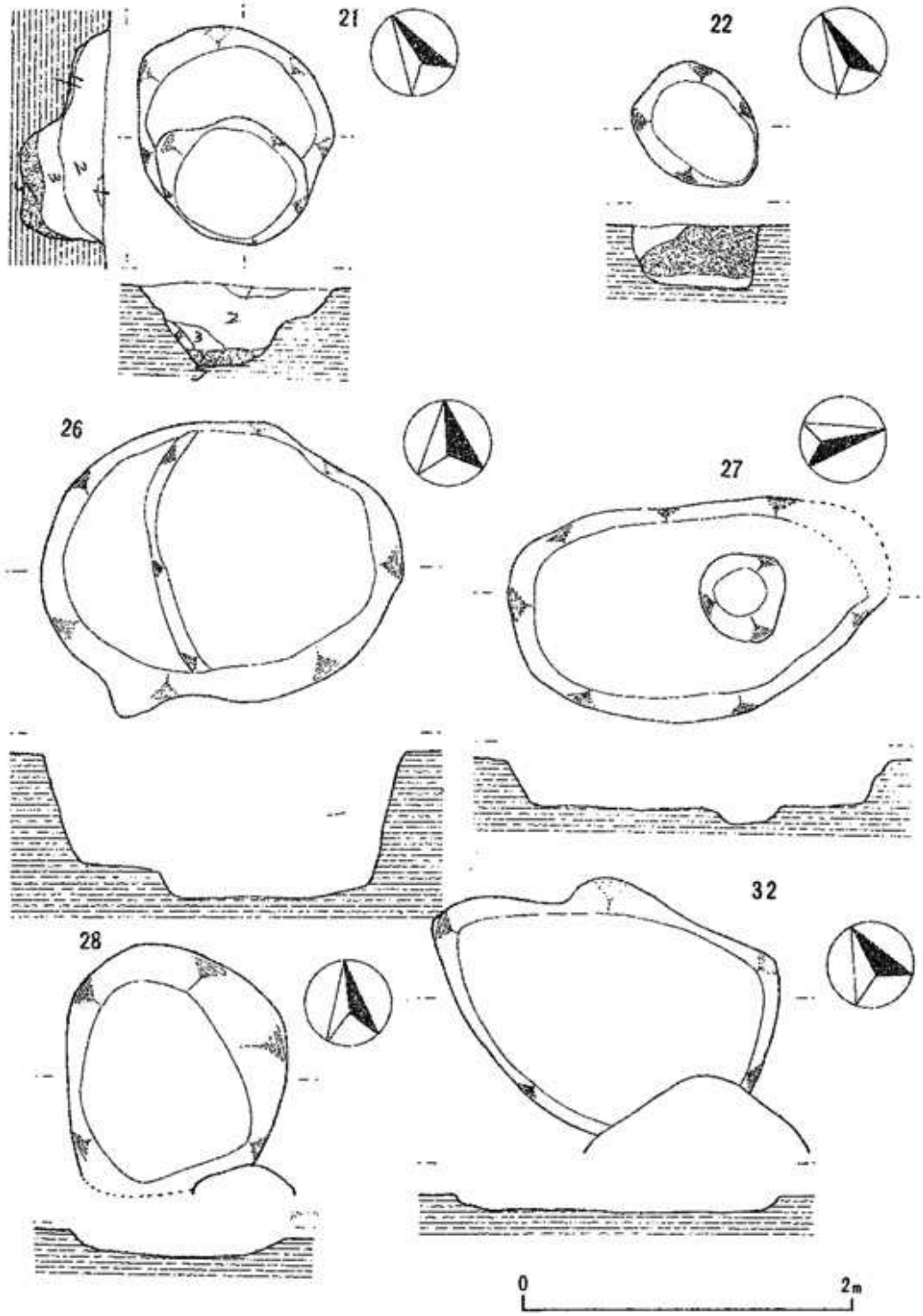
第25号土壙

遺構（第19図）　D－10－ハ区に位置する。規模は130×130cmを測り，不整円形プランを呈する。深さは10cmと浅い。覆土は1層で，暗褐色土層であるが，焼土がブロック状に含まれる部分がある。

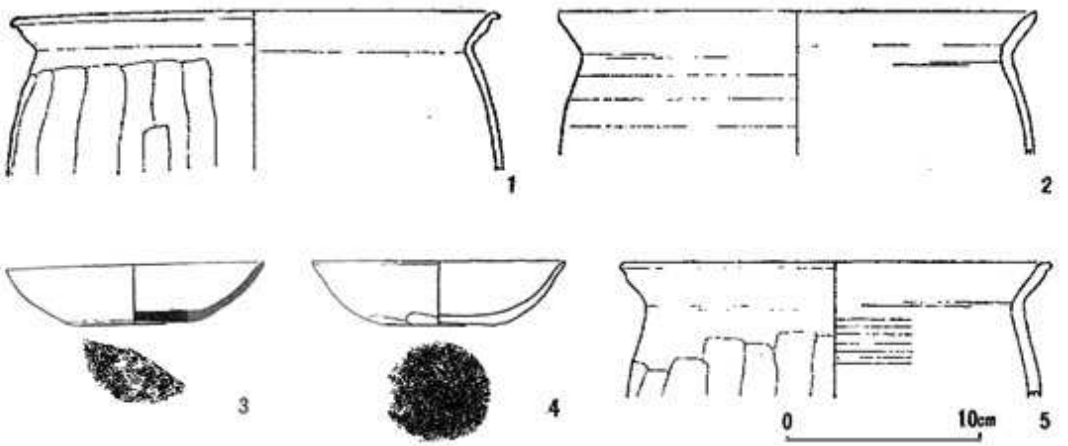
遺物（第22図1）　土師器甕形土器が1点出土している。口径25cmを測る。口縁部内外面には横ナデ調整を施し，胴部以下はヘラ削り調整がなされる。色調は黒褐色を呈し，焼成は良好である。

第26号土壙

遺構（第21図）　D－10－ハ，ニ区に位置する。規模は220×170cmで，楕円形プランを呈する。深さは80cmで，断面が階段状を呈し，南側がテラス状になる。覆土は1層で茶褐色土層で



第21図　土　　壙（21，22，26～28，32号）



第22図　第25号(1)，26号(２～４)，27号(5)土壙出土遺物

ある。粘土，焼土粒を含む。

遺物（第22図２，３，４）　２は土師器甕形土器で，口径24.7cmを測る。「く」の字状に外反し，口縁部内外面とも横ナデ調整される。色調は暗褐色で，焼成は良好である。３は須恵器坏形土器である。口径13.5cm，器高3.1cmを測る。底部には糸切り痕をとどめる。焼成良好で堅緻である。４は土師器坏形土器である。口径13cm，器高3.3cmを測る。内面は黒色処理を施し，底部および周辺はヘラ削り調整がなされる。

第27号土壙

遺構（第21図）　D－10－イ，ニ区にまたがり，26号土壙の北2.5mに位置する。規模は250×140cmで楕円形プランを呈する。深さは25cmと浅い。壙底は平坦で，ほぼ中央にピットが掘り込まれる。

遺物（第22図５）　土師器甕形土器である。口径27cmを測る。内面はハケ目状工具による横ナデが施される。器表面胴部以下はヘラ削り調整がなされている。

第28号土壙

遺構（第21図）　D－９－ニ区に位置し，南側の一部を第４号掘立柱建築址に切られる。規模は160×140cmで，平面楕円形を呈する。深さは25cmで断面は皿状を示す。

遺物は細片のみで実測可能なものはない。

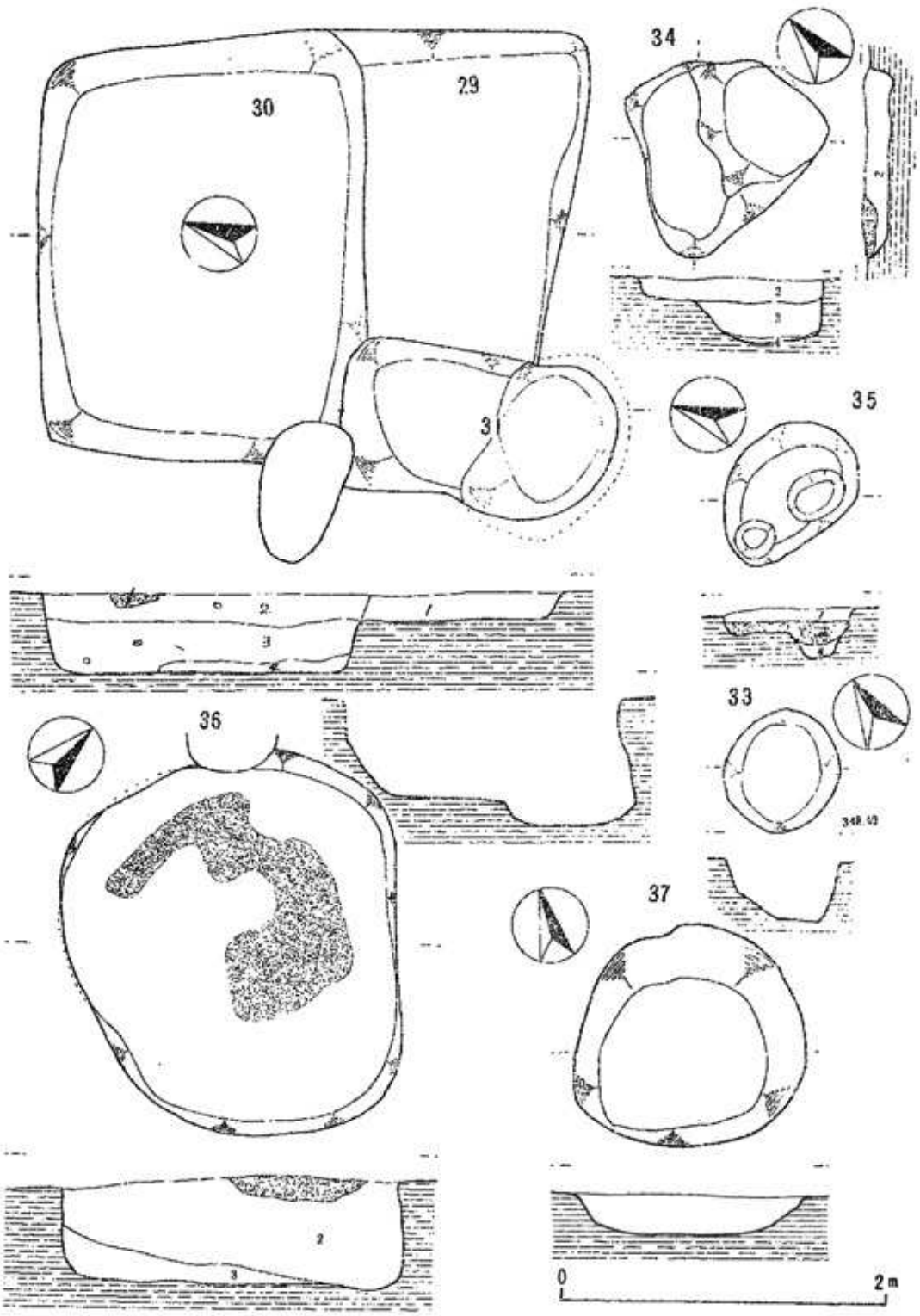
第29号土壙

遺構（第23図）　D－８－ニ，D－９－ハ区に位置する。規模は325×270cm，深さ10cmで，平面は長方形を呈する。本遺構の大部分は30号土壙が北，東，西側縁辺を再利用して構築されているため大部分が破壊されている。また，西側は柱穴，31号土壙により切られる。

本遺構は，形態的には住居址と考えられるが，具体的痕跡が認められない事から住居址とは分離した。覆土は黄褐色土層で粘土ブロックを含む。

第30号土壙

遺構（第23図）　29号土壙の縁辺を利用して掘り込まれている。規模は270×200cm，深さ70cmで，平面長方形を呈する。覆土は４層に分かれる。１層は黄褐色土層で，粘土，焼土が混入



第23図　土　　壙（29～31，33～37号）

する。2層は暗褐色土層。3層，黒褐色土層。粘土ブロック，炭を含む。4層，黒色土層である。墳底，壁は明確で堅緻である。

遺物は，1層より土師器細片が僅に出土したのみである。

第31号土壙

遺構（第23図） 29，30号土壙の西側を切って構築される。規模は160×110cmで平面楕円形を呈する。深さは90cmあり，横断面は階段状を呈し，墳底からは湧水が認められた。覆土は焼土，粘土が帯状に堆積していた。

遺物は認められない。

第32号土壙

遺構（第21図） D－8－ニ区に位置し，31号土壙の南に接する。規模は215×140cm，深さ10cmと浅く，平面は不整三角形を呈する。南側は42号土壙に切られる。墳底は堅緻で平坦である。土壙は灰および粘土によって覆われており，覆土内より須恵器坏形土器，羽口，鉄滓等出土した。

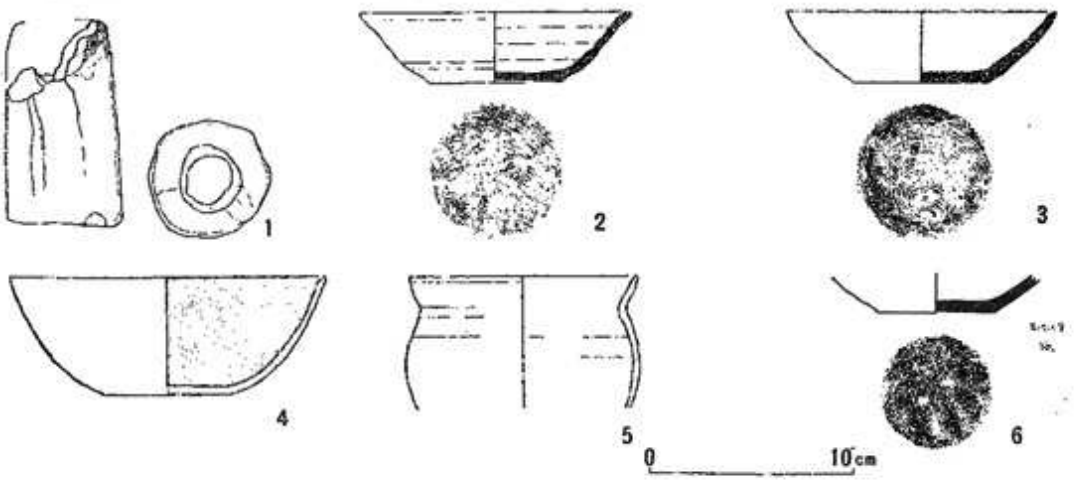
遺物（第24図1，2，3） 1は土製羽口である。長さ10cm，最大径5.7cmあり，孔径は末端で3cmを測る。先端には鉄等が溶けて附着し，黒いタール状を呈している。表面はヘラ削りを施しており，やや角ばった多角形を呈する。2，3は須恵器坏形土器である。2は口径13.2cm器高3.2cmを測る。底部切り離しは静止糸切りと思われる。色調は青灰色を呈し，胎土には小石を含む。焼成良好で堅緻である。3は口径13.2cm，器高3.5cm。底部は糸切り痕をとどめる。灰白色を呈し，焼成はやや不良である。

第33号土壙

遺構（23図） D－8－ロ区に位置する。規模は76×74cm，深さは38cmを測り，平面円形プランを呈す。壁は西側が2段の傾斜となるが，他は急斜に掘り込まれる。墳底は平坦で堅緻である。西側の壁より羽口破片，鉄滓が数点出土している。

第34号土壙

遺構（第23図） E－8－ニ区に位置する。規模は120×120cm，深さ40cmを測り，平面は不



第24図 第32号（1－3），36号（4・5）35号(6)土壙遺物

整形を呈す。西側にテラスをもち，東側は深いピット状を呈する。覆土は4層に分類される。1層は焼土。2層，暗褐色土層で，焼土を若干含む。3層は黄褐色土層で粘土が斑状に混入する。4層，黒褐色土層で粘土ブロックが多少混じる。

遺物は1層に若干出土したが，実測し得るのは無い。

第35号土壙

遺構（第23図）　F－9－イ区，8号土壙の南1mに位置する。周辺には多くのピットが存在し，その中心部に構築される。規模は100×75cmを測り，平面楕円形を呈する。壙底には2ヶ所のピットがあり，深さは30cmを測る。覆土は3層に分かれる。2層に粘土層が堆積し，1，3層は暗褐色土層に覆われる。

遺物（第24図6）　粘土層より須恵器坏形土器が出土している。底部に糸切り痕をとどめる。色調は青灰白を呈し，胎土に小石を含み焼成は良好である。

第36号土壙

遺構（第23図）　E－8－イ，ニ，E－9－ニ区にまたがって位置する。規模は230×200cm，深さ71cmを測り，平面楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がるが，内湾する部分もある。壙底は平坦であるがやや軟弱である。西側一部を柱穴に切られる。覆土は3層に分かれる。1層，褐色土層で焼土，粘土が混入する。2層は暗褐色土層，粘土，焼土が少量含まれる。3層は黒褐色土層である。遺物は1層，3層に含まれ，2層中は極めて少ない（第47図一参照）

遺物（第24図4，5）　4は内面黒色の土師器坏形土器である。口径15.3cm，器高5.8cmを測る。器肉は薄い。色調は赤褐色を呈し，胎土は小石，砂粒を含む。焼成は悪い。底部および周辺はヘラ削りを施すが，軟弱のため明瞭でない。5は口径11cmを測る小形の土師器坏形土器である。器内外面とも横ナデ調整がなされ，色調は黒褐色を呈し，焼成は良好である。

第37号土壙

遺構（第23図）　E－8－ニ区に位置する。規模は140×140cm，深さ27cmで平面円形を呈し，断面は皿状を呈する。覆土は暗褐色土層である。

土壙内より11点の土師器細片が出土したが実測可能な遺物はない。

第38号土壙

遺構（第28図）　F－9－ロ区，35号の南4mに位置する。規模は100×60cm，深さ60cmで，平面楕円形を呈する。確認面より20cm上部において鉄滓がまとまって出土した。覆土は5層に分類されるが，色調については大差なく，鉄滓の密度によって分けている。最も鉄滓が多いのは1層であり，5層が最も少ない。鉄滓は総重量1.3kg出土した。

第39号土壙

遺構（第28図）　E－8－イ区に位置し，2号井戸址に接する。規模は255×150cm，深さ15cmを測り，平面長方形を呈する。壙底は2段を呈し，北側がテラス状となる。覆土は2層に分かれ，1層焼土，2層暗褐色土層である。なお，壙底にはピットが1ヶ所設けられているが浅い。

出土遺物はない。

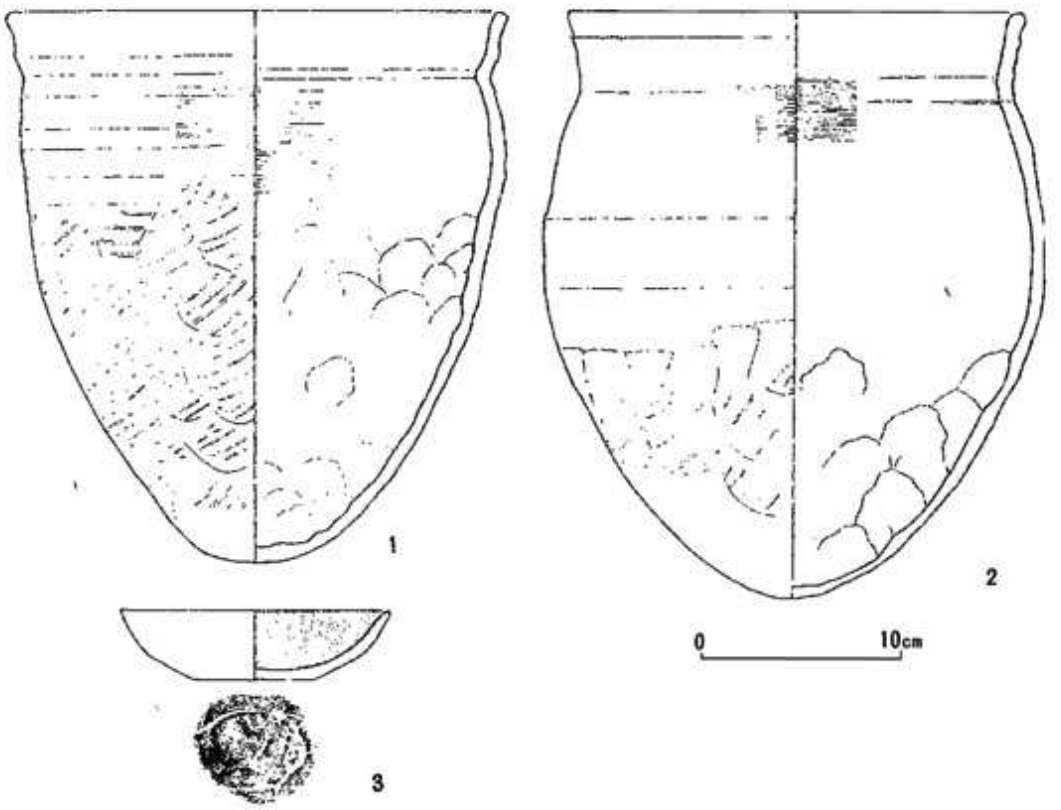
第40号土壙

遺構（第25図）　E－9－イ区，19号土壙の西1.5cmに位置する。規模は115×85cmで不整楕円形プランを呈する。ほぼ垂直に50cm掘り込まれ，壙底は鍋底状となる。覆土は4層に分かれる。1層，黄褐色土層。鉄滓粒を多く含み，粘土が混入する。2層，暗褐色土層。鉄滓粒を多く含むが，粘土は含まれない。3層，黒褐色土層。4層，黄褐色土層。粘土粒が斑状に混入し，しまりが良い。1層と2層との間に鉄塊がブックとなって入るが，これは鉄滓の集合であって1層として把握される。なお，遺物の大半は1層よりの出土である。

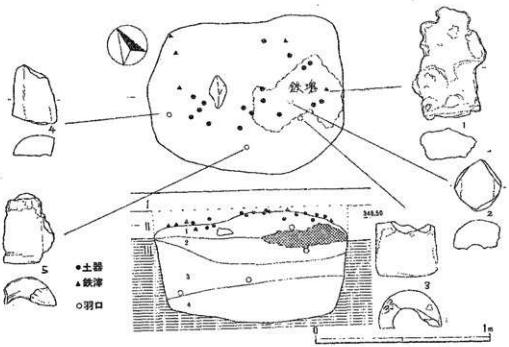
遺物（第25図）　土器はすべて細片のため実測不可能であった。図示したのは1が鉄滓で，他は羽口破片である。鉄滓については後章で触れるので，ここでは省略する。2，4は細片のため全体の形状は明瞭でない。3は末端部分で，径は6cmを測る。焼成は極めて良好で，堅緻である。5も末端部分で，推定径は6cmである。焼成は良好である。

第41号土壙（甕棺墓）

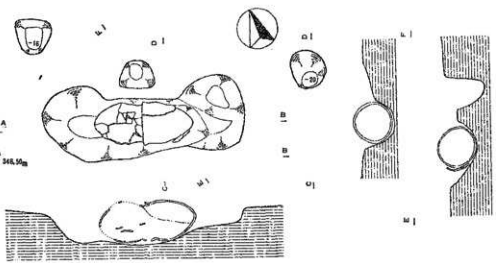
遺構（第26図）　E－8－ロ区，2号井戸の南1mに位置する。規模は115×45cm，深さ22cmで，平面は瓢箪形を呈する。壙底は凹凸があり，東壁はなだらかに立ち上がる。甕棺は合わせ口式で，壙底に接して出土した。内側の甕は破損しており，甕内部に土が流入していた。内部には骨片等は認められなかった。また，外側の甕の胴部下半には土師器坏が斜めに接して出土している。



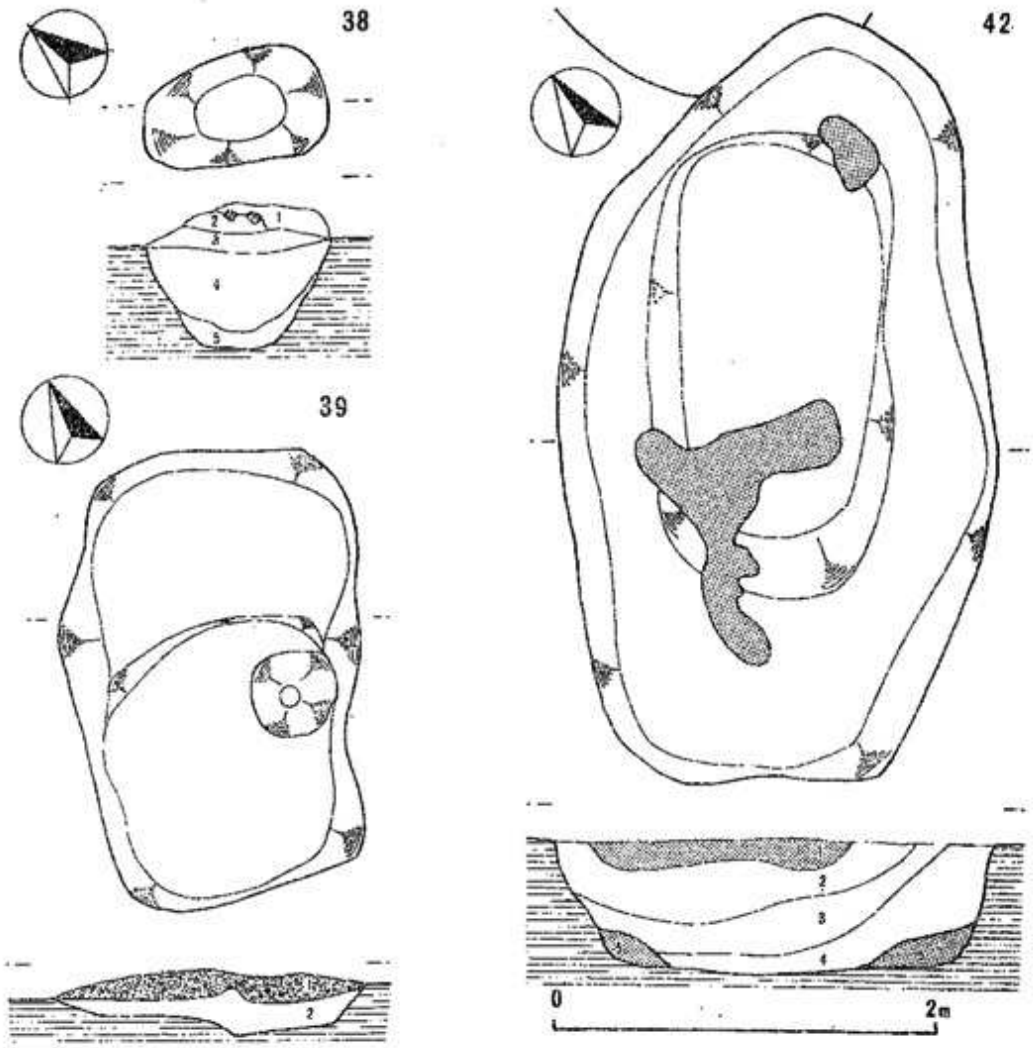
第25図　第41号土壙出土遺物



第26図　第40号土壙遺物分布図



第27図　第41号土壙要検出土状態（縮尺1/10）



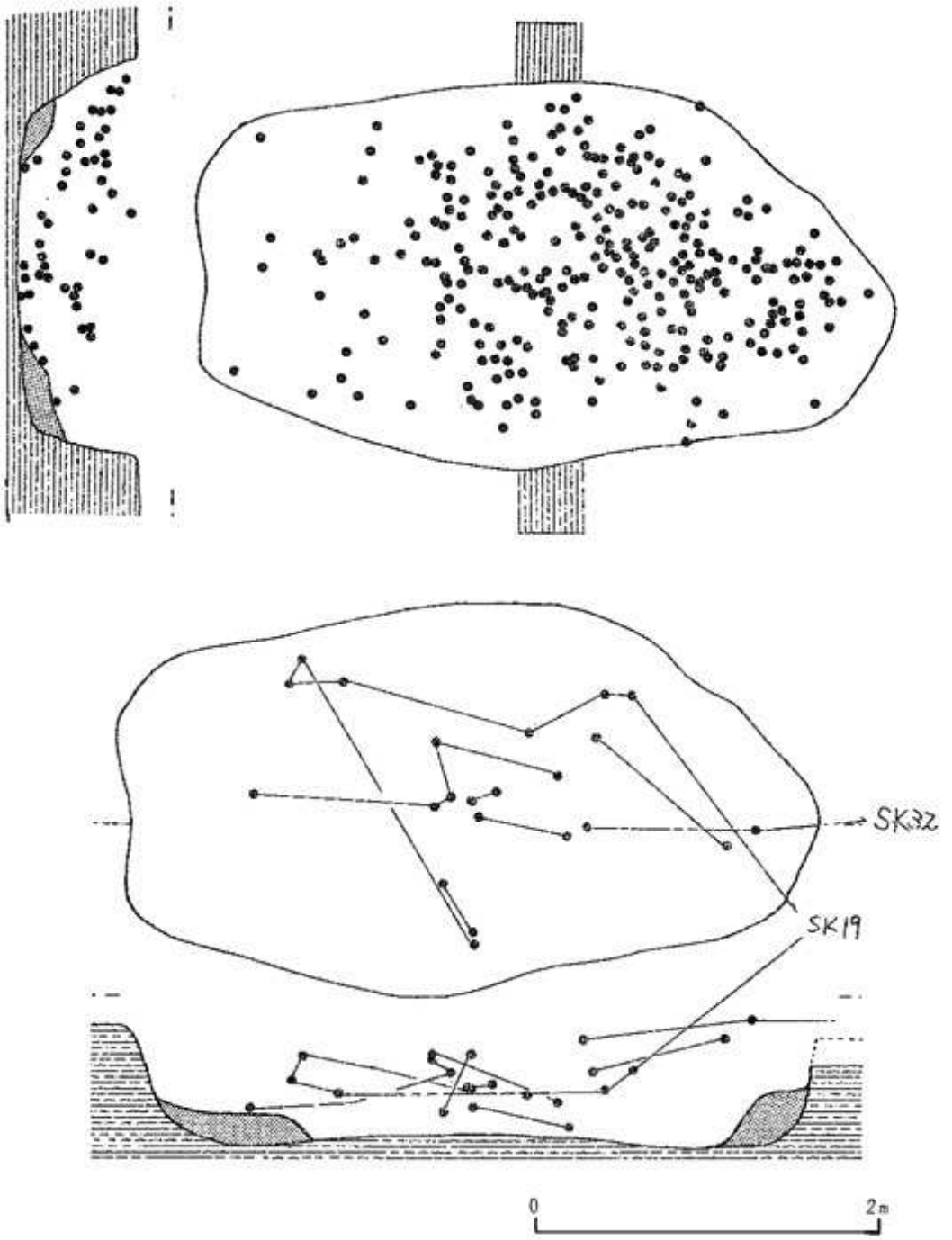
第28図　土　　壙（38，39，42号）

土壙周辺にはピットが検出されたが，附属するものかどうかは不明である。

遺物（第27図）　1，口径24.5cm，器高27.7cm。2は口径22.7cm，器高29.5cmを測る。1，2とも同様な技法で製作・調整されている。外面は，口縁から胴部上半にかけてロクロ痕をとどめ，頸部にはハケ目状の条線が認められる。胴部下半はタタキがなされ，その後かるいミガキがなされるためタタキ目が明瞭に浮きでていない。底部は丸底となる。器内面はハケ目状の条線痕が認められ，下半部はタタキのうらあて痕が残り凹凸が激しい。色調は褐色で，胎土に小石を含み焼成は良好である。3は内面黒色の土師器坏形土器である。口径13.4cm，器高3.5cmを測る。底部はヘラ削り調整と思われる。胎土に小石，砂粒を含み，焼成は悪い。色調は黒褐色を呈す。

第42号土壙

遺構（第28図）　D－8－ハ，ニ区，甕棺墓，2号井戸址の西2mに位置し，32号土壙の南側を切る。規模は400×230cm，深さ70cmで平面楕円形を呈する。壁は急斜に掘り込まれ，壙底は平



第29図　第42号土壙遺物分布図・接合図

担である。壁際に貼り粘土がめぐらされており，そのため墳底は二段状を呈す。覆土は4層に分かれる。1層は黄褐色土層で，粘土，砂粒からなりブロック状に認められる。2層，黒褐色土層。鉄滓が多く含まれる。3層，黄褐色土層。粘土が斑状に含まれる。4層，茶褐色土層。鉄滓を含み，粘土ブロックが含まれる。

遺物分布は，集中的に出土し，完形品，接合例も多い。層位的な差は認められないが，総じて下層からは完形品が多い。また，須恵器甕胴部破片は19号出土例と接合している（第51図参照）。遺物は土師器坏・甕形土器，須恵器坏形土器，羽口，鉄滓，鉄製品等多量である。

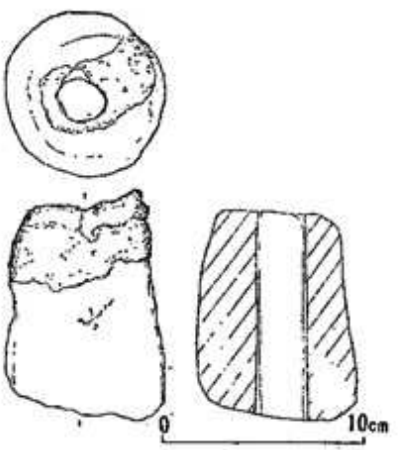
遺物（第30・31図） 図示し得たものは土師器甕形土器（第31図1～6），須恵器甕形土器（7～12），土師器坏形土器（13～18），羽口（第30図）である。

土師器坏形土器は，底部に糸切り痕を残すもの（1，2）とヘラ削り調整によるもの（3～6）とに二分類される。1は口径14.3cm，器高3.7cmを測る。胎土に鉄滓粒を含み，色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。2は口径13.9cm，器高3.7cmを測る。胎土，色調とも1に相似する。3は口縁部を欠損する。底径6.8cmを測り，かなり器高の高くなる土器であろう。4は，口径13.6cm，器高3.6cm。5は口径12.5cm，器高3.7cmで，胎土，色調は1と同様で，特に鉄滓を多く含む。底部は器表面が荒いため明瞭でないが，回転ヘラ削り調整であろう。6は口径15.3cm，器高5.5cmでかなり深い。3，4，6は胎土に小石，砂粒を含み，内面黒色を呈するなど類似する。

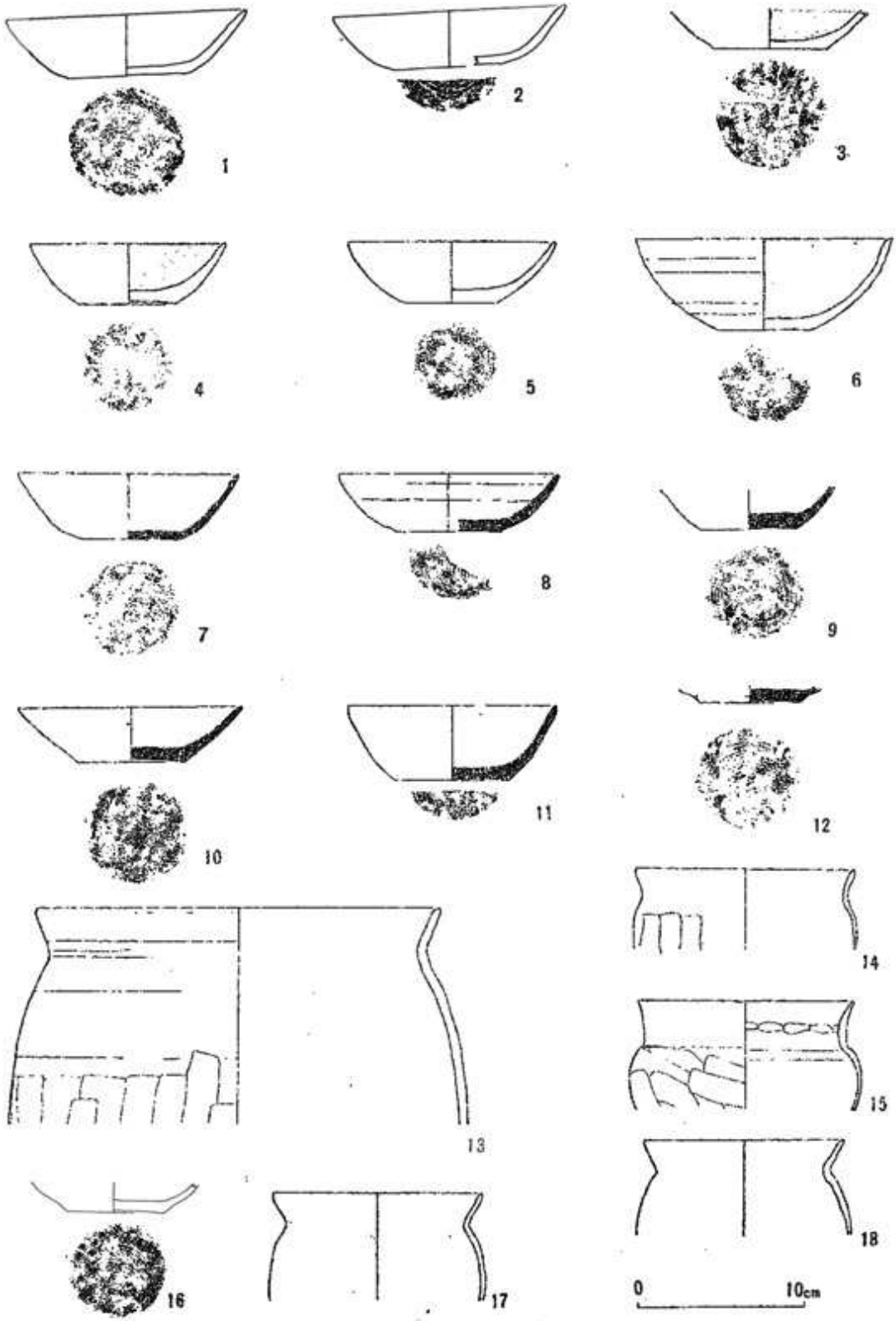
須恵器坏形土器はすべて糸切り痕をとどめる。7は口径13.1cm，器高3.9cmを測る。色調は青灰色を須し，焼成良好で堅緻である。8は口径13.1cm，器高3.5cmで，器表面はロクロ成形痕を明瞭にとどめる。焼成良好で堅緻である。10は口径13.3cm，器高3.3cmを測る。11は口径13.5cm，器高4.5cmを測り，口径に比して底径が大きい。色調は青白色を呈し，焼成良好で堅緻である。

土師器甕形土器は完形品がなく，口縁から胴部にかけての破片が大部分であった。従って全体の調整技法については不明瞭である。また，17，18は焼成が悪く器表面の観察は出来なかった。口縁形態は「く」の字状に外反する例（13，14，17，18）と「コ」の字状に近い形態をとるもの（15）とに分かれる。前者は口縁内外面に横ナデ調整し，胴部以下は縦位にヘラ削りを行なう。口径は24cmの大形（13）と，口径12cm前後の小形（14，17，18）とがある。後者は口縁内面の一部にヘラナデを施して器厚を整える。胴部とは一段の稜をなし，胴部以下は斜位のヘラ削りが行なわれる。口径12.8cmを測る。16は底部で，径5.8cmを測る。糸切り痕をとどめる。

羽口は多く出土したが，完形は1例のみである（第30図）。全長11.2cm，口径は先端で4.8cm，末端で8cm。孔径は先端で2.4cm，末端で2.8cmを測る。全



第30図　第42号土壙出土羽口



第31図　第42号土壙出土遺物

体的には分厚く，すづまりの形態である。先端は鉄等が溶けて附着している。胎土に砂粒，小石を含み，焼成悪く，器表面が荒い。

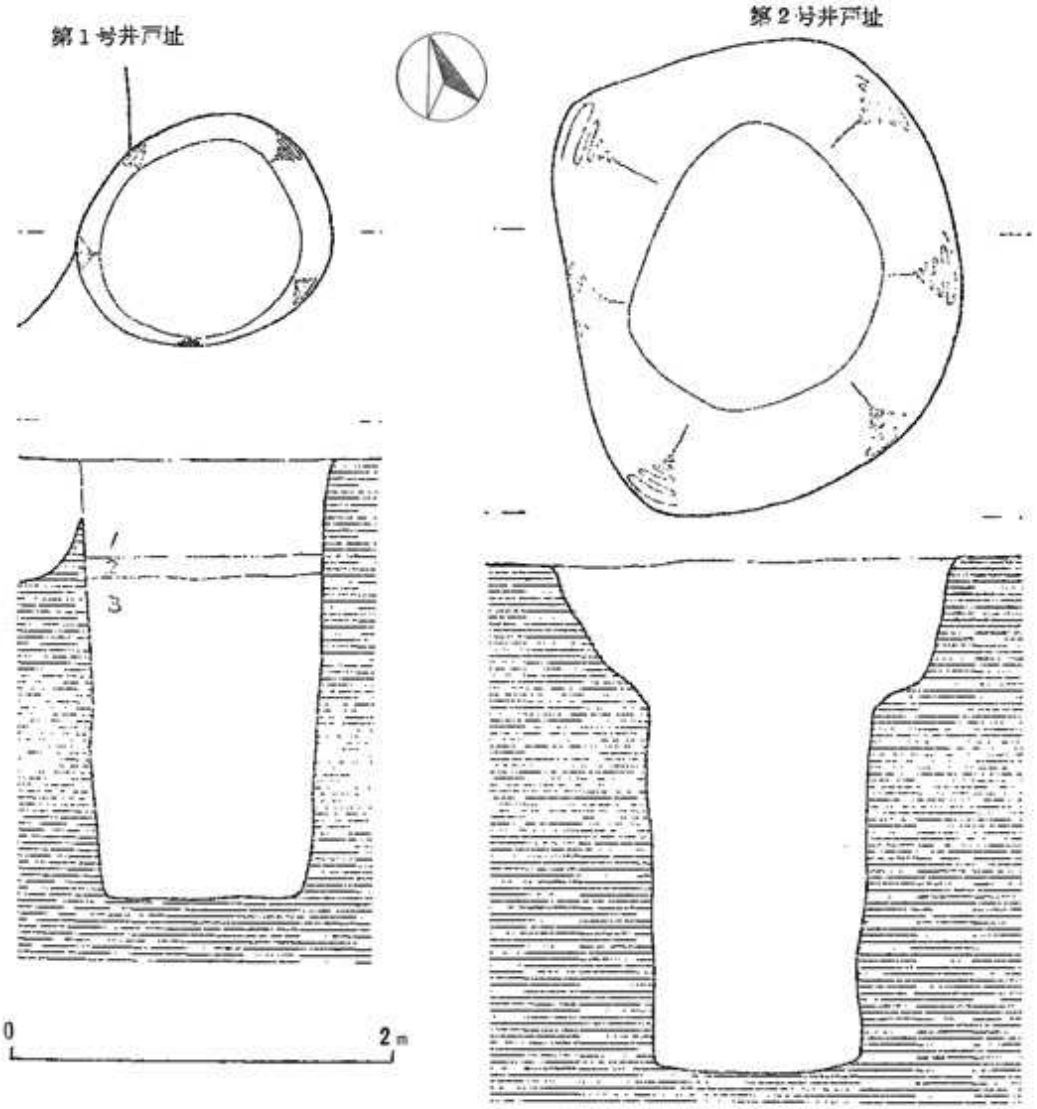
第3節　井　戸　址

第1号井戸址（第32図）

遺構　E－9－イ区に位置し，第23号土壙を切る。規模は135×125cmのほぼ円形プランを呈し，深さは230cmを測る。底面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。

確認面より約50cm下で層厚10cmの粘土が貼ってあったため当初土壙と惑わされた。

覆土は3層に分かれる。1層は暗褐色上層。ボロボロとしておりしまりは悪い。2層は粘土層。この粘土層以下は，水が溜っていたためセクションが崩壊してしまい未実測となってしまったが，黒色土1層として差し支えないと思われる。



第32図　第　1，2　号　井　戸　址

2層の粘土層は，井戸址廃絶後，掘り込みをそのまま再利用して構築された土壙底と考えられよう。

遺物　出土遺物は，1層より土師器細片，羽口片が出土した。3層からは木製品が出土したが樹皮も残っており，かなり良好な遺存状態であった。

木製品は以下の4点が出土した（第34図）。

1　全長422mm，幅46～24cmを測る。横断面は台形を呈するが，中ほどより基部にかけて，約半分の薄さに削っており，断面長方形を呈す。先端部はややふくらみ，焼けて黒く炭化している（トーン部分）。また，先端部離面はかなり表面が荒れており，柄ずれを思わせる。

2　1と同形式である。現存長410mm，幅28～38mmを測る。1は中ほどより直角に薄くしているのに対し，斜めに削って薄くしている。

3　物差状木製品。全長156mm，幅20mmを測る。4条の刻みが施され，その間隔は3.3乃至3.4mmで等しい。刻みを施した後に刃物で薄く削っており，不鮮明となっている部分もある。刻みに機能を考えることは多少躊躇する。

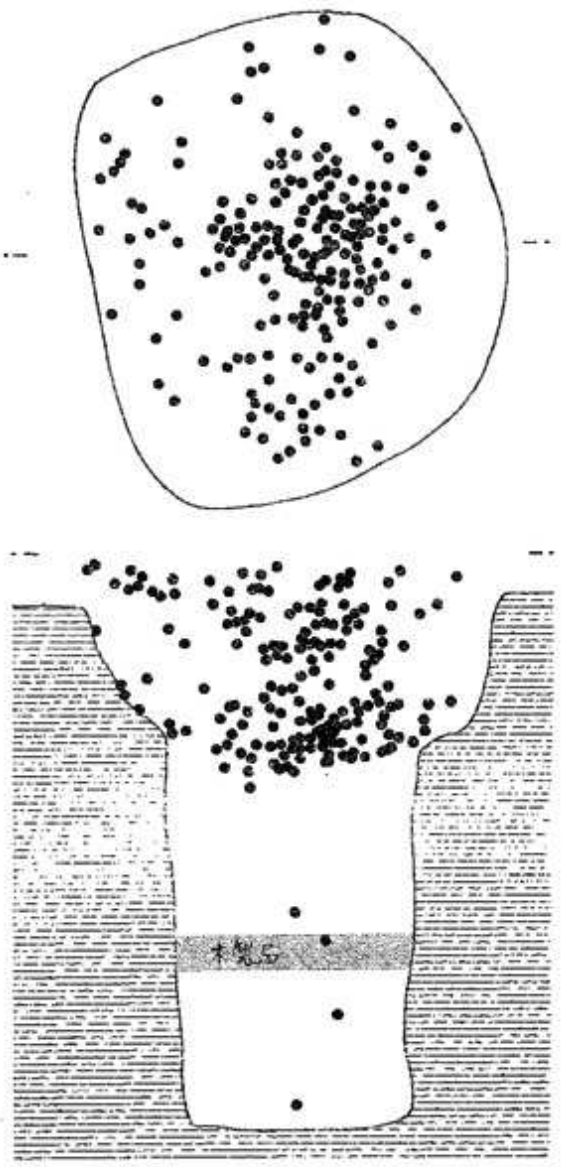
4　木柄。接合しなかったが現存長1000mmを超える。小枝をそのまま利用し，表皮が多く残されている。先端部，基部には多少加工が施されている。

以上のほか井戸址内より人頭大の石が出土しているが，人為的な加工痕などは認められない。

第2号井戸址（第32図）

遺構　E－8－イ，ロ区，第41号土壙（甕棺墓）の北1mに位置する。規模は225cm×125cmの楕円形プランを呈し，深さは270cmである。上部は平面楕円形ですり鉢状であるが，下部は円形で，ほぼ垂直に掘り込まれている。第1号井戸址と同様，井戸枠などなく素掘りの井戸址である。覆土は，水分の浸透具合いにより多少色調に相異はあるが，ほぼ1層と考えられる。

遺物は，上部に多量に出土した（第33図）。土師器坏破片が多く，鉄滓，破砕礫なども多く出土した。下部にいくにしたがって減少す



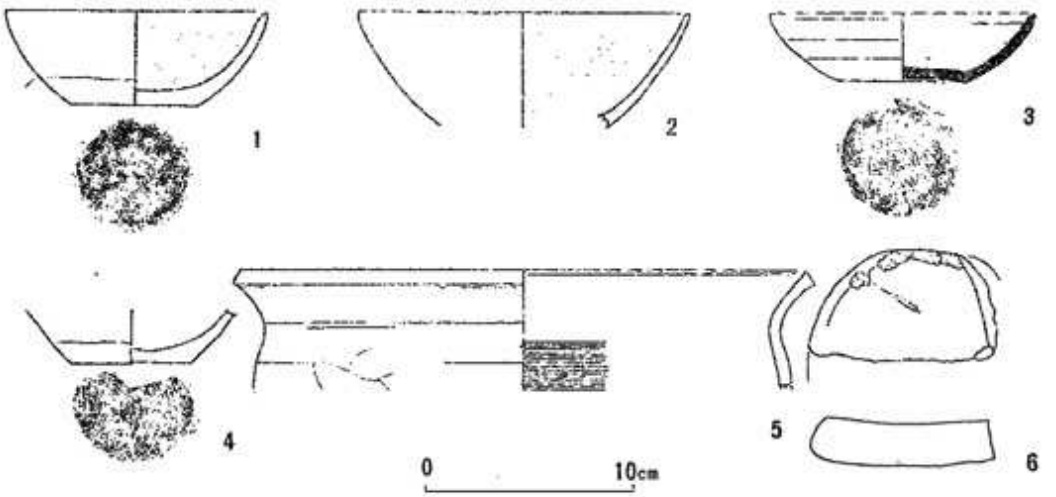
第33図　第2号井戸址遺物分布図（縮尺1/40）

第34図　第１号井戸址出土遺物

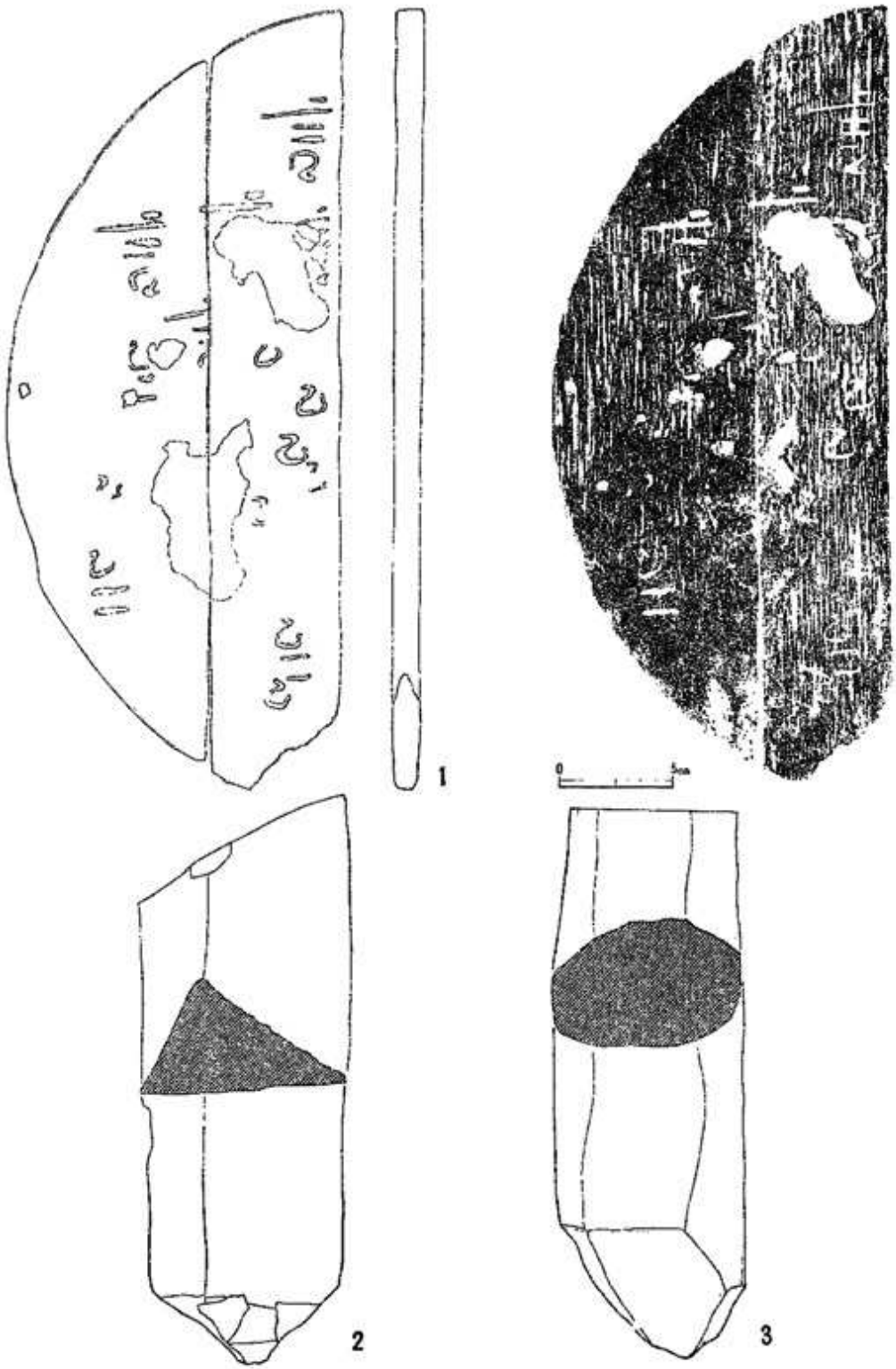
るが，土器，鉄滓に変わって木製品がまとまって出土した。底面では羽口，鉄滓が僅かに出土している。

遺物（第35図～37図） 第35図１，２は土師器坏形土器である。１は口径12.5cm，器高4.5cmを測る。内面黒色で丁寧にヘラ磨きがなされる。底部および底部周辺は回転ヘラ削り調整が行なわれる。焼成は良好である。２は底部を欠損する。口径16cmを測り，１と同様に内面に黒色処理を施す。胎土に砂粒を含み，焼成は悪い。３は灰白色を呈する坏形土器である。底部は糸切り痕をとどめ，「∩」の沈刻が認められる。４，５は土師器甕形土器である。４は底部で径5.7cm。底部周辺は回転ヘラ削りを施すが，底部は糸切り痕を残し無調整である。５は口径27.2cm。口唇部に一段の稜を作る。器表面頸部以下は部分的にヘラ削りが施される。色調は乳褐色を呈し，焼成良好である。６は砥石と思われる。表面には使用痕と思われる条線が認められる。

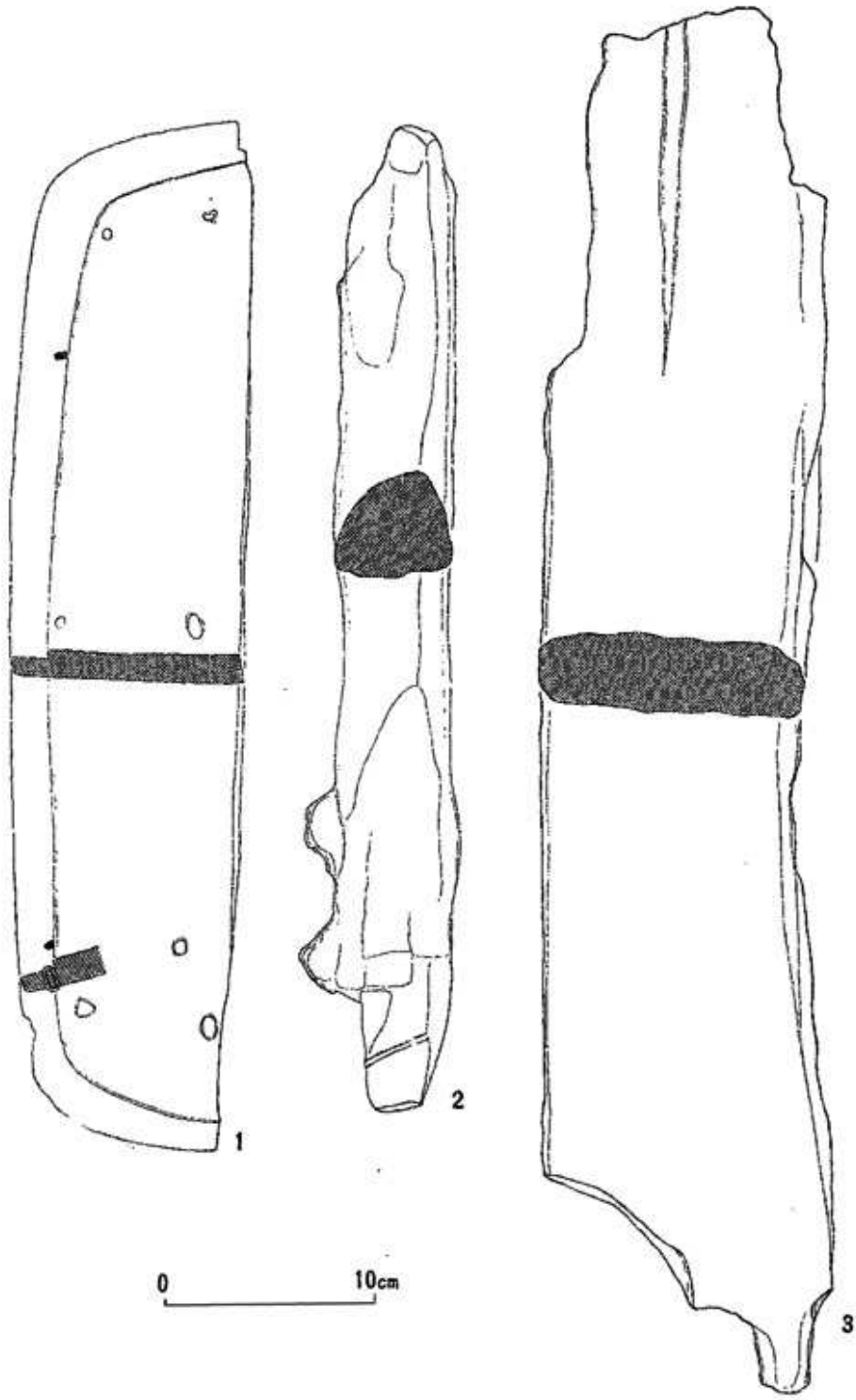
木製品（第36・37図）は集中的に出土した。用途別に曲物（第36図１，第37図１）と建築材等（第36図２，３，第37図２，３）とに分類される。第36図１は曲物の上板もしくは底板であろう。推定径180mm，厚さ８～10mmを測る。表面には「言」，「乙」，「ニ」と読み取れる文字が焼印される。「乙」は「言」の「ロ」を逆にしたものと全く別個のものとが認められる。これらの文字は不整然に並んでおり，また一部には黒く焼け焦げている部分もあり，不明瞭となっている。第37図１は曲物の底板であろう。形態は楕円形を呈す。全体の$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{4}$で，これらは一枚板では取れないためつなぎ合わせたもので，孔はそのためと思われる。側板が底板をはみ出さない「カキイレゾコ」の形態で２ヶ所に側板と接合させた樺皮が認められる。第36図２，３は先端を尖頭状にしている。いずれも中途で切断されている。第37図２は棒状の杭材と思われる。先端には鉄製釘が打たれた痕跡がある。３は扁平な矢板状の木製品である。



第35図　第２号井戸址出土遺物(1)



第36図　第２号井戸址出土遺物 (2)



第37図　第２号井戸址出土遺物 (3)

第4節　掘立柱建築址

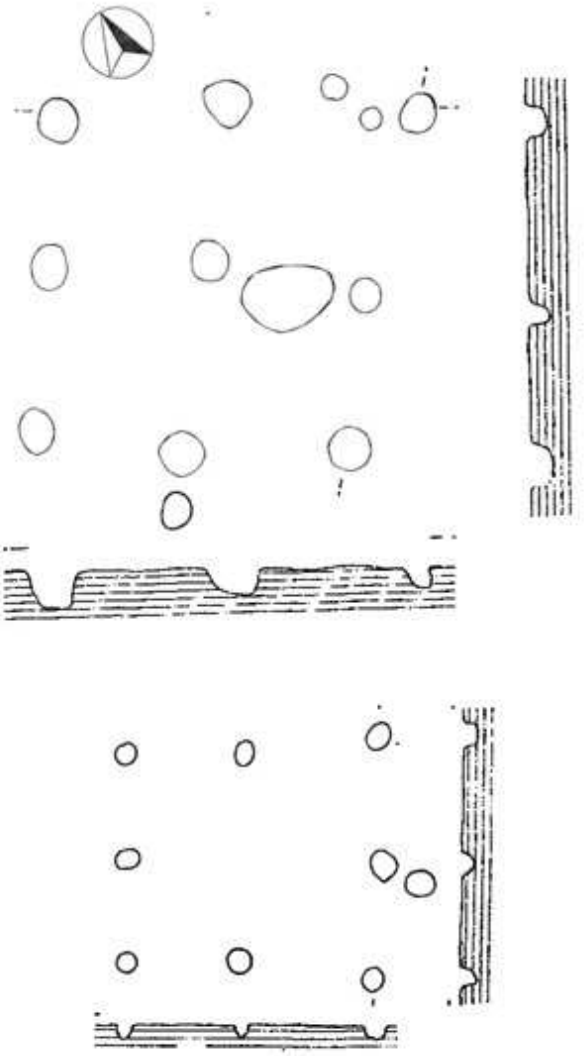
調査によって明らかにされた掘立柱建築址は4棟である。この他に若干の建築址遺構が推定されるが，充分な検討をしていないので本稿では除外した。

第1号掘立柱建築址および第2号掘立柱建築址は調査区の最も北方に位置する。第1号掘立柱建築址は第2号土壙を切る。第3号掘立柱建築址は第1号住居址を切る。第4号掘立柱建築址は第23号土壙に切られる。

4棟の掘立柱建築址の計測置は下表のとおりである。1号，2号掘立柱建築址は柱間寸法等に類似がみられ，3号，4号掘立柱建築址は相互に類以点が認められる。

第3号出土遺物説明

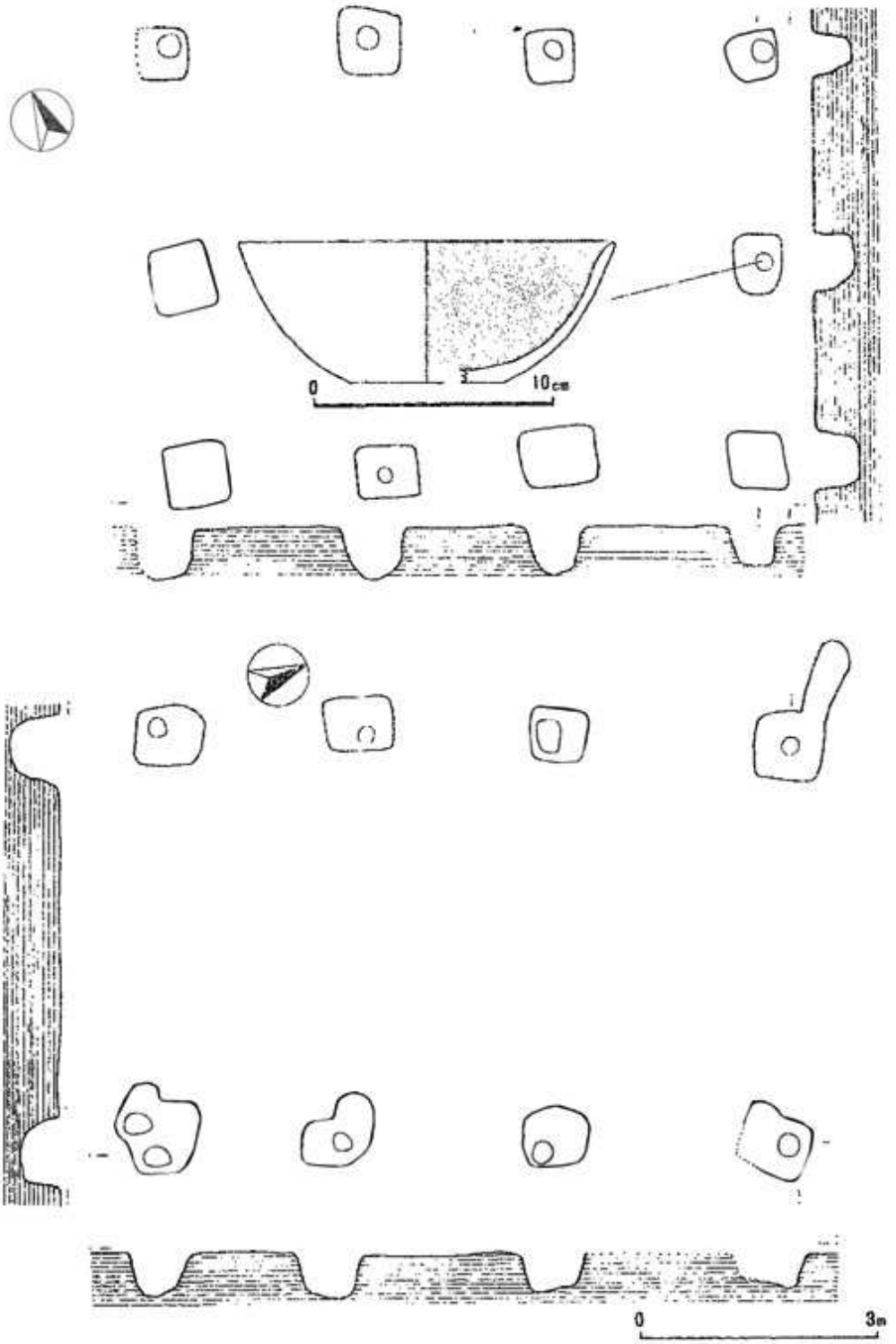
口径16cm，器高6cmを測る土師器坏形土器である。底部外面はヘラ削り調整される。器内面は黒色処理が施される。胎土には小石，砂粒を含む。焼成は良好である。



第38図　第1・2号掘立柱建築址（縮尺1/60）

No.	棟方向	規模 桁行×梁行(間)	柱間寸法 (m) 桁行	柱間寸法 (m) 梁行	柱間隔 (m) 桁行	柱間隔 (m) 梁行
1	——	2×2	2～2.2	2	1～1.2	1
2	——	2×2	3.3～3.4	2.8～3.2	1.5～1.8	1.4～1.8
3	E W	3×2	7.4	5.3	2.4～2.6	2.4～2.6
4	N S	3×1	8	5.1	2.5～3.1	5.1

第1表　掘立柱建築址計測置



第39図　第３・４号掘立柱建築址

B地区（第40図）

B地区において検出された遺構は，土壙4基，遺物集中個所1である。第Ⅱ章で触れたように，圃場整備事業により表土が削平されて露呈したものである。以下，各遺構と出土した遺物の概要を記す。

第1節　遺　　構　（第41図）

1号土壙

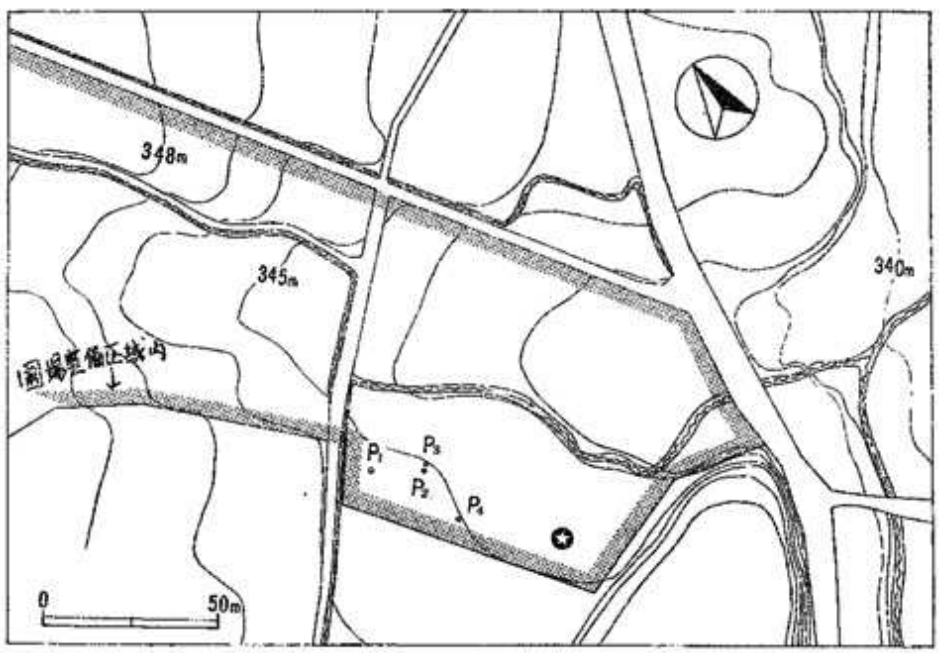
B地区発掘の契機となった遺構である。規模は180×175cm，深さは54cmで，平面形は円形である。約100cmの偏平な河原石が土壙に蓋をするような状態で出土し，この河原石を除去すると多量の木製品が出土した。曲物は，土壙に対し垂直に出土し，下半部は欠失していた。この曲物より上層は，粘着性に富む黒色土層であり，その下層に僅かな砂層があった。最下層は，砂礫混りの青白色粘土層である。なお，鍬状木製品は，壙底と上層とに分かれて出土し接合している。

2号土壙

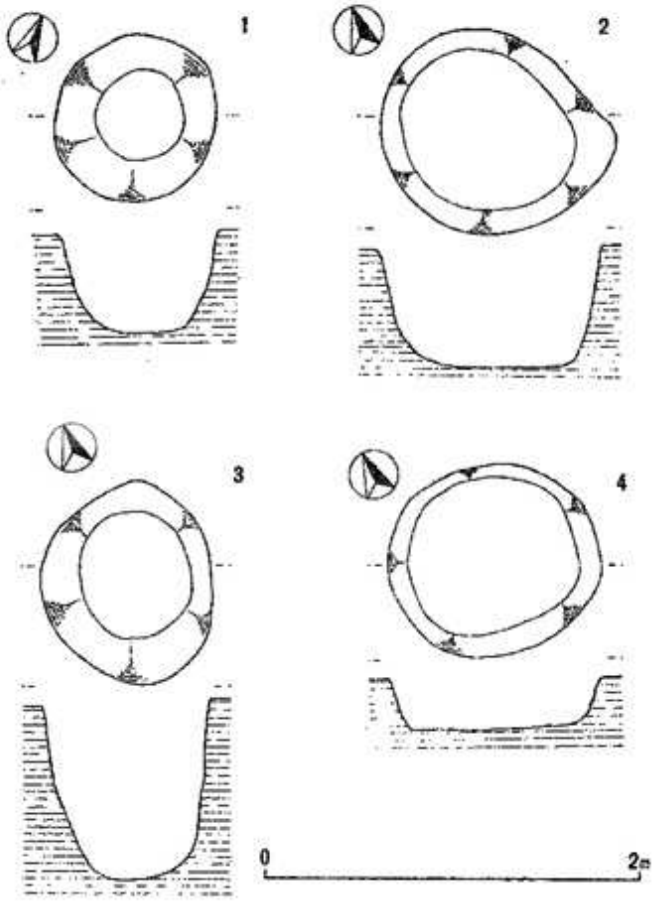
1号土壙の東北約10mの地点に位置する。プランは，125cm×115cm，深さ61cmで平面円形を呈す。1号土壙とほぼ同形態であるが，全体的にやや大きい。壁は，ほぼ垂直に掘り込まれ，壙底もほぼ平坦である。確認面より約30cmより木製品が出土し始めた。漆器は，南壁際より伏せた状態で出土し，曲物，木柄類は壙底より出土した。覆土は，黒色土層から順次青白色粘土層へ移行する堆積状況であった。

3号土壙

2号土壙の北1.1mの地点に位置する。規模は110cm×90cm，深さ100cmで，楕円形プランを



第40図　B 地 区 遺 構 分 布 図



第41図　B　地　区　土　壙

呈す。壁は，ほぼ垂直に掘り込まれ，やや内湾する個所もある。遺物は総じて壙底より出土している。

4号土壙

1号土壙の東30mの地点に位置する。規模は，120cm×110cmで円形プランを呈し，深さは45cmと比較的浅い。覆土は，黒色土と青白色粘土の混土層である。遺物は全て木製品であり，壙底より出土している。

遺物集中個所

前述した土壙群よりさらに東へ約30mの地点で，石臼，打製石斧，土師器片等が集中的に出土した。土器はかなり磨滅しており時代を明確に判断できるものはなかった。

地形的には，東南台地の崖下でもあり，廃棄乃至流れ込みの可能性がある。

B地区遺構小括

4基の土壙は既に削平された地区より確認されたのであったが，かなり良好な遺存状態である。平面形は円形乃至楕円形で，規模も直径100cm前後で，ほぼ同一規格と考えてよいであろう。深さは45～100cmでややバラツキがみられるが，これは削土によるもので，地形的に最も削平されなかった3号土壙が基本と思われる。

そしてこれらの機能は，第１号土壙の曲物等の出土状態から考えて，井戸址と考えられる。すなわち，１号土壙例は曲物を井戸枠としてすえ，周囲を木杭等で固定する。そして，底には砂利を入れ，泥の浮き上がりを押える。井戸が廃棄されるとき，これらが破壊されて埋められ，上部に大きな石で蓋をしたと理解されるのである。

第２節　遺　　物

B地区より出土した遺物は木製品が多く，他に石器等が若干出土した。木製品は井戸址と推定される土壙内より出土したが，特に１号土壙は多量であった。図示した以外１号土壙より杭材と思われる加工品が出土しているが，遺存状態が不良のため除外した。

1　木製品

A　曲物（第42図，第43図１）

第42図１，２は，１号土壙より重なって出土した曲物の側板である。破損しているため直径，平面形態は不明である。１は２の外側に接して出土したが，これは「■しの側板」をめぐらしたものであろう。綴じ合わせ部分は両端を相互に薄くして，そこが特に厚くならないように工夫している。３は２号土壙出土。１，２に比較してやや厚い側板である。綴じ合わせ部分の内側であり，樺皮で綴じ合わせた痕跡が認められる。第43図１は，直径230mm，厚さ８mmを測る円形曲物の底板である。底板が側板の内側にすっぽり嵌め込まれてしまう「クレゾコ」の形態を示す。周囲には７つの孔があり，木釘が認められた。２号土壙出土。

B　木柄（第43図５，６）

どのようなものの柄か不明であるが，２点３号土壙より出土している。５，６とも両端に加工を施すほかは，雑木の小枝をそのまま利用しているため表皮が多く残されている。６は，先端部に左右から鋭く切断して尖頭状を呈している。

C　鍬状（第37図４）

１号土壙出土。全長280mm，厚さ30mmを測る。中央部は，長さ80mm，幅30～40mmの台形着柄孔があけられている。先端部は両刃状を呈す。鉄刃が付いていた痕跡は認められなかった。

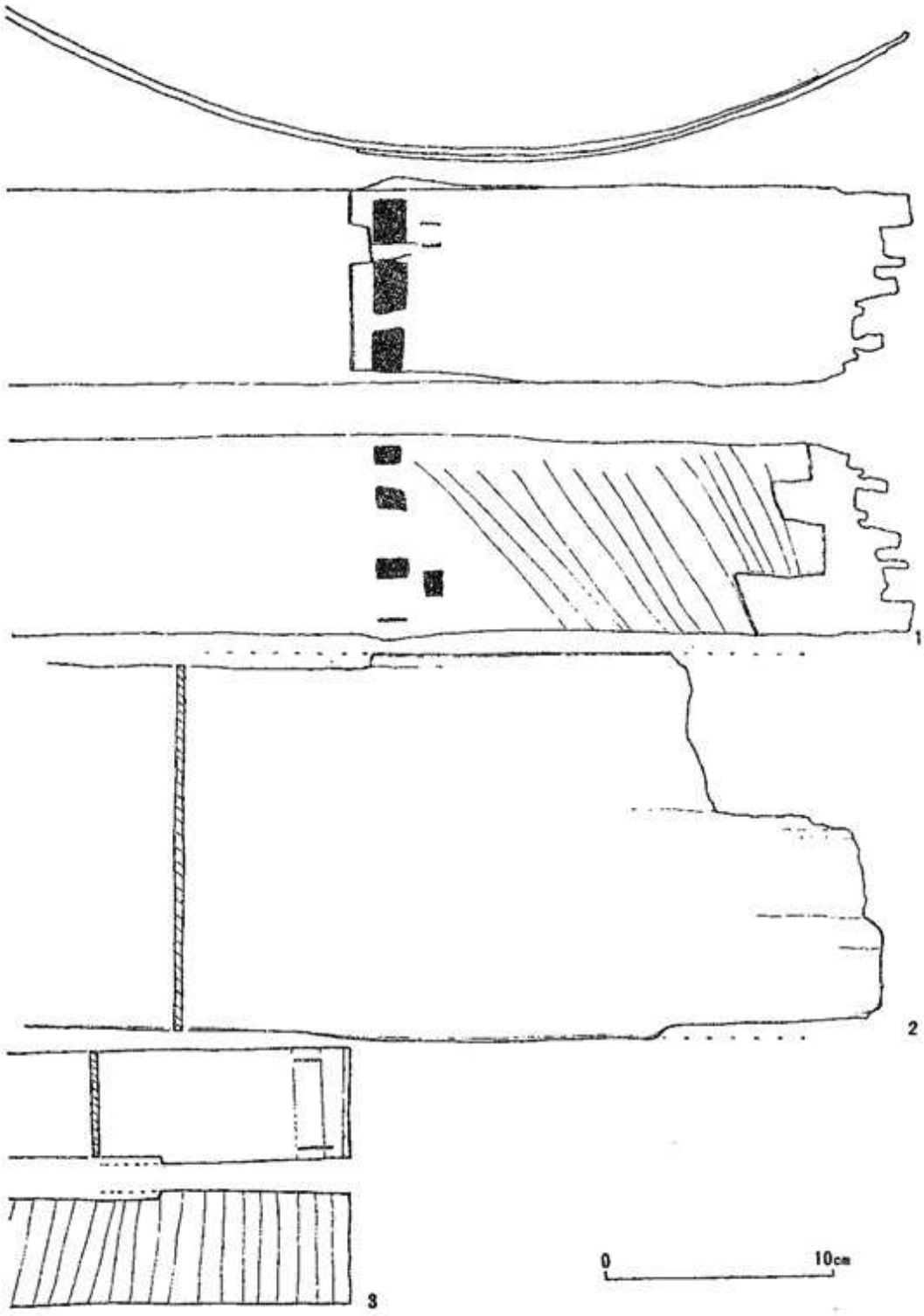
D　その他の木製品（第37図・２・３）

４号土壙より，約10点まとまって出土した斎串状の木製品である。遺存状態が悪かったため代表例を図示した。

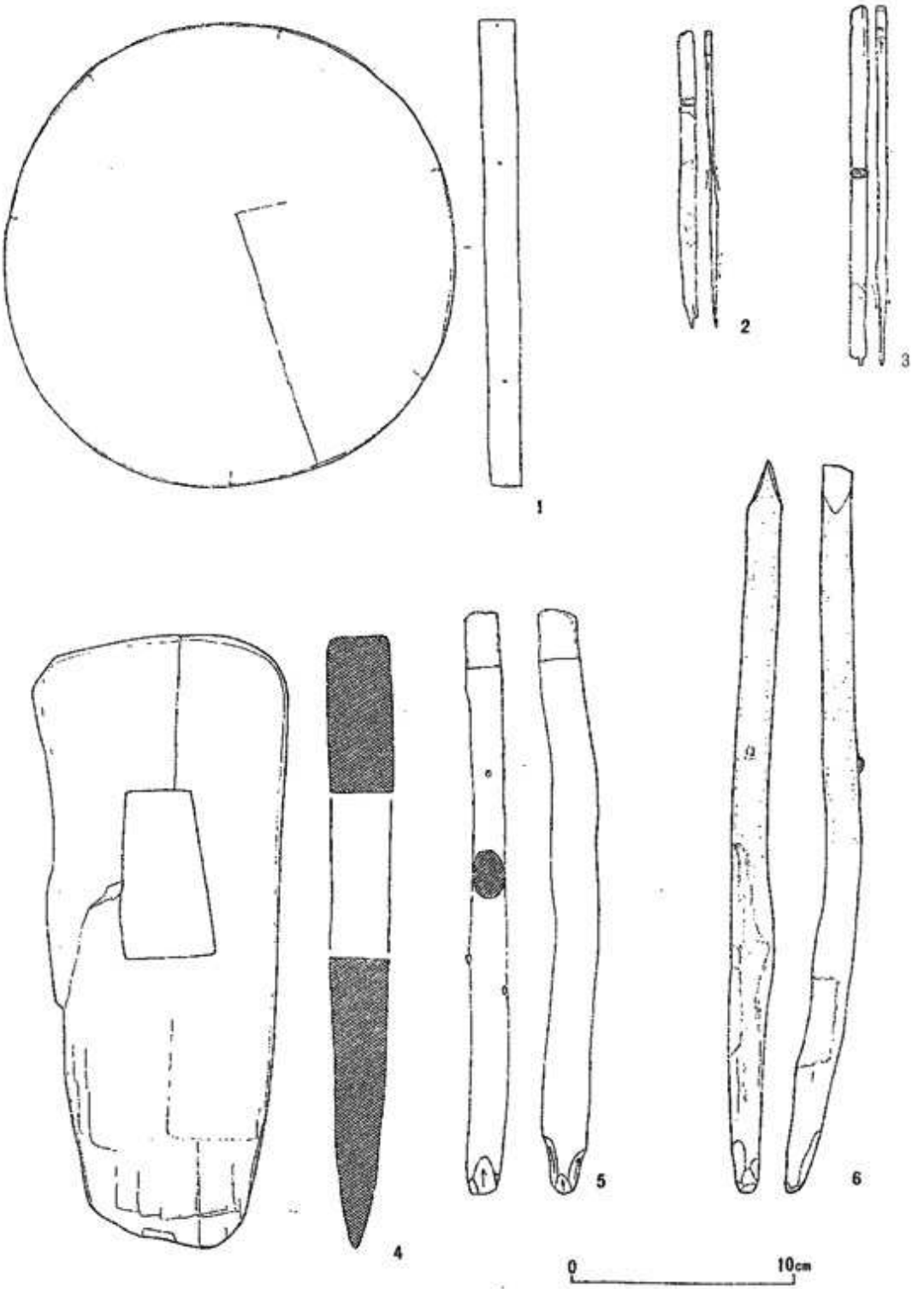
現存長120～150mmを測る。頭部は角状を呈し，その一辺に切り込みを施している。中央部および下部には，両面乃至片面を削って薄くしている。

これらは実用品と思われなく，呪術祭祀用具と考えられる。

この他，図示し得なかったが，２号土壙より漆器が出土している。



第42図　B地区出土遺物 (1)



第43図　B地区出土遺物 (2)

2　石器・石製品

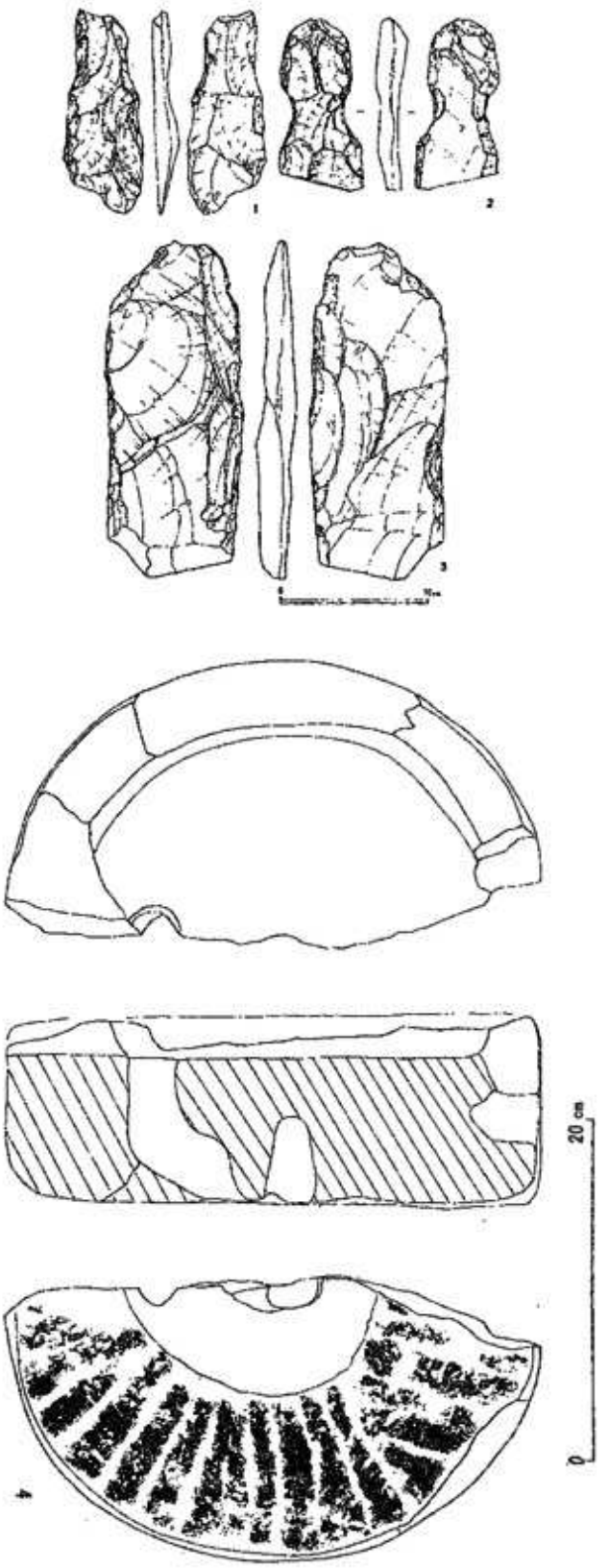
A　打製石斧（第44図1，2，3）

1，2は遺物集中個所の出土。1は，現存長13.5cm，幅5.5cmを測る。横長剥片を素材とし，分銅形に近い形に仕上げている。安山岩製である。2は，現存長11.5cm，幅5.5cm。縁辺を丁寧に調整を施して分銅形にしている。石質は砂岩である。1，2とも形態から縄文期所産のものと考えられる。

3は1号土壙，蓋石に接して出土した。現存長23cmを測る大形品で，石鍬と呼称するのが妥当かもしれない。平担な剥離で全体を薄く仕上げ，さらに縁辺には細加工が施されている。出土状態から，曲物等の木製品と同時期に廃棄されたと考えて差し支えあるまい。石質は砂岩である。

B　石臼（第44図4）

遺物集中個所の出土。約半分が残存する石臼の上臼であり，推定径32cmである。厚さは12cmである。磨臼の目は不整然のためはっきりしないが8分画と思われる。回転方向は反時計回りである。「こくおとし」は挽手孔の反対側に位置する。離面中心部には芯うけが認められる。へこみはほとんどない。



第44図　B地区出土遺物(3)

第Ⅵ章　成果と課題

第1節　遺物の出土状態について

前章において数ケ所の遺構で遺物分布について触れてきたが，本稿では土壙における遺物出土状態について述べることにしたい。

本調査では，表土層以下に包含される遺物は全て記録した。土壙における調査順序は以下の方法を採った。

1)　確認した時点において，土壙の中心で直交する幅約15cmのセクション帯を残して掘り進める。

2)　遺物は出土位置，レベルを動かさず柱状に残し，掘り下げられるまで掘り進める。

3)　グリット単位に50cm方眼のメッシュを組み，北，西からの距離，レベルを測りプロット用紙に記録する。

4)　2)，3)を繰り返して壙底まで掘り進める。

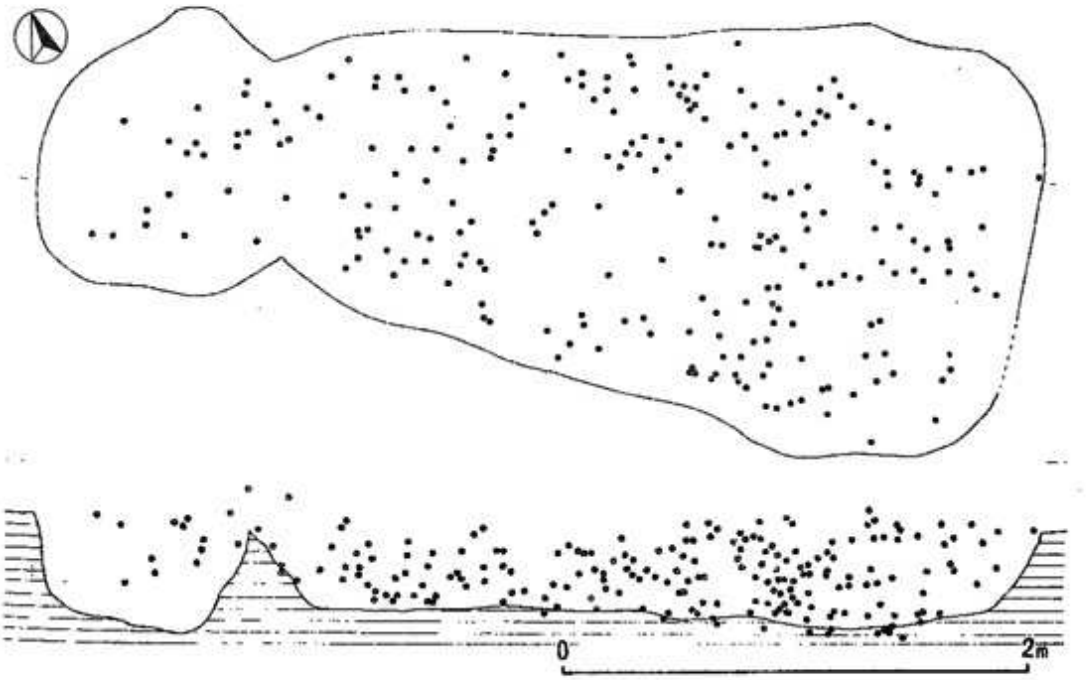
5)　セクションを通して土層を観察し，1/20で記録する。

6)　セクションを2)，3)を手順を踏まえて取り払い，完掘する。

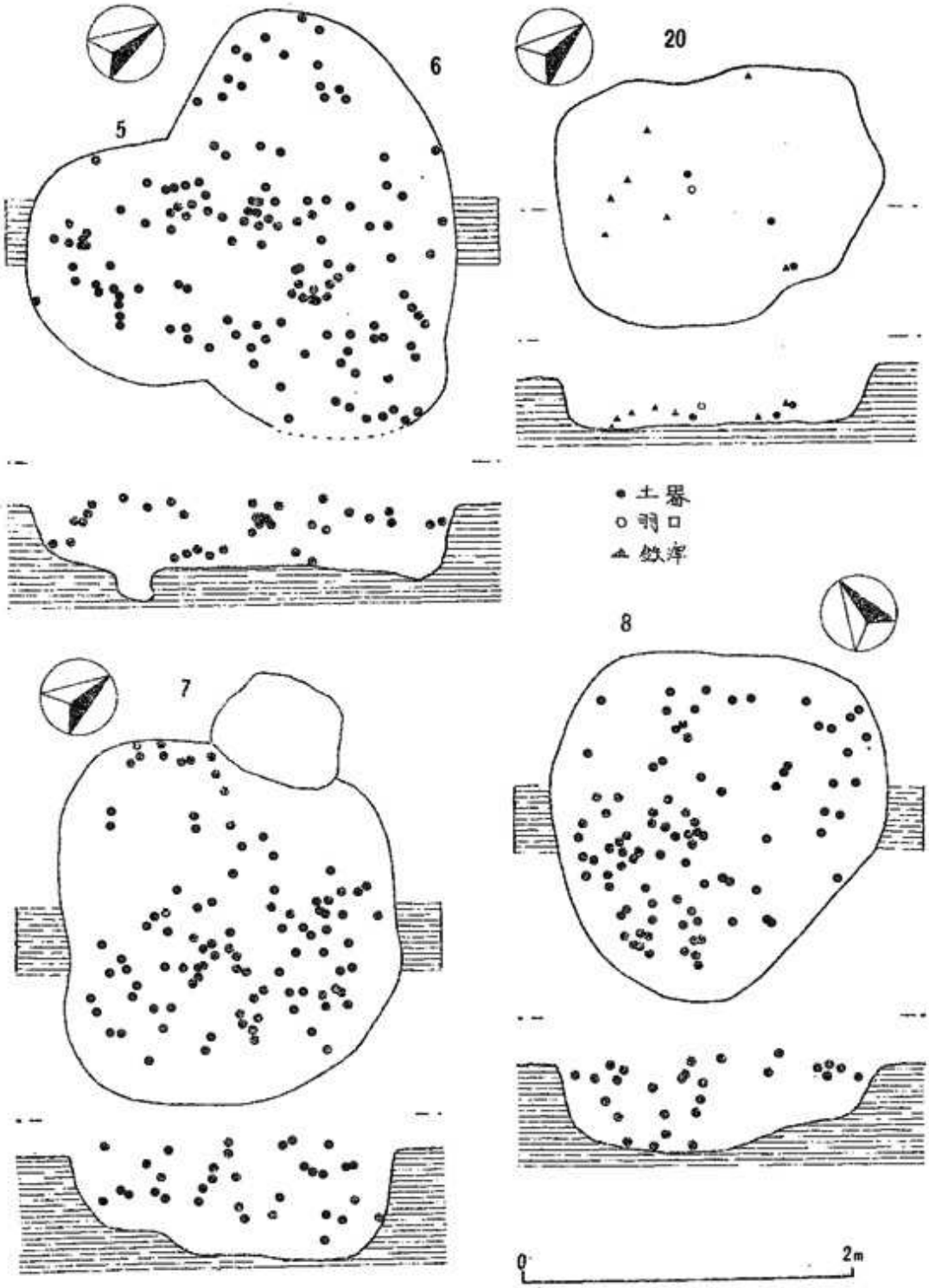
7)　土壙の平面実測を行なう。

この各段階で写真撮影，土器の取り上げ等を行なった。

各土壙における遺物出土状態は，土壙上部から壙底にかけて万遍なく出土するのが一般的であ



第45図　土壙（16・17号）遺物分布図(1)



第46図　土壙（5～8，20号）遺物分布図

第47図　土壙（23，36号）遺物分布図

る。ただ，浅い土壙については遺物出土量が少ない（第46図20)。覆土は多くの土壙で3乃至4層に分離したが，これらは自然埋土と相異し一括埋め戻しの様相を呈していた。例えば，9号土壙は1層出土遺物と6層出土遺物が接合する（第14図）など，土層の色調，含有物等相異しても一時期に埋戻しが行なわれたことを物語る。

また，土壙間接合も認められている（第51図)。これらは写真によって確認されている。2号土壙と16号土壙は46mの距離をもって接合している。19号土壙と42号土壙例も15m隔てて接合している。詳細に分布すれば今後土壙間接合例はさらに増加するものと思われる。土壙の性格については次節で述るが，単独で長期に亘って営まれたのではなく，比較的短期間の一時期に群をなして形成され，また一時期に廃棄されたことを窺わせる。すなわち，土壙の機能が完了すると同時に単にゴミ棄て場として利用されたのではなく，むしろ積極的に埋め戻されたのではあるまいか。

このことは，平安期における遺構・遺物の「廃棄」理念を考える上で重要な問題を提起しているものと思われる。また，その背景として遺跡・遺構の性格にも密接な係わりを持つものとして考慮されなければならないだろう。

第2節　遺構について

本調査によって検出された遺構は，平安時代に比定される住居址，土壙群，井戸址等であった。前章でも述たとおり，これらの遺構から多量の鞴羽口，鉄滓が出土し，鉄生産・加工に直接関係する遺構ではないかと推察されるのである。

本稿では「土壙」と総称した遺構について触れてみたい。

出土した土壙は形態・規模から以下のように分類される。

1)　円形乃至楕円形プランを呈し，径1m前後の小形なもの。代表例9・19，40号等。

2)　円形乃至楕円形プランを呈し，径2～3mと1)より大形なもの。代表例・6，26，36号等。

3)　長楕円形プランを呈し，長径4m前後となるもの。例・16，42号。

4)　長方形乃至長方形に近いプランを呈し，比較的壙底の浅いもの。代表例・18，20号等。

5)　その他，不整形なもの。代表例・10号等。

最も多い形態は2)で全体の約½を占める。逆に少ない形態で3)で，16，42号の2土壙のみである。また，縦断面が2段となる土壙も一定の割合いを占める（21，26，35号等)。しかしながら，これらの形態・規模分類は，土壙機能の相異とは具体的に認められず，壁，壙底にも明瞭な差異は見出されないのである。

鉄生産・加工に係る遺構は，製鉄址（溶鉱炉)，大鍛冶場，小鍛冶に工程分類される。製鉄址遺構は群馬県菅ノ沢遺跡（註1)，埼玉県大山遺跡(註2）等，近年では数多く発見されており，その構造も次第に明らかにされつつある。炉は円筒状，長方柱状のシャフト炉と考えられており，炉壁，炉底は高熱を受けた痕跡が顕著であるとされている。

本遺跡出土例については，莫大に消費するとされる木炭が僅に残る程度であること，加熱され

たと思われる痕跡も局部的であり，焼土が認められる程度であること等により製鉄址とは考え難い。

大鍛冶・小鍛冶における炉構造は不明な部分が多い。神奈川県上谷本第二遺跡（註3），福岡県笹栗遺跡（註4）等では大鍛冶場と推定される遺構が検出され，千葉県鴻ノ巣遺跡（註5），茨城県間中遺跡4号住居址（註6）等では住居址内に炉を構築した小鍛冶炉が検出されている。しかし，千葉県山田水呑遺跡（註7）例のように遺構は検出されないけれども鉄滓，羽口が出土する遺跡は多い。これは鍛冶炉が破壊されてしまうために遺構が不明確となってしまうことも起因しよう。

本遺跡の土壙群は鍛冶工程のどの段階に位置する炉であるのか不明であるが，大鍛冶工程でも幾つかの段階があり，平面プランの相異はその段階を表わす形態差と考えられまいか。このことは前述したように，具体的な論拠に欠けるので提示するにとどめたい。また，小鍛冶炉も存在しているものと考えられる。第2号住居址内ピットはその機能を有するものであろう。

以上，本遺跡出土「土壙」について触れてきた。「土壙」の大部分については鍛冶に関係する炉であろうと推定したが，段階的には把握出来なかった。従って，本遺跡出土「土壙群」の大部分が鍛冶に関する遺構であることから『鍛冶炉址群』と総称しておきたい。鍛冶炉址における段階細分は，今後鉄滓分析等を通して鋭意究明したいと考えている。

註1　飯島武次，穴沢義功「群馬県太田市菅ノ沢製鉄遺構」考古学雑誌55巻2号1969年
2　高橋一夫「製鉄遺跡」考古資料の見方（遺跡編）1977年
3　中央大学考古学研究会編「上谷本第二遺跡A地区・B地区」1971年
4　福岡市教育委員会編「笹栗古代製鉄遺跡発掘調査報告」1969年
5　千葉県都市公社「柏市鴻ノ巣遺跡」1974年
6　霞ヶ浦文化研究会「岩瀬・間中」1976年
7　山田遺跡調査会「山田水呑遺跡」1977年

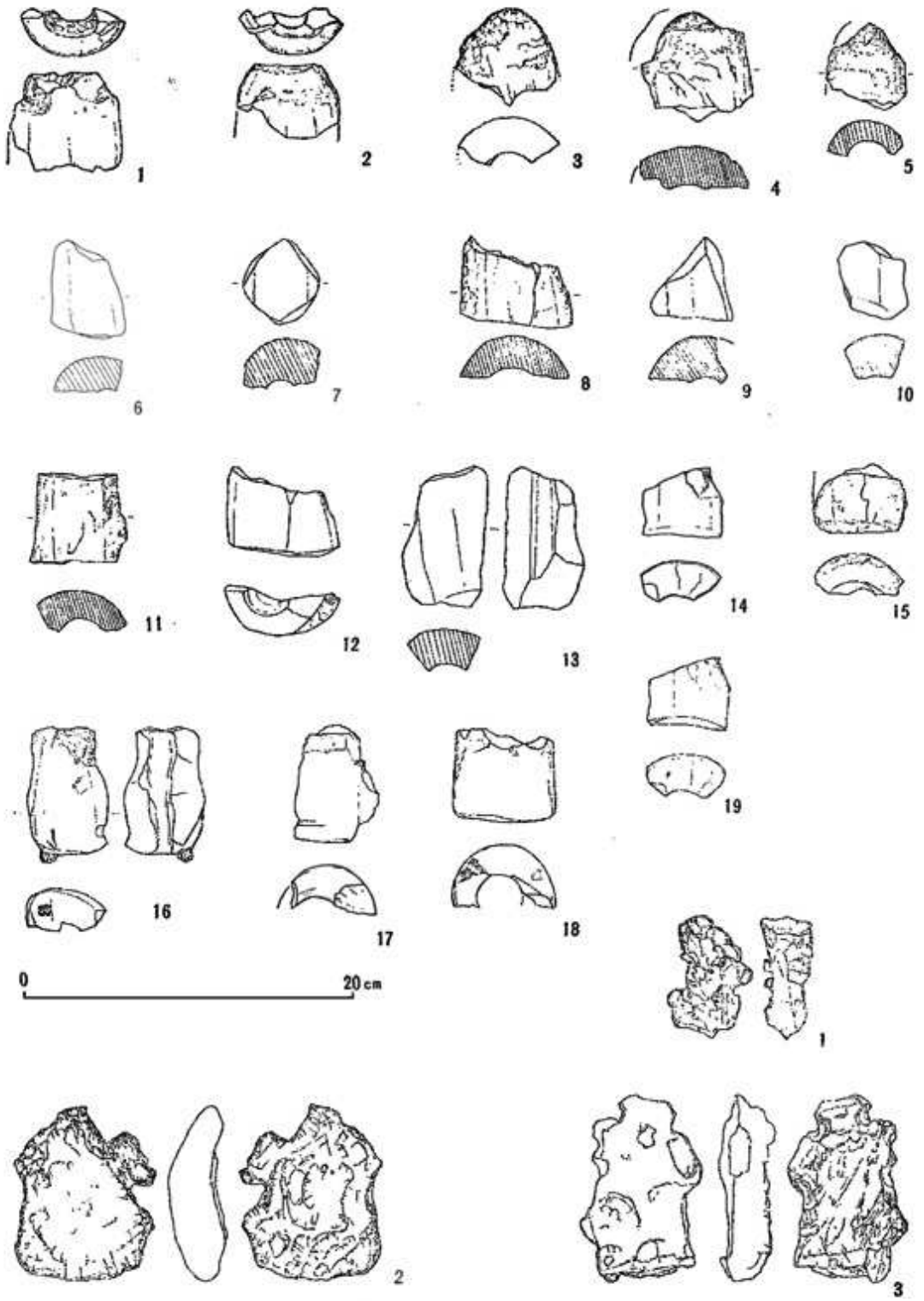
第3節　遺物について

A　鞴羽口

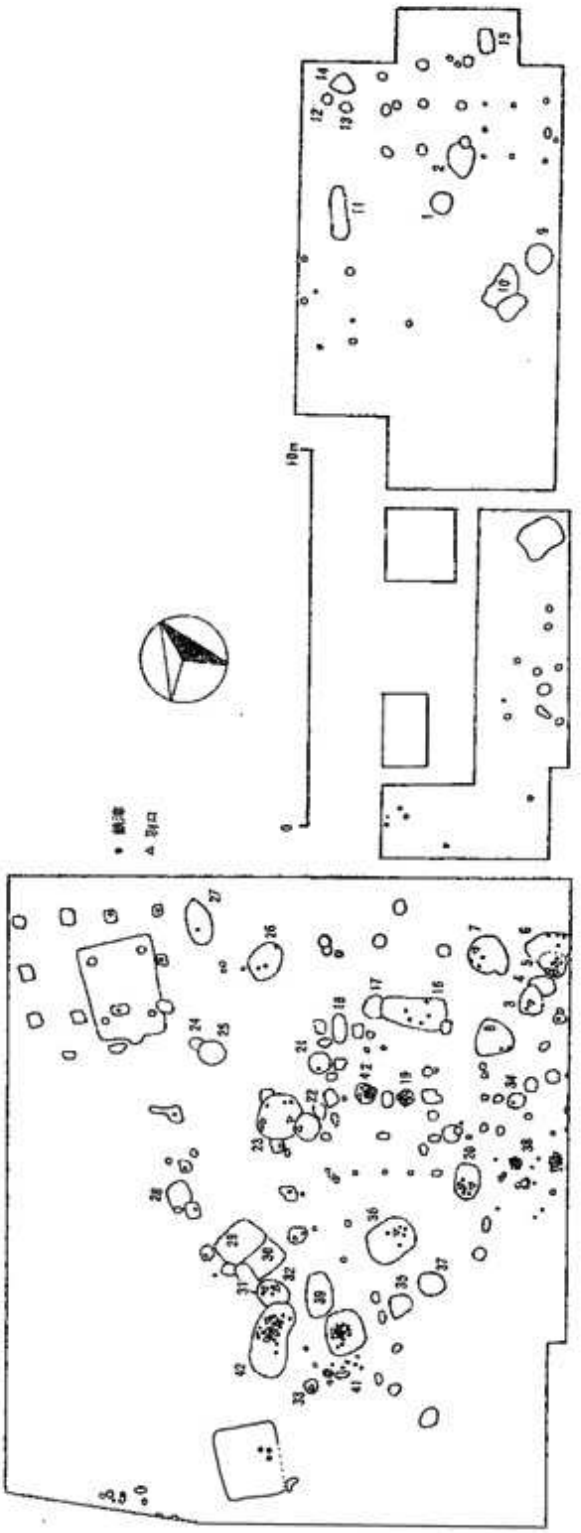
羽口は鞴から炉に通ずる送風管である。鞴は炉内（製鉄，鍛冶等）に送風して燃焼を盛んにする道具であり，鹿の皮，猩の皮を用いたとされている（註1）。すなわち，鞴が燃えてしまわないよう先端に装着して送風したものである。材質は殆んど粘土製であるが，宮崎県下では若干石製羽口が出土している（註2）。

本遺跡から出土した羽口はすべて土製で，破片数約90点であった。いずれも遺構内に廃棄された状態での出土状況であったが，19号（第20図5～8），32号（第24図1），42号（第31図）土壙出土例はほぼ完形品であった。形態的には1，全長13cm前後で口径（幅）が先端で約5cm，末端で約7cm。2，全長10cm，口径が先端で約4cm，末端で約5.7cm。3，全長11cm，口径は先端で約4.8cm，末端で約8cmに3分類されるが，孔径は先端で1.8～2.4cm，末端で3～4cmと大差ない。

製作方法は19号出土例（第20図5）のように，心棒の周囲に板状の粘土紐を押しつけて形作ったものであろう。また，32号土壙出土例（第24図1）のように器表面にヘラ削り調整を施したも



第48図　輔羽口・鉄滓



第49図　羽口，鉄滓分布図

のや，第48図16例のように心棒によって末端の孔を拡げた後手でしぼり込んだ例もある。しかしいずれも焼成等が不良で粗雑なのが一般的である。

羽口の先端は高温にさらされ，溶融状態を呈している。その一ケ所は溶融物が波状に突き出ており，おそらく下にした部分と考えられる。

また，19号土壙出土例は同一形態であること，胎土，色調，焼成具合いが相似すること等により，一ケ所における羽口数は３～４本をセットとしていたものと考えられる。

註１・２　石川恒太郎「日本古代の鉧鉄の精錬遺跡に関する研究」1959年

B　鉄滓

鉄滓については科学的分析によって詳細に論じられるべきであり，本稿においては概略を述べ，今後の課題としておきたい。

鉄滓には，製鉄の段階での製錬滓と鍛冶段階での鍛冶滓とに分類されるが，細くは「たたらの炉熱ののぼりきらない時期の上りの鉄滓，炉熱が上昇して溶解した過程の下りの鉄滓，さらに炉床に残った鉄滓，鍛冶屋の左下場作業の鉄滓，本場作業の鉄滓などの５種類」があるとされている（註１）。製錬滓と鍛冶滓との外観上の相異は，製錬滓は流動性のあるもので表面が飴状で平滑であるのに対し，鍛冶滓は表面が粗雑で粗鬆な多孔質のものが多い（註２）とされる。

出土した鉄滓は多量であり，大きさは10cm以上で500ｇを越えるものから数cmの小さなものまで多種である。しかし表面はいずれも凹凸が激しく粗雑で多孔質である。第図１，２はその代表例であり，１は90ｇ，２は520ｇを測る。３は正面が飴状を呈しており，離面は粗雑であるが唯一の流動性をもった鉄滓である。

このように，大部分の鉄滓は２つの椀形滓であり，遺構の項でも触れたように，大鍛冶を含む鍛冶段階での鉄滓であると考えられる。

註１　文化財保護委員会「埋蔵文化財発掘調査の手びき」1966年
註２　窪田蔵郎「製鉄」考古学講座９所有1971年

C　鉄製品について（第50図）

各遺構では取り上げなかったが，いくつかの土壙より８点の鉄製品が出土した。いずれも錆の附着が著しい。１，６，７は刀子の類と思われる。２は鉤形の製品で，断面はほぼ円形である。３は厚さ２～３mmの薄い鉄片であり，形態は蝶蝶形である。かなりねじれている。４は断面方形を呈す。釘であろう。８はリング状を呈すが，用途は不明である。

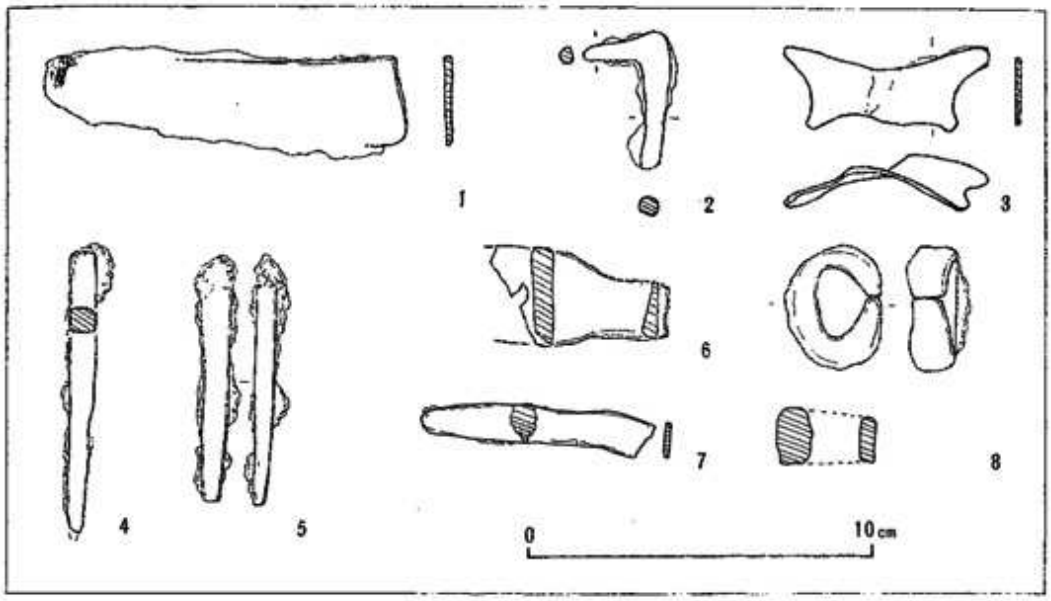
D　土器

出土した土器は坏形土器が圧倒的に多く，他の土器が稀少なことから本稿では坏形土器について触れることにしたい。

坏形土器は，土師器と須恵器に大きく分類されるが，この他に土師質須恵器がかなり一般的に存在する。

土師器坏形土器はすべてロクロ使用土器であるが，技法・形態から以下のように分類される。

Ⅰ類　全体的に大きめで，器高が5cmを超える。丸味が強く，底部と底部周辺を手持ちヘラ削りする例と回転ヘラ削り調整を行なう例とがある。内面はすべて黒色処理される。



第50図　鉄製品

Ⅱ類　口径12～13.5cm，器高３～4.5cmで，底部と底部周辺を手持ちヘラ削りする例と回転ヘラ削り調整を行なう例とがある。器形はやや内湾ぎみとなる。内面は黒色処理され，丁寧なヘラ磨きが行なわれる。

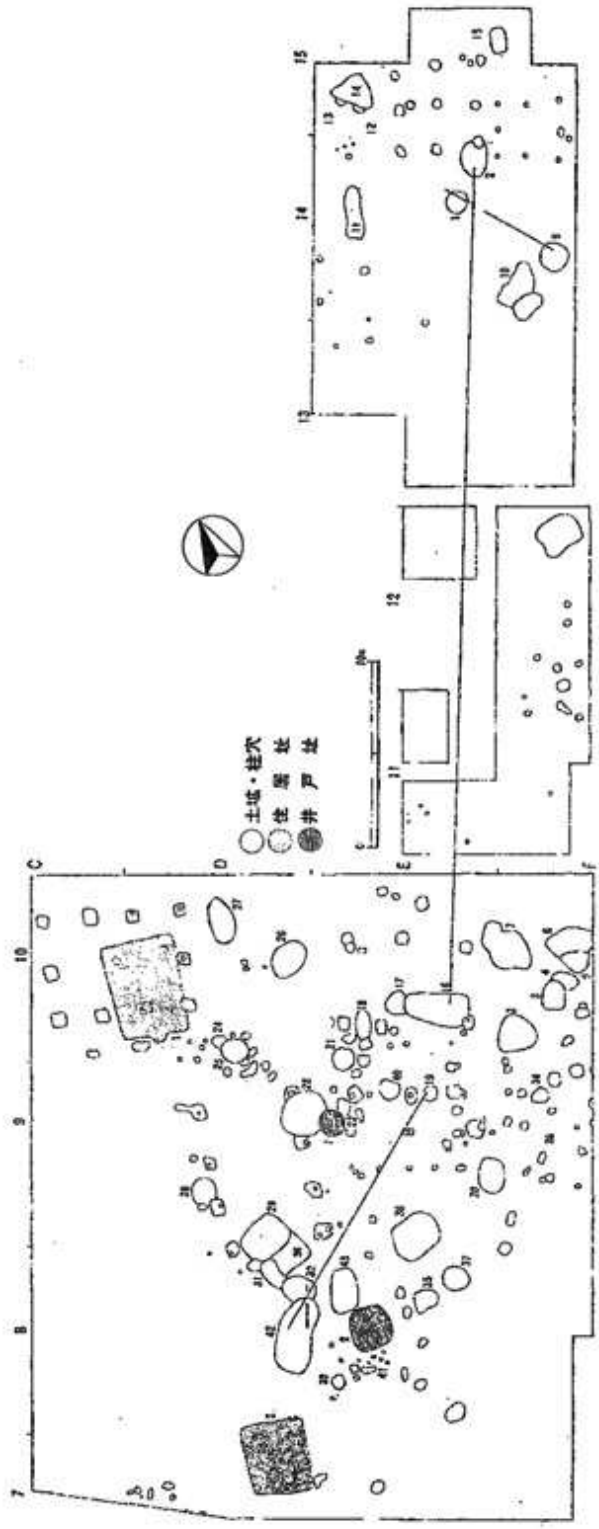
Ⅲ類　底部に糸切り痕をとどめ，器形は直線的となる。内面底部は平底となり，体部とは明確に分かれる。

須恵器は，静止糸切り痕と思われる第32号土壙例１点を除き，他はすべて回転糸切り手法を用い，再調整は施されていない。器形的には，器高4.5cmで傾斜の急な例と器高3.5cmで緩く立ちあがる例とがあるが，完形品が少なく統計的分類は不可能であった。土師質須恵器は技法・形態的には須恵器と同様である。

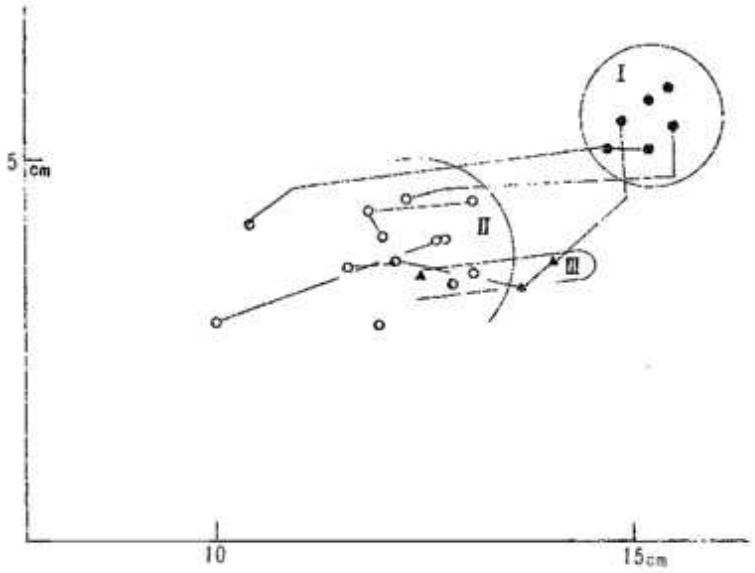
各遺構出土土器は製作―使用（破損）―廃棄の過程を経ているのであり，厳密には同一遺構内出土土器の製作，使用の同一性を指摘出来得るものではない。しかし，各遺構における遺物状態は一括廃棄された相様を呈しており，遺構間で接合した遺物もある（第51図）。従って，同一遺構内における完形品等の遺存率の高い土器はほぼ同一時期に使用・廃棄されたとみなすことが可能である。

第２表は，土師器坏形土器類別による法量比グラフである。Ⅰ類はⅡ・Ⅲ類と明確に区別される。Ⅱ・Ⅲ類は混在するが，Ⅱ類に比較しⅢ類は器高が低く，口径が大きい。接合線は一括資料として把握される同一遺構内出土別である。９号土壙はⅠ・Ⅱ類，２号井戸址はⅠ・Ⅱ類，42号土壙はⅠ・Ⅱ・Ⅲ類をそれぞれ判出する。

国分期におけるロクロ使用坏形土器の細分編年は，底部切り離し技法，さらに再調整方法によって行なわれている（註１）。回転糸切り技法によって切り離された後無調整のものは，ヘラ削り調整される例より新しいとされている。ロクロ使用による技法は，明らかに須恵器から土師器に



第51図　遺構間接合



第2表　土師器類別による法量比（接合は同一遺構）

伝播したものであり，その意味では土師器第Ⅲ類は本遺跡出土須恵器と技法・形態が類似しており，影響を受けたより後出的な土器と考えられる。しかし，土師器坏形土器の主体はⅡ類であり，回転糸切り痕をとどめる須恵器坏形土器を確実に伴出すること，土師器Ⅰ～Ⅲ体は共存すること等により，3類とも大きな時間差はないものと思われる。従って，土師器Ⅰ～Ⅲ類及び須恵器をⅠ群として把え，平安期の一時期の所産として考えたい。

東北地方では，回転糸切り後無調整の須恵器坏形土器は9世紀後半を初源とする事実が確認されている（註2）。また，関東地方では9世紀中葉には存在していたとされる（註3）。当地方でも同様な見解を示している。従って本遺跡でも，須恵器回転糸切り痕をとどめる坏形土器の影響を受けない土師器Ⅰ・Ⅱ類が存在することにより9世紀後半には営まれたと思われるのである。また，土師質須恵器が存在する反面，灰釉陶器が認められないことを考慮すれば，11世紀代が下限とされよう。

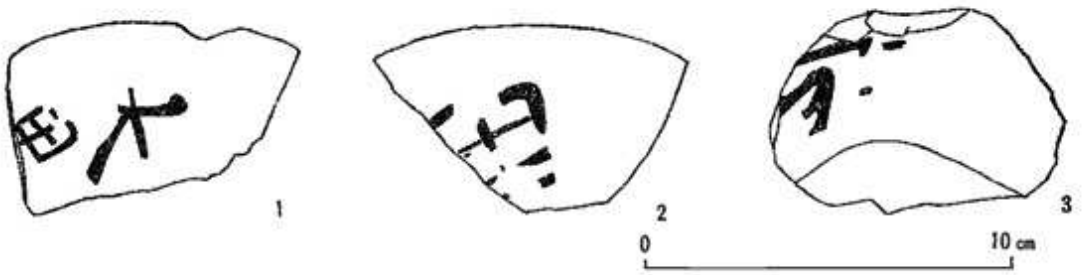
なお，墨書土器が若干出土した（第52図）。すべて土師器第Ⅱ類に分類される土器である。残念ながら，水分の多い土中に埋れていたのと，土器洗浄における不注意により何れも判読不可能である。1，3は2号井戸址出土。2は7号土壙出土である。

註1　栗原滋郎「多賀城廃寺（土器）」多賀城調査報告Ⅰ　1974年
高橋一夫「国分期土器の細分・編年試論」埼玉考古第13・14号　1975年
2　岡田茂弘・栗原滋郎「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要　Ⅰ1974年
3　坂詰秀一（編）「武蔵新久遺跡」　1971年

E　木製品について

A地区

1，2号井戸址から出土した木製品は，伴出遺物等により平安期に比定される。



第52図　墨書土器

特に注目されるのは，２号井戸址出土の円形曲物底板（上板）で「言」と読みとれる焼印が認められたことである（註１）。不整然な配列であり，文章的な意味は認められないが，ほぼ全面に焼印されている。曲物に焼印を施した例としては，静岡県伊場遺跡，群馬県日高遺跡等に認められる。伊場遺跡例は「太」「足」と読める「焼印のような人為的焼焦し」であるとされている（註２）。日高遺跡例は曲物側板に「信」と読める焼印がなされている（註３）。どういう意識下でなされたのかは不明であるが，本遺跡出土例は配列が不整然であること，「乙」，「二」等「言」の一部のみ転用して焼印された部分もあること等により，全体的には試し印の性格が強いように考えられる。しかし，一部の文字については，焼印したのち更に彫っていると推定される事を考慮すれば意識的に焼印された部分もあると考えるのが妥当であろう。

また，一号井戸址出土の柄状木製品２例は，同一形式である事を考えれば，本遺跡において普遍的な用具であると考えられまいか。類例は現在のところ見出せないが，形態的には工具類の柄と思われる。そして，先端の焼き焦しは２例とも認められ，使用中に被ったものと推定される。本遺跡出土遺構の多くは鍛冶炉址と考えられることから，それに付随する道具であると考えておきたい。

Ｂ地区

井戸址と推定される遺構より出土したが，時期を決定する遺物の伴出がなかったため，木製品の時期については明確でない。ただ，漆器や他の木製品の形態から考慮すれば，平安期及び平安期以後ではないかと推定される。

鍬状木製品は，柄装着部が台形孔を穿ってあるのみで風呂などの施設は施してなく，孔もほぼ直角に穿ってあるのみである。木製鍬出現時の弥生・古墳時代に比べるとかなり変化している。また，平安時代の一般的な鍬とも差異が認められる。やはり，中世の所産であろうか。また，２号土壙出土の円形曲物の底板は，内外面ともシャープに加工されており，刃物の削り痕がほとんど残らない平坦さである。側板も内側に切り溝を入れて，曲り易くし，また非常に薄く加工しているなど，かなり高度な木工技術を看取することができる。

註１　国学院大学教授樋口清之博士の御教示によれば，焼印したのち更に彫ったものと思われるとのことであった。

２　浜松市遺跡調査会「伊場遺跡遺物編Ⅰ」1978年

３　群馬県教育委員会の御厚意により写真を御提供願った。

第Ⅵ章　ま　と　め

昭和53年春は異常に積雪が多かった。発掘調査の経緯の中にも記してあるとおり，4月中旬にいたってもまだ所々に残雪がみられた。下旬にいたり平地はやっと雪消えの時を迎えたのである。従って発掘調査は当初の予定より大分おくれ，4月下旬にいたってやっと開始される有様であった。

環境の項で記したように発掘調査地域は，従来遺跡と認定されておらず，分布確認調査でも若干の土師器破片が採集されるのみであった。本音をいえば，大規模な遺跡の存在は全く予想し得なかったといえるであろう。発掘調査の進展に伴なって私達が全く予想だにしなかった鍛冶炉址遺構群と井戸址の発見という大きな成果を得た。それだけに大きな戸惑と，どうまとめてゆけばよいかという悩みが私達の前に大きく立ちはだかったことも事実である。

現在の考古学研究の進展は目ざましいものがあり，古代文化は次第に私達の前にその姿相を鮮明にしつつある。しかし，こと生産址に関しては一部を除き近年にいたりやっと究明されはじめたといってよいであろう。

特に鍛冶炉址遺構は，そのもつ性格上，仕事が終了した段階で破壊される運命にあるためか類例がいたって尠く，研究上大きな障害であったといえよう。私達は，今回の調査に基づいていささかなりとも鍛冶炉址についての所見をもつものであるか，敢えてそれについての考えを述べることなく，事実のみを記述して今後の研究の一指針とするとともに，大方の御教示を得たいと念願して本報告書を作成した。

遺構について

さて，発見された鍛冶炉址関係の遺物からみる限り，「成果と課題」の項で触れているように，炭化物の出土が少量のことと平地に存在すること，土壙のあり方等からして，本土壙群の姿相は，製鉄炉址ではなく鍛冶の様相を示すものであると考えている。そして，それは，は，大鍛冶，小鍛冶の二面の様相をもつものであると思っている。ただ土壙群の中で，どれが大鍛冶であり，どれが小鍛冶であるかという認定を具体的に持ち合せている訳ではない。しいていうならば，長楕円形をもつ土壙が大鍛冶の遺構であり，小形円形の土壙が小鍛冶の遺構ではないかと考えている。ただ，整理途上における時間的な制約と予算面の制約の中で，出土した鉄塊，鉄滓が未分析であることからどの土壙が大鍛冶址であり，どの土壙が小鍛冶址であるということが断定し得ないのである。このことについては今後の課題としておきたいと思う。それにしてもこのように出土した貴重な遺構も遺物も充分に究明する時間的余裕と予算的措置がなかなか得られず，次々と発掘調査に追いまわされ，折角の貴重な研究材料も棚ざらしにされる運命にあることを思うと胸の痛みをつよくおぼえるのである。

井戸址についてみると，環境の項で触れているように遺跡地は，地下水が高く若干掘り進むと容易に水が得られるのである。発掘した2基の井戸址は素掘りの井戸であって，何等の施設もない。井戸中から植物性遺品が多く発見された。特に2号井戸址から発見された文字を刻印した曲

物の上板ないしは底板と考えられる遺物は大きな成果といえるであろう。その他に2号井戸址からは矢板状，杭状木製品が出土している。一般的にいって，2号井戸址では，上部から土器や鉄滓，鉄塊が多く出土し，下部にいてるに従って木製品が多く出土している。

1号井戸址は，2号井戸址に比較して土器，鉄滓等の出土は少ない。ただ，物差状木製品をはじめとして，木製品がかなり出土している。

さて，この2つの井戸址と土壙群との関連はどうであろうか。1号井戸址は，2層の粘土層は井戸廃絶後土壙底として再利用したことが充分考えられるところから，土壙群とほぼ同時期か若干先行する時期のものと考えてよいであろう。2号井戸址は，その出土遺物からみて，土壙群と同時期のものと考えてよいであろう。いうなればこの2基の井戸址は鍛冶炉址遺構群に伴なう井戸址と見做して差支えないであろう。従って，本遺跡の中で重要な役割を果たした遺構といえるであろう。

遺構における遺物廃棄について

次に土壙及び井戸址における廃棄についてみてみよう。例えば9号土壙は1層から8層までに層序区分がなされている。そして，1層出土土器と6層出土土器が接合し得た。従ってこの関係からみる限り層序は相異をするけれども非常に短時間内で9号土壙が埋め戻されているといってよいであろう。もっと極論すればいっきょに埋め戻したと考えてよいのではなかろうか。更に2号土壙と19号土壙，19号土壙と42号土壙出土の土器がそれぞれ接合し得たことからするとこれらの土壙は，同時期に破却され，そこに土器が投棄されたと考えてよいであろう。更にまた，本土壙群出土土器が年代的にほとんど差がないことを考えれば，比較的短期間中にいくつかの土壙が形成され，その任務を終った段階で破却し土器，鉄塊，鉄滓等を投棄したとしてよいであろう。井戸址もまた同様にその任務が終了した段階で廃絶されたものであろう。今後の詳細な分析と究明で，どの土壙とどの土壙がほぼ同時期に形成され，廃絶されたかが判明するものと思っている。「成果と課題」の項で触れているように国分期における鍛冶土壙，井戸址に対する人々の心情が，土壙，井戸址の廃絶によく読みとれると思うのである。単に凹地があるから埋めたという簡単な論理ではないのである。そこには信仰にも似たものが存在したのであろう。

合口甕棺墓について

合口甕棺墓について若干触れておこう。本遺跡唯一の発見例である。2号井戸址に近接して出土した。その出土状態については，遺構の項で記しているので省略する。平安期における墓制は，土壙墓が一般的である。長野県内における平安期の土壙墓については，桐原健氏がすでに集成し，所論を述べている。しかし，合口甕棺墓については，資料が僅少であり不明であるといってよいであろう。合口甕棺墓は，桐原健氏の教示によれば現在までの所，長野県では「上高井郡小布施町立場遺跡」「松本市筑摩」「松本市宮淵遺跡」「長野市三才遺跡」の4例が知られているのみである。北原遺跡の例を加えてもわずか5例にしか過ぎない。しかも三才，北原例を除くとほとんど偶然の発見に基づくものであって詳細については不明部分が多い。そういう意味では北原例は貴重な資料といえるであろう。

合口甕棺墓の資料を集成している北上市教育委員会沼山源喜治氏の教示によれば，東北地方で

の合口甕棺墓は12例であり，この内，土師器内黒坏が１点副葬してあるのが４例認められるという。北原遺跡でも１点内黒坏が副葬されていた。更に沼山氏によれば，近畿，東北地方を中心にして現在30数例の甕棺墓が判明しているという。そして，年代的にも９・10世紀に限定されるらしい。

平安時代に一般的な土壙墓の中にあって，何故合口甕棺墓という特殊な墓制がとられたのであろうか。沼山氏が現在集成中であり，近々その成果が公表されるとのことである。いずれにしても，平安期における墓制の１例として特記するとともに今後この甕棺墓について追求してゆきたいと思っている。

Ｂ地区について

調査開始後，周囲で圃場整備事業が行なわれはじめた。事業の進行に伴ない，東方の谷地状地形で４ケの落込みが発見された。急拠Ｂ地区として調査の対象地域とした。調査の結果，４基の土壙が検出された。１号土壙内から曲物，鍬状木製品をはじめ多量の木製品が出土した。その他３基の土壙内からもそれぞれ木製品が出土した。特に２号土壙内からは椀形漆器が１点出土した。これらＢ地区内４基の土壙は形状，遺物の出土状態からして井戸址とみてよいであろう。これら井戸址内からは年代を明確に示す土器が検出されなかった。ただ，出土した木製品，井戸址よりみて，Ａ地区遺構群より年代が下降した中世の所産と考えている。井戸址の他に土器を中心とした遺物集中箇所があった。ここからは，石臼が１点出土している。

遺跡保存問題

以上のように多く問題点をもつ本遺跡は，奥信濃地方における重要な遺跡であるにとどまらず長野県内でも数少ない貴重な遺跡であることは論をまたない。従って，調査中に何としても保存すべきであると調査団は考えるにいたった。そして，周辺の分布確認調査を通して，本調査地域が遺跡の西端にあたり，東側にこそ中心地域が存在するとの結論を得た。万一，中心地域である東側が，今後調査する必要に迫られた場合，本調査地域が保存されておってこそ大きな意味と価値があると結論した。そこで，調査に従事して頂いている地元の方々にいろいろおききしたところ，「圃場整備事業に伴ない畑地が減少する。何とかこの平坦地に畑地が確保できないだろうか」という声が調査地域を割当てられる人達からでているとおききした。もし，畑地になれば耕作者にとっても好都合であり，遺跡保存も容易である。調査団は，直に遺跡保存の取組みを開始した。そして，昭和53年５月30日，長野県文化課の仲介によって，北信土地改良事務所，圃場整備実行委員会，飯山市教育委員会，調査団の話合いが市役所内でもたれた。この話合いの中で，事業関係の方達も遺跡の重要性を充分に認識された。そして，調査地域の東端をほぼ南北に走る幹線道路の変更は，現時点にいたっては無理であるが，道路部分をＰ・Ｆ・Ｃ方式によって埋立てて遺構の破壊を防止し，遺構内に砂を埋め畑地とすることにしたいという提案がなされた（埋立の経費は北信土地改良事務所負担）。

調査団としては，理想的保存ではないけれども現時点にいたっては，やむを得ないと考えこの提案を了承した。この話合いに基づき全作業終了後の７月15日，17日の２日間にわたって遺構の埋め戻しが行なわれた。発掘調査地域は，今畑地として耕作され遺構がその下に静かに眠ってい

る。思えば，遺跡保存がたいした摩擦もなくスムースに進行したのは，何といっても地元の人達の「郷郷の文化財は私達が守り育てる」のだという熱意と理解があったからに他ならない。また，北信土地改良事務所，圃場整備実行委員会の埋蔵文化財に対する深い理解があったからでもある。更にその間にあって，終始保存の方向で話を進められた長野県文化課の関孝一指導主事の努力も忘れてはならないことである。いずれにしても，調査に関与された関係機関，地元の人達の理解があってはじめてなしとげられたといえよう。改めて，敬意と感謝の念を捧げたい。

保存方法については，種々と不満や問題点があると思う。しかし，調査団としては，保存にいたるまでのプロセスを重視して，一定の成果があったと評価している。

調査地域の保存が決定した段階で，調査地域が遺跡全体からみると西端にあたり，東側に中心地域が存在すると考えられるところから，飯山市教育委員会は東側畑地の未発掘部分全体を市史跡に指定することとし，土地所有者方々と数次にわたって折衝を重ねた。そして，昭和54年３月にいたり，土地所有者全員の了解をとりつけた。対象面積は，約25000平方メートルである。土地所有者の方々に改めて敬意を表したい。

常岩の牧との関連

平安末から鎌倉時代，室町時代にかけて，常岩の牧（官牧）が外様平を中心として存在したと郷土史家は説いている。北原遺跡の遺構や遺物が直接常岩の牧と結びつくかどうかは，史料と出土遺物の間に年代的隔たりがあるため速断できない。しかし，常岩の牧を形成する素地が，北原遺跡を中心として外様平に存在したことは疑いないであろう。郷土史家側からのアプローチを期待して，この問題についてこれ以上触れることはさけたいと思う。末尾ながら種々と御教示，御指導いただいた国学院大学教授樋口清之，同大学講師永峰光一両先生，長野県史刊行会桐原健氏，長野県文化課指導主事丸山敞一郎，関孝一両氏に心から御礼申上げたい。更に物心両面にわたり御援助，御協力いただいた地元の皆さんにも感謝申上げたいと思う。

追記　第Ⅱ章第２節歴史的環境の項で弥生式中期中半の土器は発見されていないとしたが，その後の検討の中で飯山市太田小境出土土器が栗林Ⅰ式土器に該当することが判明した。従って，奥信濃の弥生式文化は中期中半まで遡らせることが可能となった。これについては，後続して発刊される「鍛冶田」を参照されたい。

参考文献

1. 高橋拙「北原遺跡」飯山市教育委員会1979年
2. 桐原健「平安期土器蔵の性格」信濃第28巻１号1976年

図　　版

遺跡遠景（西より）

遺跡近景（南より）

発掘風景

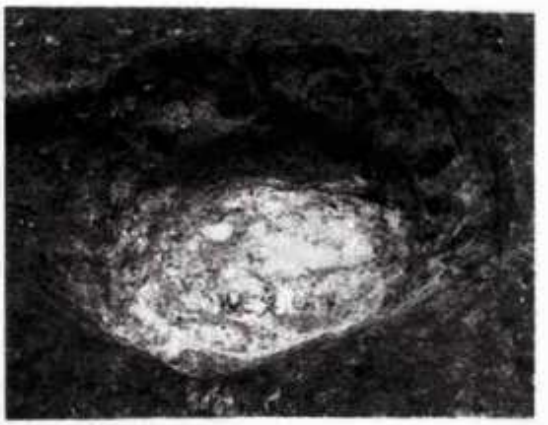
第1号住居址及び第3号掘立柱建築址（南より）

第2号住居址（北より）

第１号掘立柱建築址（南より）

第４号掘立柱建築址（北より）

第1号土壙

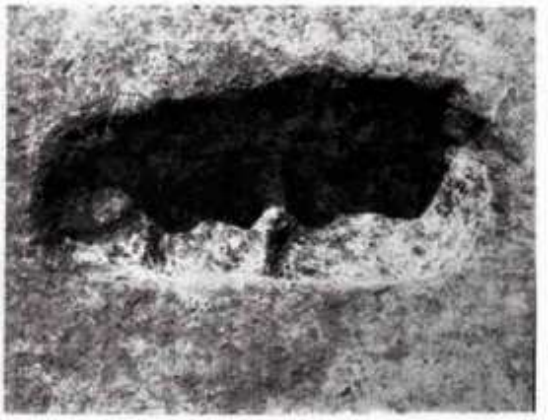


第2号土壙

第5．6号土壙

第8号土壙

第14号土壙

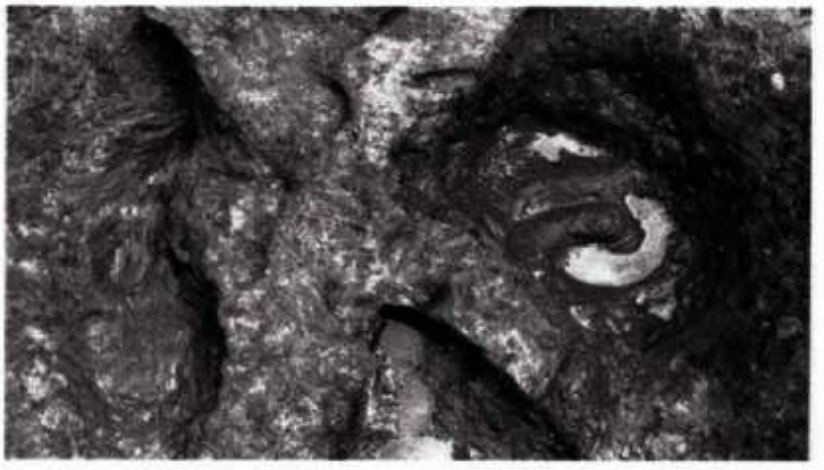


第15号土壙

第９号土壙

遺物出土状態

焼　土



遺　構

第16．17号土壙

第20号土壙

第21号土壙

第23号土壙

第26号土壙

第29～31号土壙

第19号土壙　▲遺物出土状態　▼羽口出土状態（東より）

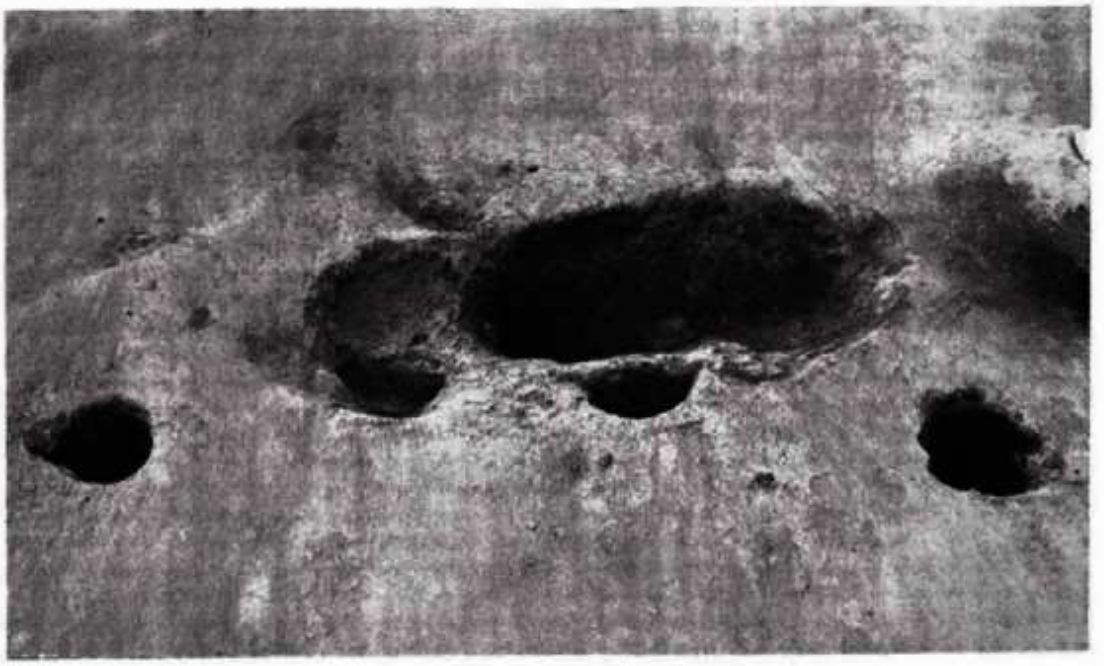
第32号土壙

第33号土壙
鉄滓出土状況

第36号土壙

第40号土壙　▲鉄滓，羽口出土状態　▼遺構

第41号土壙（合口式甕棺墓）甕棺出土状態（南より）



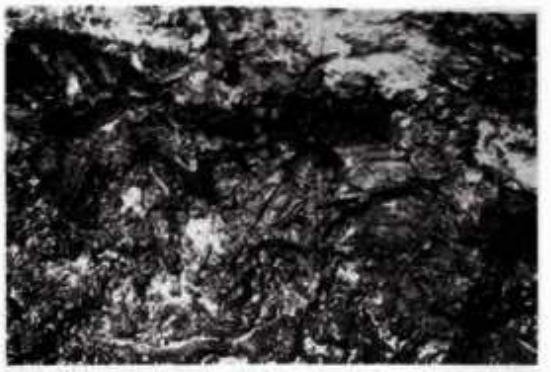
第41号土壙（北より）

第42号土壙

▼羽口出土状態

▼坏出土状態

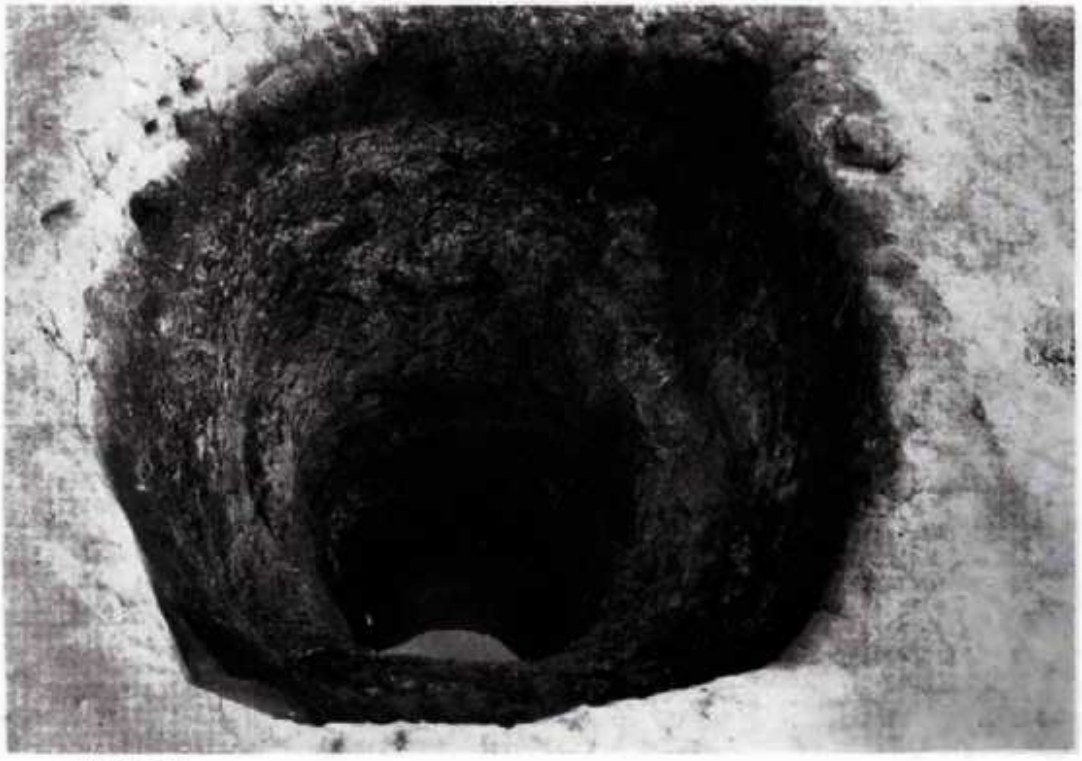
第１号井戸址　木製品出土状態



第１号井戸址　樹枝出土状態

第１号井戸址

第２号井戸址　木製品出土状態

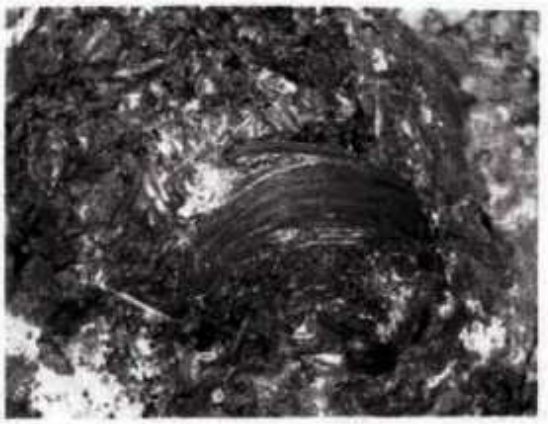


第２号井戸址

B地区全景

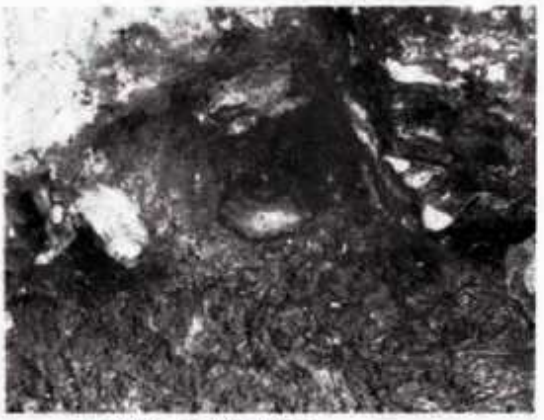
▼ 調査風景

▼ 遺構確認時



1号土壙　曲物出土状態

1号土壙　獣出土状態



2号土壙　漆器出土状態

2号土壙　曲物出土状態

4号土壙　遺物出土状態

石臼出土状態

出土遺物

2号土壙

2号土壙
十16号土壙

2号土壙

7号土壙

7号土壙

9号土壙

1号井戸

26号土壙

32号土壙

32号土壙

図版十九

41号（壺棺墓）土壙

42号土壙

42号土壙

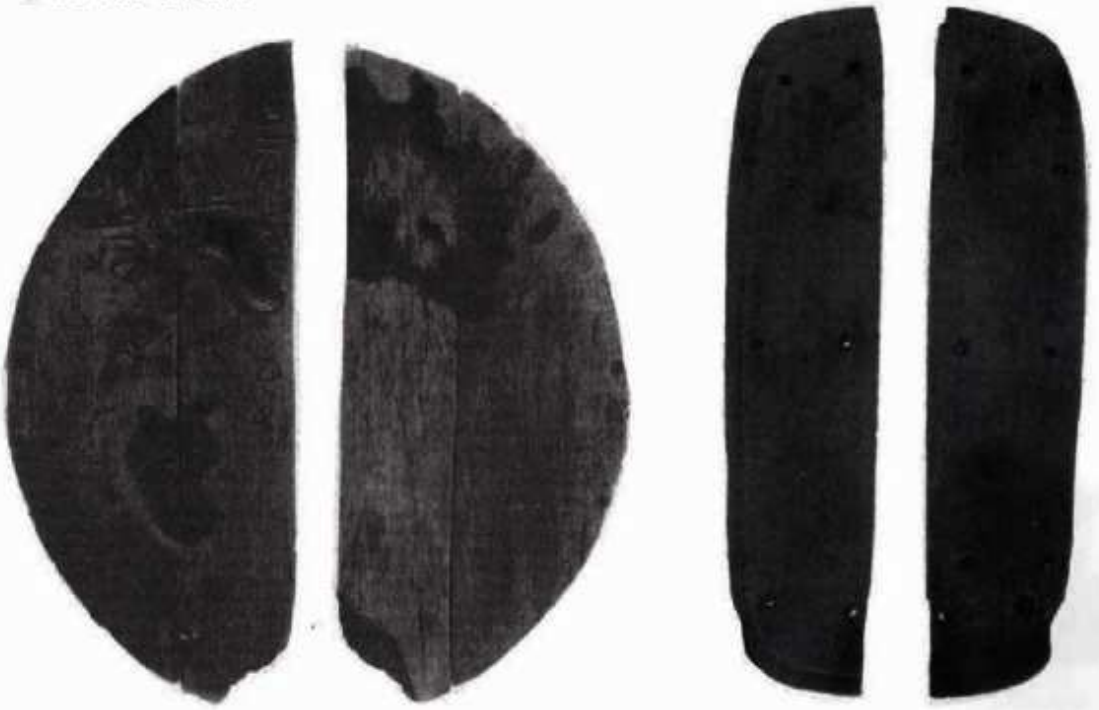
42号土壙

42号土壙

ヘラ記号

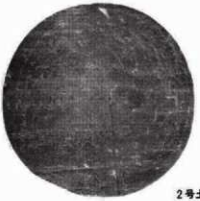
▶
第1号井戸址
木製品

▼第2号井戸址木製品



B地区出土木製品

4号土壙



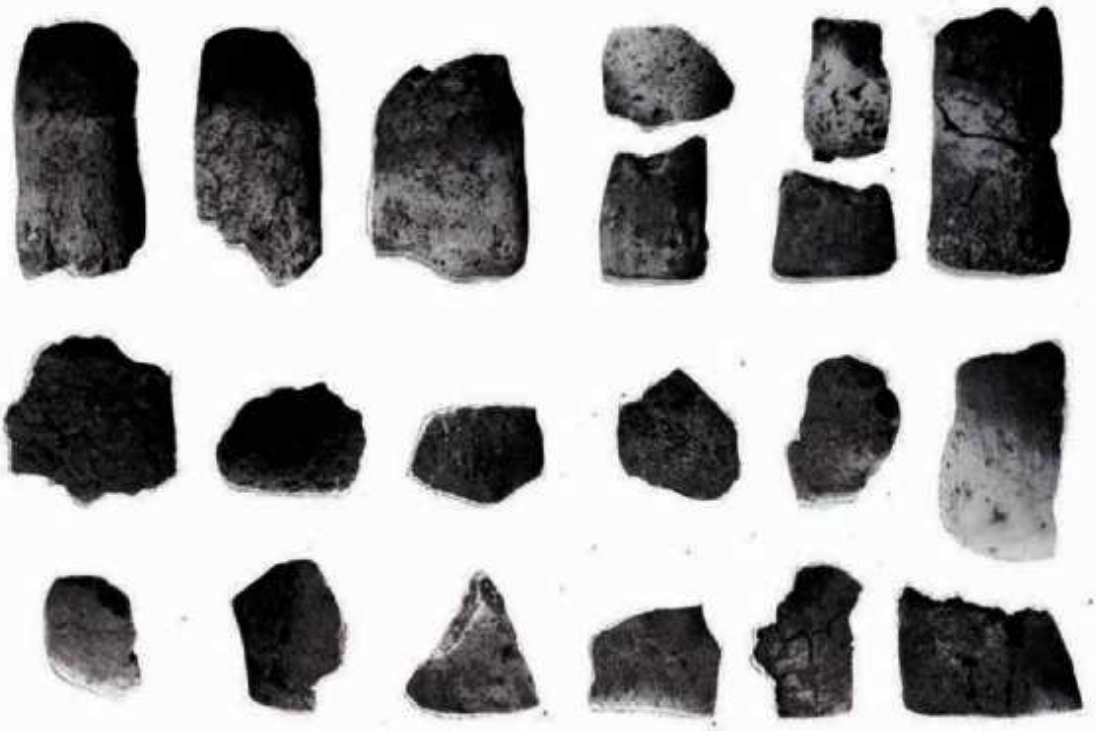
2号土壙

1号土壙

外側

内側

図版二十二



鉄製品

鉄 滓

石器・石製品

長野県飯山市旭町遺跡群
北原遺跡調査報告書
昭和55年6月4日　印刷
昭和55年6月10日　発行

発行　飯山市教育委員会
長野県飯山市大字飯山1110－1
印刷　三和印刷株式会社
長野県長野市川中島1822－1